

新・追浜 歴史年表

上杉孝良編



追浜地域運営協議会

はじめに

この年表で取り上げた「追浜地区」（旧浦之郷村）は、凡そ現在の追浜行政センター管内と重なります。この愛すべきふるさとの海岸線は自然の起伏に富む絶景の地でした。すでに中世後期には禅僧たちによって「天下の佳境」と詠まれ、近世後期にも坂中観音寺の山頂からの眺望を賞され、「漢地ノ西湖モカクヤランノ勝景ナリ」と記されています。

しかしながら、この風光明媚な自然環境も近代に入って軍施設の進出で、無惨にも大きく変貌してしまいます。今から90年前『田浦町誌』（昭和3年）の筆者は、「惜しいかな帝国国防のためとはいえ、科学文明は自然を破壊して、また昔日の観少なきことを」と嘆きの言葉を遺しています。

今日、「追浜地区」はその自然環境とともに生活環境も大きく変化しましたが、そこには原始時代から現代まで人々が営々と築き上げてきた長い歴史があり、痕跡があります。それを少しでも辿ってみたいとの思いから、この「歴史年表」は生まれたものです。しかし、古代から中世前期（鎌倉時代）にかけては、ほとんど徴すべき史料はなく、その沿革は不詳です。幾らかでも明らかになるのは、中世後期（南北朝・室町時代）以降のことです。後北条氏治世下の領主朝倉氏、近世の浦之郷陣屋（浦之郷代官所）、近代では軍施設の進出にともない村は町へ、そして市へと発展、現代では平和産業港湾都市の市是のもと、軍施設の転用によって戦後復興の一翼を担い、その流れの中で今日に至っています。

以上のような「出来事」を集積した『歴史年表』ですが、これを一瞥するだけで追浜地区の歴史の概要を知ることができると思います。が、一つ一つの「出来事」は断片的なメモに過ぎません。そこに隠されている歴史的事実を掘り下げていただければ、立派な追浜地区の歴史書が出来上がることでしょう。そうなれば望外の喜びです。

本書作成では史料の渉猟もままならず、遺漏もまた誤謬もあるかと思えます。ご寛恕を頂戴するとともに、今後さらに筆を加えていただくことを願っております。

なお、刊行に当たっては、大長勝次氏（NPO 法人よこすかシティガイド協会）をはじめ昌子住江氏（NPO 法人アクションおっぱま理事長）や追浜行政センター事務局など関係者にお世話になりました。記して厚くお礼申し上げます。

令和元年 8 月

平六ヶ入りの茅屋にて 上 杉 孝 良

目 次

◆はじめに	1
◆目 次	2
◆凡 例	3
原始・古代	4
中 世	8
近 世	13
近 現 代	33
明 治	33
大 正	44
昭 和	52
平 成	91
出典対照・略称一覧	100

凡 例

1. 本年表は凡そ追浜行政センター管内の地域(旧浦之郷村)に関する出来事を、原始から平成28年(2016)までの年代につき収録したものである。
2. 各年代については、年号(和暦年)を記し、その下に西暦年を()に入れて記した。改元年は近世以前については、1月1日までさかのぼって新年号を使用し、近現代については改元日の前後で年号を使い分けた。また、明治6年1月1日の改暦(太陰暦は明治5年12月2日)までは太陰暦を用い、それ以降は太陽暦により表示した。
3. 見出しの月日は、日付不明の場合、年月のみで「12. ー」などと不明日を「ー」で記した。また、月日不明の記事は「この年」、年月日を特定することができない記事については「〇〇年間」「この頃」を用いた。
4. 人名については敬称を省略し、年齢の記載は近代(昭和20年)迄は数え年でこれを記した。
5. 地名については、昭和26年4月に浦郷地区(大字本浦、鉾切、深浦、榎戸、日向)の町名地番整理が実施され、新町名(現町名)に改められているが、本稿ではそれ以前の地名でも、旧地番によらず理解しやすい現町名で表示したところがある。
6. 「出来事」欄の事項の末尾に、()で文献等名を記し、出典を明示した。なお、()で出典史料名を記したが、その名称は適宜略称を用いた。その略称については、巻末に史料・文献との対照一覧を付した。併せて考古遺跡関係の参考文献を挙げたので参照されたい。

以上

原始・古代編

年 号	出 来 事
<p>縄文時代早期 (約 9500 年前)</p>	<p>「夏島貝塚」 夏島町2丁目に所在。貝塚は標高46[㍍]西側頂上付近と島の中央部に存在する。貝塚の堆積層は関東ローム層を基盤に褐色土層・第1貝層・第1混土貝層・第2貝層・第2混土貝層・第3貝層・腐植土層となる。出土した遺物のうち土器は縄文時代早期の夏島式土器を中心として、井草・大丸・田戸下層・田戸上層・子母口・野島・鶴ヶ島台・茅山下層・入海・関山式の縄文時代早期から前期までのものが出土している。石器は礫器が主体を占め、特に夏島式に伴うものが多い。これに対し縄文時代早期後半の土器には石鏃が多く伴うなど時期による変化が見られる。骨角牙器や貝製品は第1貝層を中心に多く出土している。なかでも夏島式土器に伴うイノシシ牙製の釣針やその組合わせ式釣針の柄と思われる有孔槌形骨器は日本列島における釣漁の出現を考える上で貴重な資料である。</p> <p>自然遺物では第1貝層が種類・量とも最も多く、貝類マガキ・ハイガイ・ハマグリ他、哺乳類ではイノシシ・ニホンジカ他、魚類ではボラ・クロダイ・スズキ他、鳥類ではキジ・ヨシガモ他などが出土している。その年代は当時開発されて間もない放射性炭素での年代測定が夏島式土器に伴う貝と木炭で試みられ、カキの貝殻は9450±400年以前、木炭は9240±500年以前という結果が得られた。</p> <p>夏島は再度調査が行われ、島中央部から縄文時代早期後葉の鶴ヶ島台式土器を伴うマガキを主とする貝層の存在が確認された他、島の東部から早期中葉の田戸下層式の堅穴住居跡が検出されている。夏島貝塚は国内最古級の貴重な貝塚である。(国指定史跡)</p> <p>「良心寺裏遺跡」 良心寺裏の追浜南町から湘南鷹取1丁目にかけて所在する。丘陵上の緩斜面に立地し、縄文時代早期の条痕文土器が採取されている。</p>
<p>縄文時代中期 (約 4500 年前)</p>	<p>「正光寺裏遺跡」 追浜町3丁目に所在する。正光寺墓地に隣接する標高30[㍍]の丘陵斜面に立地し、縄文時代中期(加曾利式)の土器片が出土する。</p> <p>「正禅寺裏山遺跡」 浦郷町4丁目に所在する。正禅寺裏の丘陵上に立地し、縄文時代中期の土器片および石鏃が採取されている。現状は畑地である。</p>

年 号	出 来 事
	<p>「榎戸貝塚」 浦郷町2丁目、能永寺境内に所在する。土器片等が出土し、縄文時代中期の勝坂式土器から加曾利E式土器が検出されている。</p>
<p>縄文時代後期 (約 4000 年前)</p>	<p>「榎戸貝塚」 能永寺境内に所在。貝層は幅1㍍、長さ6㍍ほどにわたって露出、厚さは約1㍍で、貝層の下には1.35㍍の混貝土層があった。また、貝殻、獣魚骨などの自然遺物と土器、石器、骨角器などが出土している。出土土器は縄文時代後期の堀之内式から加曾利B式、稱名寺式土器にあたる。自然遺物は二枚貝が19種、巻貝22種、獣魚骨は哺乳類7種、魚類6種以上、鳥類2種以上が挙げられる。出土の骨角製漁労具から内湾、外洋ともに漁労が盛んであった様子が窺える。</p> <p>「向坂遺跡」 鷹取1丁目に所在する。丘陵斜面上に立地し、縄文時代と古代の遺物が採取されている。大半が湘南病院敷地内で、ほぼ消滅する。</p>
<p>弥生時代後期 (2世紀～3世紀)</p>	<p>「八王子神社裏遺跡」 浦郷町1丁目に所在する。標高20㍍程の北に張り出す丘陵上に立地し、弥生時代後期の遺物が採取されている。現在は畑地である。</p> <p>「鉾切遺跡」 浦郷町4丁目から夏島町にかけての砂丘一帯に広がる海浜の遺跡。弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡で、焚火跡、手握ね土器、滑石製模造品類など祭祀的色彩が濃い様相を見せている。なお、当遺跡は重層的で古墳時代後期から平安時代(後出)の遺構を包含する。</p> <p>「天神遺跡」 追浜本町1丁目に所在した。夏島湾内に面し、横浜市境の北岸低地に立地する。弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺跡。現在、詳細は不明である。</p>
<p>古墳時代早期 (3世紀後半)</p>	<p>「天神遺跡」 前出の遺跡に包含される。市境をなす天神山先端部に営まれた遺跡で、古式土師器の出土が知られる。弥生時代末期から古墳時代早期頃(4世紀)の遺跡である。</p> <p>「東鉾切遺跡」 浦郷町4丁目～5丁目に所在する。谷中の低砂地に立地する古墳時代から平安時代の遺物散布地・貝塚。正禅寺山門脇に古墳時代前期の貝塚があり、土師器やカキ・アサリ・カガミカイなどが採取されている。また、岡村製作所の工場敷地部分から造成工事中に和泉期の壺型土器とともに、滑石製勾玉・有孔円盤・劔形模造品・白玉などが出土している。</p>

年 号	出 来 事
	<p>「日向遺跡」 浦郷町1丁目に所在する。深浦湾から南入する小入江の沿辺の沖積地に立地する。地表下3m前後に遺物包含層が検出され、古墳時代前期とみられる尖底で外面にタタキ目を施した土師器など土器類、骨角製品、動物骨が良好な状態で遺存していた。</p>
<p>古墳時代後期～ 終末期 (6世紀～7世紀)</p>	<p>「西鉦切遺跡」 浦郷町4丁目に所在した。丘陵中段平坦地に立地する古墳時代の遺物散布地。日産自動車の社宅造成工事中に古墳時代の土師器甕（三浦型甕）などが出土している。現在は社宅地で、造成工事でほぼ消滅した。</p> <p>「鉦切遺跡」 夏島町～浦郷町4丁目に所在する。古墳時代後期の祭祀遺構が良好な形で検出された遺跡である。砂丘上に破碎泥岩で大小の区画が設けられ、内区には牛骨埋納壙、イルカ推骨の埋置、土器の一括出土といった特異な状況が遺されている。出土した土師器は「鬼高式土器」の範疇に含まれるもので、6世紀前葉から7世紀初頭にかけてのものという。</p> <p>「天神横穴墓群」 追浜本町1丁目に所在した。天神山麓下に立地したが、埋立掘削により未調査のまま消滅しており、詳細は不明。直刀片・骨製鏃・朱玉・土師器・須恵器などの出土遺物が伝えられており、7世紀の築造と考えられる。</p> <p>「鉦切横穴墓群」 浦郷町5丁目に所在した。東鉦切集落の裏山に存在した「範頼ヤグラ」と伝承する横穴群で、28穴が確認されていた。戦時中に破壊されたが、それでも戦後まで7穴が残存していた。のち岡村製作所の工場建設のさい取崩されて消滅した。調査記録はなく、詳細は不明である。</p> <p>「榎戸横穴墓群」 浦郷町2丁目に所在する。別名「田川公園内横穴墓群」。 深浦湾西岸、丘陵先端付近に南面する崖地に5穴が確認されている。</p>

年 号	出 来 事
<p>平安時代 (9世紀～12世紀)</p>	<p>「鉦切遺跡」 夏島町～浦郷町4丁目に所在する。この期の遺構・遺物は汀線に近い地点を中心に検出されている。ここでは海拔0～1m前後の波蝕台岩盤と磯浜が検出され、この直上に古墳時代後期の遺物を包含することから、これ以降降陸化が次第に進み、平安期には生活域として活用されたことが想定されるという。焼土遺構からは三浦型甕が多量に出土している。遺物は土師器、須恵器が主体で、灰釉陶器や在地産のロクロ土師器も含まれる。</p> <p>「日向遺跡」 浦郷町1丁目に所在する。古墳時代遺物とともに平安時代の甕も多量に出土し、「三浦型甕」と称される三浦半島の海辺部遺跡に共通の様相が認められる。また、かわらけ、伊勢型鍋など中世遺物も出土しているが、未報告のため詳細は不明という。</p>

中 世 編

年 号	出 来 事
永仁元 (1293)	4.12 永仁鎌倉地震発生。鎌倉に強震、建長寺炎上、死者2万3千余り、鎌倉、三浦に津波という。(『武家年代記裏書』他)
元応元 (1319)	9. 4 金沢貞顕、金沢稱名寺苑池造営で伊勢入道方に浦郷の人夫を所望し、了承される。(『金沢氏資料』566) 地名として「浦郷」の初見と思われる。 この年、金沢貞顕、金沢稱名寺苑池造営のことで、伊勢入道と石切について打ち合わせる。伊勢入道行意は鎌倉幕府評定衆の二階堂忠貞で、当時浦郷の領主と推測されている。(『金沢氏資料』567)
暦応3 (1340)	8. ー 本浦・天神やぐらに五輪塔が造立される。(地輪刻銘)
貞和3 (1347)	この年、本浦・自得寺裏山出土の板碑が造立される。(刻銘)
貞和5 (1349)	6. ー 傍爾堂付近(鷹取1丁目131番地)出土の板碑が造立される。(刻銘碑文)
至徳年間 (1384 ～87)	この頃、自得寺所在の板碑が造立される。(刻銘)
明徳年間 (1390 ～94)	この頃、聞叟玄令を開山として、本浦・自得寺(臨濟宗)が創建されるという。(『建長末』)
応永元 (1394)	3.15 長立上人、榎戸・能永寺の四至(境域)を書き置く。(「長立筆能永寺境書置」) この年、長立上人、開山として榎戸・能永寺(時宗)を創建する。(『能永寺由緒書』)
応永8 (1401)	この年、榎戸・能永寺所在の板碑が造立される。(刻銘)
応永13 (1406)	8.11 本浦・自得寺の開山聞叟玄令が没する。(『風土記稿』『自得寺由緒書』)
応永21 (1414)	4.19 榎戸・能永寺の開山其阿長立が没する。(『能永寺由緒書』)

年 号	出 来 事
永享5 (1433)	6. — 仏師林貞家、本浦・自得寺の木造十王坐像を造立する。(像内墨書銘) 9.16 関東で大地震発生、震動30数度あり。その後20日間昼夜震動数十度におよぶという。(『日本地震史料』)
永享11 (1439)	8.26 鷹取山北側所在(瀬ヶ崎やぐら)の五輪塔が造立される。(『総合調査』5)
文明18 (1486)	秋 京都聖護院道興、三崎、浦川(浦賀)を訪れ、その旅日記に榎戸湊の名がみえる。(『廻国雑記』)
明応2 (1493)	12. — 建長寺の僧玉隠英興、金沢の伊丹氏の館に滞在し、夏島を絶賛して、その伝承を記す。(『関東禅林詩文等抄録』)
明応3 (1494)	この年、日応上人、浦谷山法福寺(日蓮宗)を中興開起するという。(『風土記稿』『法福寺誌』)
明応4 (1495)	8.15 大地震が起こる。鎌倉では津波で大仏殿が流失するという(『鎌倉大日記』)。
明応7 (1498)	8.25 東海地方を中心に大地震が発生し、鎌倉でも被害発生という。(『日本地震史料』)
文亀3 (1503)	10.11 本浦・法福寺、伽藍焼失し、文書類も烏有に帰すと伝える。(『法福寺文書断簡』)
永正3 (1506)	この年、湯屋ノ下・山ノ神社が創建されるという。のち本浦・雷電社に合併する。(『合併伺』)
永正6 (1509)	7. — 金沢・稱名寺の改修のため、普請用の材木を榎木戸に求める。(『岳心用途勘定状』金沢文庫古文書)
永正13 (1516)	6.13 相河半吾、これ以後、相河一族が能永寺の檀那となることを約束するという。(能永寺文書) 7.11 三浦道寸・義意父子、伊勢宗瑞(北条早雲)に攻められて三崎城(新井城)で自刃、三浦氏は滅亡する。以後、三浦郡(浦之郷村)は伊勢宗瑞の支配となる。(『北条記』『北条五代記』他)
大永2 (1522)	2.18 本浦・法福寺第三世日得、中山法華経寺より鬼子母神像を勧請するという。(『法福寺誌』)
大永年間 (1521 ～28)	この頃、暘谷乾幢、鉦切・正禅寺(臨濟宗)を開基創建する。(『皇国残稿』)なお、正禅寺の開創は慶長年間(1596～1615)の伝もあり。(『建長末』)

年 号	出 来 事
天文2 (1533)	12.21 鉦切・正禅寺の開山暘谷乾幢が没する。(『風土記稿』)
天文6 (1537)	5. 1 関東一帯に大地震、被害は不明。(『快元僧都記』) この年、浦郷字天神の天神社(祭神菅原道真)を勧請建立するという。のち本浦・雷電社に合併する。(「合併伺」)
天文12 (1543)	この年、深浦・稲荷社、創建されるという。(「合併伺」)
天文20 (1551)	4. ー 京都南禅寺の僧東嶺智旺、相模に赴き鎌倉や夏島、野島、烏帽子島を巡遊した旨を報じる。(『新市史』資古中補)
永禄2 (1559)	浦之郷領主朝倉右馬助の所領として『小田原衆所領役帳』に、百廿貫文(売得)三浦浦郷、参拾貳貫三百四十文 浦郷辰増、七十二貫 豆州玉川、以上貳百廿四貫三百四十文とあり、この外、五十貫文 上総篠塚、廿五貫文 同杉谷村とある。(『統群書類従』武家部)
永禄5 (1562)	この年、浦郷小字東鉦切の稲荷社が勧請建立されたという。のち鉦切・神明社に合併する。(「合併伺」)
永禄6 (1563)	6.10 北条氏、三浦郡の村々に玉縄城塀修理役を命じる。(『新市史』資古中Ⅱ)
永禄8 (1565)	8.12 北条氏、三浦郡の村々に玉縄城塀修理役を命じる。(『新市史』資古中Ⅱ)
永禄・元 亀年間 (1558 ～73)	この頃、浦郷・慶蔵坊等の相模国先達衆24人、北条氏に修験退転につき言上する。慶蔵坊は慶蔵院の前身と思われ、地誌では元禄9年に金沢から浦郷に移転してきた旨が記されるが、本史料によって慶蔵坊はすでに戦国時代から浦郷の地に存在したことが判明する。(『新市史』資補遺)
元亀2 (1571)	この年、浦郷村字大久保・諏訪社が創建されたという。同社は明治に入り、日向・八王子社に合併される。(『合併伺』)
元亀3 (1572)	この年、本浦・正光寺の本尊阿弥陀如来像が修理される。(像内墨書銘)
天正9 (1581)	11. 3 朝倉能登守景隆、雷電社を苗割(築島)より現在地の下段に社殿を新築・勧請する。(『風土記稿』)
天正10 (1582)	1. ー 玉縄衆で浦之郷村領主の朝倉能登守景隆、玉縄城主北条氏勝に従い駿河国大平城(静岡県沼津市)に向かう。(『北条記』巻五)

年 号	出 来 事
天正 1 1 (1 5 8 3)	6.11 浦之郷領主朝倉景隆の妻女が没する。墓塔は良心寺境内に所在。(朝倉景隆室墓塔銘) 6.11 朝倉景隆の養子右馬助、良心寺に所領浦之郷で堪忍分 5 貫 5 百 8 0 文を寄進する。(『相州文書』) この年、朝倉景隆、自身の後生安楽のため、小寺家(良心寺)を建立。智誉幡随意上人を開山という。寺号は夫人の法名に由来すると伝える。(『相州文書』)(『風土記稿』)
天正 1 3 (1 5 8 5)	10.23 北条氏、京紺屋津田に三浦浦之郷等の紺屋役徴収を命じる。このことから、戦国期の浦郷には紺屋が存在したことが判明する。(『新市史』資古中Ⅱ)
天正 1 5 (1 5 8 7)	6.26 朝倉景隆、良心寺に寺領として 2 貫文を寄進する。(『相州文書』)
天正 1 7 (1 5 8 9)	10. - 玉繩衆朝倉景隆、玉繩城主北条氏勝に従い伊豆国山中城(静岡県三島市)に加勢として入る。(『新市史』資古中Ⅱ)
天正 1 8 (1 5 9 0)	3.29 山中城落城。朝倉能登守景隆、城主北条氏勝とともに、落ち延びる。(『関八州古戦録』) 4. - 豊臣秀吉、浦之郷・良心寺に禁制(木札)を下す。(良心寺蔵) 7. 5 北条氏直、豊臣秀吉に投降して、戦国大名北条氏は滅亡する。のち、朝倉景隆は入道して犬也と号し、福井藩主結城秀康に仕え、無役衆 6 0 0 石と記録される。(『新市史』資古中Ⅱ) 8. 1 徳川家康、江戸城に入り、関東の北条氏所領を受け継ぐ。このため三浦郡(浦之郷村)も家康の支配下となる。(『新市史』通史近)
天正年間 (1 5 7 3 ~ 9 2)	この間、称誉上人を開山として、榎戸・正観寺が開創する。(『正観寺誌』)

なお、現在中世の遺構として下記の「やぐら群」が知られるが、中にはすでに消滅したもののや、一部のみ残存したものがある。

①鉦切やぐら群	浦郷町 5 丁目	戦時中及び戦後の建設工事で湮滅する。
②正禅寺やぐら群	浦郷町 4 丁目	正禅寺裏・南・北東側の崖面に存在。
③独園寺やぐら群	浦郷町 3 丁目	独園寺境内崖面に存在する。
④良心寺やぐら群	追浜南町 1 丁目	良心寺墓地内に存在する。
⑤陣屋谷戸やぐら群	追浜南町 1 丁目	急傾斜崩壊対策工事で一部を残すのみ。
⑥雷神社やぐら群	追浜本町 1 丁目	急傾斜崩壊対策工事で殆ど消滅する。
⑦法福寺やぐら群	追浜本町 1 丁目	法福寺墓地内及び隣接崖面に存在する。
⑧和田山やぐら群	追浜本町 1 丁目	和田山周辺の崖面に散在する。
⑨天神やぐら群	追浜本町 1 丁目	92, 93 番地民家裏崖面に存在する。
⑩榎戸やぐら群	浦郷町 2 丁目	33 番地付近に存在。急傾斜地防災工事。
⑪日向やぐら群	浦郷町 1 丁目	光龍寺の向い側崖面に存在。急傾斜地。
⑫稲荷谷戸やぐら群	追浜東町 3 丁目	豊海稲荷社周辺に点在する。

近 世 編

年 号	出 来 事
天正 19 (1591)	11. - 徳川家康、三浦郡の諸社寺に所領を寄進する。浦之郷村では本浦・雷電社 2 石、同良心寺 15 石、同自得寺 3 石、榎戸・能永寺 3 石。 (『風土記稿』)
文禄 3 (1594)	9.15 三浦郡代官長谷川長綱、本浦・良心寺に竹木伐採を禁止する禁制を下す。(『新市史』資近世 I)
慶長 8 (1603)	12.25 鎌倉仏所伊予入道宗悦、本浦・良心寺の木造法然上人像を造立する。 (『新市史』別文)
慶長 9 (1604)	4.23 関東大風雨で洪水、被害は不明。(『徳川実紀』) 12.16 関東・東海地方で大地震あり。(『徳川実紀』)
慶長 11 (1606)	2.20 鉦切・正禅寺の中興開基建栄座元が没する。(墓碑銘) 5.25 大風に襲われ被害甚大という。(『徳川実紀』) 12. - 日向・八王子権現社が勧請される。(『瀬戸神社』)
慶長 12 (1607)	2.14 鎌倉仏所伊予入道窓悦、本浦・良心寺の木造善導大師像を造立する。 (『新市史』別文)
慶長 18 (1613)	1. - 京都知恩院 33 代幡随意上人、浦之郷良心寺に直末承認の手形を与える。(『風土記稿』) この年、僧善覚、日向・光龍寺(浄土真宗)を開基・創建する。(『田浦町誌』)
元和元 (1615)	1.5 本浦・良心寺の開山演蓮社智誉上人が没する。(『風土記稿』)
元和 2 (1616)	この年、僧一峰玄存、深浦・独園寺を開創する。(『皇国残稿』) なお、元和 5 年の伝あり(『建長末』)
元和 3 (1617)	3.21 本浦・雷電社、徳川秀忠より寺領安堵の朱印状を受け取る。(『新市史』資古中補) 3.23 本浦・良心寺、徳川秀忠より寺領安堵の朱印状を受け取る。(『新市史』資古中補) 6.22 浦之郷村深浦の鈴木孫三郎と鈴木源三郎、高野山に登山参拝し、鈴木源三郎は高室院に母妙長禅尼と姉妙歎禅尼の菩提供養を依頼する。(『相模国月牌帳』)

年 号	出 来 事
元和 8 (1622)	8.10 本浦・法福寺、一石五輪塔を造立する。(地輪刻銘)
寛永 2 (1625)	6.16 本浦・自得寺、一石五輪塔を造立する。(地輪刻銘) 11.12 本浦・自得寺、火災により伽藍焼失。その際、朱印状や古文書など悉く失う。(『風土記稿』) この年、深浦の鎮守大国主社が創始、鉾切の第六天社も造営されるという。(『風土記稿』)
寛永 3 (1626)	この年、僧単説、深浦・観音寺(浄土宗)を開基創建する。(『皇国残稿』)
寛永 6 (1629)	3. 8 日向・光龍寺中興の自受上人が没する。(『風土記稿』)
寛永 10 (1633)	1. 2 関東大震災。その後10数日にわたり震動あり、被害甚大、小田原は悉く圧潰するという。(『大日本地震史料』) 11. - 『鎌倉巡礼記』(沢庵宗彭著)に夏島、笠島、烏帽子島などの描写があり、夏島などを詠じる。(『鎌倉市史』紀行編)
寛永 12 (1635)	10. - 深浦・稻荷社が建立される。大工矢沢利右衛門。(仮題「浦郷村社寺雑録」)
寛永 16 (1639)	3. - 日向・八王子権現社、社殿が建立される。(『瀬戸神社』)
寛永 17 (1640)	10. - 本浦・自得寺の本尊木造聖観音菩薩立像が造立される。(『新市史』別文)
正保 2 (1645)	3. 9 浦之郷村の小山多兵衛、桐ヶ谷甚右衛門、平田某が紀伊・高野山に登山参拝、故人の月牌供養を依頼する。(『相模国月牌帳』) 3. - 深浦・独園寺の一峰禅師坐像が造立される。(『新市史』別文) 10.22 本浦・自得寺四世、深浦独園寺開山の一峰禅師が没する。(『建長末』)
慶安元 (1648)	この年、大地震あり。小田原城の石垣が崩れ、死者多数。(『大日本地震史料』)
慶安 2 (1649)	2.24 浦之郷村の石渡忠左衛門、石渡賀右衛門、石渡八郎兵衛、中山庄左衛門、蒲谷庄右衛門、久保寺八郎右衛門、石渡六右衛門、石渡作右衛門、石渡寛右衛門の一行9名が紀伊・高野山に登山参拝、故人の月牌供養を依頼する。(『相模国月牌帳』)

年 号	出 来 事
承応2 (1653)	12. ー 本浦・良心寺に梵鐘を寄進する。施主平田氏。第五世高誉利の上人代。(良心寺『寄付等調』)
明暦元 (1655)	8.22 関東一帯が大風雨に襲われる。小田原領が大被害を受けるというが、三浦は不明。(『鎌倉年表』)
万治2 (1659)	3. ー 鉦切・正禅寺境内に板碑型三猿二鶏庚申塔が造立される。(変形板碑型、安山岩、刻銘)
寛文元 (1661)	この年、葉誉可哲上人、本浦・正光寺を開創する。(『正光寺大過去帳』)
寛文3 (1663)	2. 8 厩橋藩(前橋藩)藩主酒井忠清に三浦郡北部の浦之郷村等12か村(3,438石)が与えられる。酒井氏は相州飛地藩領の支配拠点として、「浦之郷役所」を設ける。(酒井忠清宛「領知判物」) 8. ー 本浦・自得寺の木造地藏菩薩坐像が造立される。(『新市史』別文)
寛文5 (1665)	7.11 将軍家綱、浦之郷村雷神社、良心寺、能永寺等の三浦郡24寺8社に寺社領・諸役免除等の朱印状を下す。(『県史』資料5)
寛文7 (1667)	10. ー 榎戸・正観寺薬師堂が再建される。創建は天正年間(1573～92)と伝える。(『正観寺誌』『瀬戸神社』)
寛文9 (1669)	8.10 本浦・正光寺の中興開山頓誉知哲上人が没する。(『大過去帳』)
寛文12 (1672)	3. 1 本浦・良心寺境内に庚申塔を造立する(舟形、青面金剛像、安山岩)。(刻銘碑文) 6. ー 深浦・亀島社が創建される。(横須賀市所蔵文書) 9. ー 鉦切・伊勢神明社が創建される。大工矢沢利左衛門。(横須賀市所蔵文書)
延宝4 (1676)	4. ー 『相模国三浦郡中石高帳』によれば、浦之郷村は高413石8斗4升3合とあり、名主安左衛門という。(『新市史』資近世I)
延宝5 (1677)	1. ー 本浦・法福寺、檀方諸霊骨塔を造立する。(『法福寺誌』) 8. ー 鉦切の漁師が浦方獵場出入りで、野島浦・室の木浦方から評定所に訴えられる。(『新市史』資近世I) 8.19 浦ノ郷村、武蔵国野島浦、室の木浦との漁場争論に関する返答書を差し出す。(『新市史』資近世I) この年、浦之郷村と武州野島村との漁獵出入先裁許、野島村は夏島の根付より内への進入を禁止される。(『市史80』別)

年 号	出 来 事
延宝8 (1680)	<p>4.13 『鎌倉記』(自住軒一器子著)に夏島を詠じた和歌が見える。(『鎌倉市史』紀行編)</p> <p>8. 1 念仏講中、本浦・良心寺に半鐘を寄進する。(良心寺『寄付等調』)</p> <p>8. 4 庚申塔(舟形、三猿)が造立される(追浜本町1-6路傍)。(刻銘碑文)</p>
天和2 (1682)	<p>10. - 榎戸・正観寺薬師堂、鰐口が西村六兵衛より寄進される。(『新市史』別文)</p>
貞享元 (1684)	<p>3.22 浦之郷村安左衛門等、自得寺(本浦)の朱印状焼失の件を本多六郎兵衛に通知する。(自得寺文書)</p> <p>7.21 浦之郷村自得寺乾聰、焼失朱印の再下付を牧野因幡守に願いでる。(以後、同伴について寺、檀徒によって、数度の請願が行われる)(自得寺文書)</p>
貞享3 (1686)	<p>5.10 石渡戸庄左エ門、本浦・自得寺に半鐘を寄進する。(自得寺『寄付等調』)</p> <p>6. - 浦之郷村等五か浦名主・惣百姓と摂津・和泉・紀伊など九か国の漁師惣代より訴状が提出される。これは上総国富津村が一昨年以來新法をたてにイワシ網漁を妨げていることによる。(『新市史』通近世)</p>
貞享4 (1687)	<p>1.18 深浦・観音寺本堂が建立される。施主鎌倉屋長右衛門。観音寺の創建はこの年とも伝える。(観音堂扁額裏面刻銘)</p>
元禄元 (1688)	<p>10.21 榎戸・日向の有志で庚申供養塔(笠塔婆型、安山岩)を造立する(正観寺境内)。(刻銘碑文)</p>
元禄2 (1689)	<p>7.11 日向・光龍寺、浦之郷の小山太兵衛外4名により半鐘が寄進される。(『田浦町誌』)</p>
元禄4 (1691)	<p>3. 1 鎌倉仏師三橋宮内、本浦・自得寺の木造十王坐像を修理する。(『新市史』別文)</p> <p>4. - 鎌倉仏師三橋宮内、本浦・自得寺の木造聖観音立像を修理する。(『新市史』別文)</p> <p>10.18 鎌倉仏師三橋宮内、鉦切・正禅寺の木造聖観音菩薩坐像を造立する。(『新市史』別文)なお、当像の納入銘札に「三浦之郡浦田郷鉦切村」とあり、この近辺が中世には「浦田郷」と称していたことが推察される。</p>
元禄5 (1692)	<p>10.15 本浦・良心寺、木造法然上人・善導大師像を修理再興する。(『新市史』別文)</p>

年 号	出 来 事
	10.15 本浦・正光寺の木造阿弥陀如来立像が修理される。(『新市史』別文)
元禄6 (1693)	2.7 榎戸・能永寺の中興開山覚阿和尚が没する。(『総合調査』5)
元禄8 (1695)	4.一 浦之郷村、「塩場帳」(合4町5反1畝2歩)を差し出す。この「三浦郡浦郷村塩場帳」によると全体として百二十五筆で、従事者73人を数える。(横須賀市史編さん室所蔵)
元禄9 (1696)	8.26 鎌倉仏師三橋左京、榎戸・能永寺の木造地藏菩薩立像を造立する。(『新市史』別文) この年、武蔵国金沢の慶蔵院、浦之郷村に移転するという。(『風土記稿』)但し、永禄・元亀年間(1558～73)頃に浦郷・慶蔵坊の記録あり。
元禄10 (1697)	この年、大地震あり。鎌倉で鶴岡八幡宮の鳥居倒れ、住居多数倒壊する。(『鎌倉年表』)
元禄11 (1698)	この年、前橋藩、三浦郡の所領22か村(6,117石)に増加する。(酒井忠拳宛「領知判物」) この頃、厩橋藩を前橋藩と改称する。
元禄12 (1699)	3.25 「自得寺境内図」(29.6×42.6)を作成、御代官宮沢浜右衛門の記入あり。(『文化財総合』5) 8.一 前橋藩、支配の三浦郡諸村の総検地を実施する。「相模国御浦郡浦之郷検地水帳」によれば、代官屋敷が7反2畝24歩、御蔵屋敷が3畝21歩とあり、代官屋敷(役所)の規模が知れる。(横須賀市所蔵文書) 8.一 前項の検地帳と併せて、「相模国御浦郡浦之郷山・塩場・鰯干場・芦沼検地水帳」も作成される。記事によると、塩場3町3反5畝20歩、鰯干場3町8反3畝6歩とある。(高橋恭一「製塩覚書」)
元禄13 (1700)	9.15 深浦・石渡五郎右衛門、独園寺に半鐘を寄進する。(横須賀市所蔵文書)
元禄14 (1701)	7.7 榎戸・正観寺第七代面誉含龍上人、堂宇を再興する。大工棟梁理佐衛門他。(『正観寺誌』) 9.18 本浦・自得寺に銅製華鬘1面が奉納される。(『新市史』別文)
元禄15 (1702)	7.一 「相模国三浦郡郷帳」によれば、浦之郷村は高433石8斗4升3合という。(国立公文書館所蔵)
元禄16 (1703)	6.25 鉦切・第六天社を再興する。(横須賀市所蔵文書)

年 号	出 来 事
	11.23 大地震あり。相模・安房・上総等で津波、東海道は川崎から小田原までほぼ全滅。死者1万人以上といわれ、三浦半島でも津波による被害甚大という。(『大日本地震史料』)
宝永3 (1706)	2.11 榎戸・正観寺檀徒、喚鐘を新鑄して寄進する。この鐘は太平洋戦争で供出。(『正観寺誌』)
宝永4 (1707)	7. ー 前橋藩、所領の三浦郡22か村に船越新田村を加え、約6,500石となる。(酒井忠孝宛「領知判物」) 9. 9 浦之郷村の領主前橋藩主酒井忠孝、雷電社を再建する。大工鈴木善兵衛。(『風土記稿』) 10.4 宝永大地震が発生する。被害甚大。(『大日本地震史料』) 11.23 富士山(宝永山)が噴火し、降灰により周辺地区はもとより、遠く相模・武蔵に及んで被害甚大。三浦半島でも田畑に三寸余り(9割ほど)も積もったという。(『大日本地震史料』)
宝永5 (1708)	2.24 浦之郷村等9か村、濡浚(江戸湾)御役銀を賦課されるが、諸役加重を理由に免除を願い出る。(『新市史』資近世I) 3.22 浦之郷村等9か村、濡浚入用として船役銀徴収を命じられたことを受け、役負担の経緯について返答する。(『新市史』資近世I) 4.16 浦之郷村等9か村願出の濡浚御役銀免除の一件は、浦方願出の通り許可され落着する。その覚書に9か村の船数合130艘とあり、その内浦之郷村分18艘とある。(『新市史』資近世I)
宝永6 (1709)	6.26 浦郷・三郎兵衛、本浦・自得寺に銅製華鬘2面を寄進する。(『新市史』別文)
宝永7 (1710)	閏8. ー 本浦・良心寺の木造阿弥陀如来坐像が造立される。(『新市史』別文)
正徳元 (1711)	9. ー 鎌倉仏師三橋宮内、鉦切・正禅寺の木造不動明王・毘沙門天像を造立する。(『新市史』別文) 10. 6 本浦・法福寺の木造鬼子母神・十羅刹女立像が彩色修理される。(『法福寺誌』) 11. ー 浦之郷村割元名主、朝鮮通信使来朝につき馬入川船橋御用に供出する船数(33艘)を書き上げる。(『新市史』資近世I)
正徳2 (1712)	6. ー 国道切通し下(追浜本町1丁目)路傍、石造六地藏像が造立される。(刻銘)

年 号	出 来 事
	この年、本浦・自得寺本堂が建立される。大工は当所の善兵衛(鈴木)という。(『新市史』別文)
正徳5 (1715)	8. - 深浦・観音寺開山布誉上人が没するという。(『田浦町誌』)
享保2 (1717)	2. 3 本浦・良心寺中興開山の寛誉天説が没する。(『総合調査』5) 3. - 浦之郷村の名主等、本浦・自得寺の朱印状の再下付を願う。(『総合調査』5)
享保3 (1718)	この年、鉦切・正禅寺本堂が建立されたと伝える。(『新市史』別文)
享保5 (1720)	12.15 鉦切・稲荷明神社が建立される。(棟札銘写)
享保5 ～9 (1720 ～24)	『豆相海浜浦々図』によれば、浦之郷村湊(榎戸湊)は押送船5艘、薪船2艘、猟船43艘、藻取船3艘で湊所属船計53艘とあり、舟役銭5貫768文を取める。また、塩浜2町6反6畝19歩があり、塩年貢銭10貫289文を取めるという。(神奈川県立図書館所蔵)
享保9 (1724)	4. - 本浦・自得寺、朱印状再下付願を本田下総守・牧野備前守に差し出す。(自得寺文書)
享保10 (1725)	この年、深浦・観音寺の境内入口に、「三浦廿二番坂中観音」の石標を建立する。(刻銘碑文)
享保12 (1727)	1. - 観音寺入口に「坂中観世音 榎戸・浦賀道」の道標が建立される。(刻銘)
享保13 (1728)	3. - 浦之郷村等組合12か村、日光社参御用人馬の差出免除を願う。(『新市史』資近世I) 12. - 浦之郷・長浦・横須賀・公郷の4か村、紀伊漁師等の夏島入江運上場での鯛漁運上金納入を求め、評定所に訴える。(『県史』資料編9)
享保14 (1729)	3. 4 幕府評定所、前年の浦之郷等4か村の出訴を裁許し、4艘張網方漁猟を営む紀伊等5か国の漁船に対して運上金の上納を命じる。(『県史』資料編9) 9.15 本浦・法福寺第十六代日遺、本堂・庫裡を再建する。(『法福寺誌』)
享保16 (1731)	6.17 浦之郷村境の傍爾堂辺に浦郷村願主一同で石造六地藏像を造立する。(『総合調査』5)

年 号	出 来 事
	8.27 大暴風雨のため洪水等で水害あり。(『鎌倉年表』)
享保19 (1734)	6.6 鉦切・正禅寺の木造不動明王・毘沙門天像が彩色修理される。(『新市史』別文)
延享元 (1744)	6.27 前橋藩の相模分領が三浦郡32か村、外に鎌倉・高座・愛甲・大住・陶綾各郡の20か村で、約1万5,000石となる。(『寛政譜』2)
延享4 (1747)	6.ー 朝鮮通信使来朝につき三浦郡村々に人馬差出が命じられる。(『新市史』資近世I) 10.29 浦郷組外3カ村組が馬入川船橋掛船御用について、お請書差出の延期を申し出る。(『新市史』資近世I)
延享年間 (1744 ～48)	この頃、本浦・雷電社の別当慶蔵院が火災に罹り、雷電社関係の古文書等を焼失する。(『田浦町誌』)
寛延元 (1748)	10.24 本浦・別当慶蔵院、無宿に付同院名代の自得寺が電雷社領を管理し、同社領の朱印願一札を浦賀役所に差し出す。(自得寺文書)
寛延2 (1749)	1.15 前橋藩酒井忠恭に対し播州姫路への転封が発令され、前橋には姫路藩松平朝矩が入り、相互入れ替えとなった。(『逗子市史』資料I) 5.ー 前橋藩領は酒井氏より松平朝矩に引き渡され、浦之郷村も松平氏領となり、浦之郷役所(代官所)もそのまま引き継がれる。酒井氏支配期は85年間に及んだ。(『逗子市史』通史編)
宝暦元 (1751)	7.ー 前橋藩松平氏、小代官制を設け、この頃、浦之郷村在地家士平田小十郎(16石)を召し抱える。(『御家中住口記』) この年、榎戸・能永寺に半鐘が寄進される。(能永寺文書)
宝暦6 (1756)	1.ー 本浦・良心寺の木造善導大師坐像・法然上人坐像が彩色修理される。(『新市史』別文)
宝暦7 (1757)	3.ー 榎戸・正観寺、本堂等の修復を行う。大工棟梁矢沢弥平次。(『正観寺誌』)
宝暦8 (1758)	2.ー 小坪村名主等、磯鮑御運上場年季明けに付き、前々通り仰付けられるよう、浦之郷役所へ願書を提出する。(『逗子市誌』5)
宝暦9 (1759)	2.ー 小坪村等4か村、浦之郷村の御用鯛漁場・鯛大網漁の差止めを願う。(『逗子市史』資料I) 3.27 浦之郷村、鯛大網の差止めにつき、請書を差し出す。(『逗子市史』資料I) 10.21 日向・住吉社の神輿が勧請される。(『瀬戸神社』)

年 号	出 来 事
宝暦 1 1 (1761)	9. - 日向・八王子権現社、社殿が再建される。(『瀬戸神社』) この年、『高野山高室院檀廻帳』に「浦之郷村」の上層役人として、代官平田小野右衛門、役人平田仙右衛門、同惣兵衛、同丹八、名主同治右衛門、同忠右衛門、割元石渡忠左衛門、年寄数馬定右衛門の名が見える。(『逗子市誌』5)
宝暦 1 2 (1762)	4.18 深浦・観音寺の檀徒、喚鐘を新鑄して寄進する。鑄物師西村和泉守。(観音寺『寄付等調』)
明和元 (1764)	3. - 朝鮮通信使来朝につき、馬入川船橋御用 8 2 艘 (三浦郡勤高) の内、浦郷組は 3 1 艘を割当てられる。(『逗子市史』資料編 I) 5. - 前橋藩領の鎌倉郡下倉田村 (横浜市戸塚区) で殺人事件が起こり、浦郷陣屋から役人が出張捜査する。(『川越松平藩記録』) 9.21 日向・八王子権現社の神輿が造立される。(『瀬戸神社』)
明和 4 (1767)	閏9. - 前橋藩主松平朝矩、川越へ移城が許可され、翌明和 5 年 3 月武州川越に転封、川越 (松平) 藩となる。(『逗子市史』通史編)
明和 7 (1770)	7.21 松輪村沖にて赤潮 (悪潮) が発生する。松輪村、鮑・小魚漁の被害甚大のため浦之郷役所に救済を願う。(『県史』資料編 9)
明和 7～8 (1770 ～71)	この間、相模国、早魃のため被害甚大という。(『鎌倉年表』) この早魃のため、川越藩相模領の損耗は 1 万 3, 3 3 0 石に及ぶという。(『川越松平藩記録』)
明和 8 (1771)	11. - 本浦・良心寺の梵鐘が再鑄される。再鐘棟梁主平田武道長久、世話人平田治左衛門、大工山田賀吉居久。(『風土記稿』)
安永 3 (1774)	4. - 荒地見分に浦之郷役所より、代官平田小十郎、郷目付武田三助、代官手代平田惣右衛門らが回村する。(『葉山町史料』)
安永 4 (1775)	5. - 横須賀村組、小坪村組、平作村組の村々組合、享保 13 年の人馬免除願についての「日光御社参旧記書上帳」を作成する。浦之郷村は横須賀村組。(世安家文書)
安永 5 (1776)	1.12 横須賀村組合 1 2 か村・下平作村組合 9 か村・小坪村組合 7 か村、日光社参人馬差出免除の願書を関東郡代伊奈役所に差出す。(『新市史』資近 I)
天明元 (1781)	12. - 三浦郡 25 か村、鎌倉八幡宮御普請役免除願を提出する。(『葉山町史料』)

年 号	出 来 事
天明2 (1782)	1. - 浦之郷村平田八郎、伊勢参宮覚帳を作る。(平田多一家文書) 7.11 相模湾を震源とする大地震発生。小田原で1,000戸倒壊、被害甚大。(『大日本地震史料』)
天明3 (1783)	この年、鉦切・正禅寺山門を建立という。(『新市史』別文)
天明4 (1784)	11. - 高座郡羽島・大庭・稲荷村、大凶作のため川越藩の浦之郷役所に拝借金返納の延期を願い出る。(『藤沢市史』2) 12. - 鎌倉・高座・愛甲・大住・洵綾郡の川越藩領20か村、飢餓拝借金返済の延期を浦之郷役所に願い出る。(『藤沢市史』2)
天明8 (1788)	4. - 浦之郷村名主平田治左衛門等、長浦村との磯根藻刈入れ吟味につき返答書を役所に差し出す。(鈴木健治家文書) 6. - 田中源左衛門外12名、本浦・法福寺に喚鐘を寄進する。(『法福寺誌』)
寛政元 (1789)	12. - 深浦村惣漁師金右衛門等23人、海鼠漁仕入金借用を同村石渡磯右衛門に依頼する。(石渡晟一家文書)
寛政5 (1793)	1. - 川越藩、異国船取扱いにつき、相模分領の浜付き村高と浦之郷陣屋(代官所)居付人数を幕府に届ける。「代官役平田小十郎、郷方役平田安九郎、郷引付役石井彦蔵、鉄砲拾挺」とあり。(『松平藩記録』) 2. - 幕府の指示により川越藩は、物頭以下43名の軍事要員を相州(浦之郷陣屋)に派遣。統轄者として児玉文左衛門を任じ、その下に平田小十郎を従属させて小代官并元々兼帯とする。(『松平藩記録』)
寛政6 (1794)	5. 8 橘太左衛門、榎戸・能永寺の「絹本地蔵十王図」を修復する。(『新市史』別文)
寛政11 (1799)	7.16 本浦・雷電社の境内で慶蔵院と金沢瀬戸神社の両者が雨乞いを行い、翌日から降雨とのこと。(瀬戸神社文書)
寛政12 (1800)	3. - 榎戸・正観寺の薬師堂が建立される。(『正観寺誌』)
享和元 (1801)	1.19 江戸の俳人白英(一鶴堂)が三浦半島・鎌倉などを遊覧した旅日記『三浦紀行』の中で、烏帽子島、夏島を愛でて俳句を詠む。(『鎌倉市史』紀行編)

年 号	出 来 事
	<p>4.10 伊能忠敬、相州測量のため、この日金沢・室の木より浦之郷村に入り鉤切、深浦、榎戸、日向を測量、当夜は名主市左衛門宅に止宿する。測量日記に浦郷村の家数247戸と記す。(『伊能忠敬測量日記』)</p> <p>12. - 平田小野右衛門(浦之郷村在地家士)、上総、相模元締添役となる。(『松平藩記録』)</p>
享和2 (1802)	12. - 川越藩、小代官の役名を廃し、相模、上総分領取扱役の差添とする。臨時に平田小十郎、郷方取扱となる。(『松平藩記録』)
文化元 (1804)	4.21 日向・八王子社の住吉明神が再興される。(『総合調査』5)
文化2 (1805)	この年、深浦・独園寺本堂が建立される。(『新市史』別文)
文化3 (1806)	<p>1. - 高座郡稲荷村(藤沢市)の村役人、同村の貞女とりの調査書を浦之郷役所に提出する。(『藤沢市史』)</p> <p>6. - 深浦・観音寺の鰐口を亀松屋弥治兵衛が寄進する。西村和泉守作。(観音寺『寄付等調』)</p> <p>11. - 鉤切・造酒宮三社大権現が再造営される(正禅寺支配)。(横須賀市所蔵文書)</p>
文化4 (1807)	4. - 相州三浦郡浦郷村外7か村、武州野島浦外17か村、上総富津村外5か村、漕桂網の禁止協定を結び議定書を作成する。(鈴木家文書)
文化5 (1808)	<p>1. - 村大工矢沢吉右衛門、本浦・雷電社の大神輿を新造する。(雷神社文書)</p> <p>7. 4 本浦・雷電社の大神輿(天王神輿)が装飾を施されて完成、浦賀に着岸する。(雷神社文書))</p> <p>7.25 南関東大風雨。難破船など死者多数という。(『鎌倉年表』)</p>
文化7 (1810)	<p>2.26 幕府、会津藩と白河藩に対し相州及び房総の異国船防禦を命じ、同年7月に相模側を会津藩の分担地域と決める。(『新市史』近世通)</p> <p>この年、三浦郡浦之郷村外7か村と上総国13か村代表の富津村との間に鰯を漁獲する小晒網を、早春より7月15日まで禁止する契約書を取り交わす。</p>
文化8 (1811)	5.13 幕府は会津藩の陸奥・越後国の藩領を上知させ、三浦・鎌倉郡内で3万石を与える。浦之郷村は会津藩領となり、以後、文政3年12月まで10年間に及ぶ。(『新市史』近世通)

年 号	出 来 事
	<p>6.13 会津藩、秋谷村村役人等を浦之郷陣屋に呼び出し、異国船漂流時の心得を読み聞かせる。(『若命家文書』上)</p> <p>11. - 「相模国三浦郡村々高帳」によれば、浦郷村は「高七百拾六石六斗三升九合、家数貳百七拾五軒、名主平田治兵衛・高橋幸八」とある。</p>
<p>文化9 (1812)</p>	<p>2. - この頃、会津藩は相州警衛施設として、鴨居陣屋を造営し、地方支配の郡方役所もここに置かれる。(『逗子市史』通史編)</p> <p>3. - 川越藩相州在地家士平田佐一郎ら11名、会津藩へ仕官願書を提出する。(『逗子市史』通史編)</p> <p>8. - 『三浦古尋録』(加藤山寿著)が刊行される。浦郷村の項では、戸数250余とあり、村内の地誌を記す。(『校訂三浦古尋録』)</p>
<p>文化11 (1814)</p>	<p>6. - 『三浦鎌倉両郡村高三役人家人数』(青木松兵衛記)によれば、当年の浦ノ郷村は高七百拾六石六斗三升九合で、家数貳百六拾軒、人数千四百四十五人とある。(横須賀市所蔵)</p> <p>8. - 江戸の人清水浜臣(国学者・歌人)が箱根旅行の途中に浦之郷で船遊びを楽しみ、歌を詠む。(『箱根日記』)</p> <p>10. - 榎戸・能永寺、お尋ねにつき『由緒書』を作成し提出する。(能永寺所蔵)</p>
<p>文化13 (1816)</p>	<p>2.28 会津藩、藩主松平容衆の上洛御用金2,000両を相模国領内村々に課す。(『逗子市誌』6)</p> <p>6. - 江戸湾内の五か国四十四の浦が、浦騒動の係争を憂慮し、盟約を議定する。浦之郷村名主高橋幸八も加盟調印する。(『羽田史誌』)</p>
<p>文政元 (1818)</p>	<p>10.12 会津藩、三浦郡所領に破免検見(年貢割付方)を実施する。(『逗子市誌』6)</p>
<p>文政2 (1819)</p>	<p>1. - 会津藩、三浦・鎌倉郡の村々に異国船渡来時の心得条目の読み聞かせを通達する。(『若命家文書』上)</p> <p>閏4.15 会津藩、相模国所領の村々に將軍家齊女入輿の費用6,000両を課す。村々、5,000両負担の請書を差し出す。(『逗子市誌』6)</p> <p>7. - 桜山村名主孫右衛門から、相州梅沢辺(二宮町辺)の魚荷運送についても、桜山村田越一浦郷村字榎戸一江戸へのルートで取り扱いたい旨の願書が提出される。(『逗子市史』資料I)</p>

年 号	出 来 事
	<p>9. - 相州山西浦の魚荷を桜山—榎戸—江戸のルートで運送することが浦賀奉行所で許可され、このため関係者で議定書を取り交す。(『逗子市史』資料I) この魚荷の江戸回漕ルートは、豆州・相州諸浦の記録から、元禄・宝永期には確立していたと考えられている。(安池尋幸『日本近世の地域社会と海域』)</p> <p>10. - 「魚荷運賃之覚」が浦郷村榎戸舟引請人権右衛門より桜山村石渡孫衛門に差し出す。榎戸浦より江戸表まで積送る魚荷の運賃である。(『逗子市史』資料I)</p> <p>12. - 会津藩、三浦・鎌倉郡所領村々の鉄砲場御用人足を免除する。(『逗子市史』6-2)</p>
<p>文政3 (1820)</p>	<p>11.28 日向・光龍寺本堂が再建される。(『田浦町誌』)</p> <p>12.28 幕府、会津藩の相模国警衛を免じ、浦賀奉行所に引き継ぎを命じる。同日、小田原藩主大久保忠真、川越藩主松平齐典に相模国警衛を命じ、齐典の武蔵国所領1万5000石を三浦・鎌倉郡に替える。(『県史』資料編10)</p>
<p>文政4 (1821)</p>	<p>1.26 川越藩、相模国領分へ村替えにあたり、旧陣屋浦之郷村地域の返戻を願う。このため浦之郷陣屋が再置され、浦之郷村も川越藩の支配となる。(『川越松平藩記録』)</p> <p>5. 1 川越藩、相模国の会津藩預所・台場等を受け取る。(『松平藩記録』)</p> <p>5.13 川越藩、相模国の台場から江戸への御用状送りを浦之郷村肴仲買人の十左衛門に命じる。(『松平藩記録』)</p> <p>6.14 当日付け「松平藩記録」によれば、浦郷陣屋完成後、足軽21人など在地の人々を多く雇用する。足軽の宛行扶持は5石2人扶持という。</p> <p>6.29 川越藩、浦之郷陣屋の整備工事を進め、この日「陣屋出来」とある。(『松平藩記録』)</p> <p>8. - 川越藩、浦郷村名主幸八に御陣屋御用を申付け、三人扶持を与え、帯刀を差免す。(『県史』資料編10)</p> <p>11. - 川越藩、所領村々に「郷中御条目」を通達する。なお、浦賀奉行、小田原藩、川越藩、それぞれ三浦郡村々に「村明細帳」を差し出させる。(『松平藩記録』)</p>
<p>文政5 (1822)</p>	<p>1. - 本浦・自得寺十九世泰岩、「御朱印書上」を寺社役所に差出す。(自得寺文書)</p>

年 号	出 来 事
	<p>5. 2 イギリス船サラセン号渡来につき、川越藩は浦之郷陣屋に武者奉行外348人を急行させる。5月4日着。この時期、浦之郷陣屋に居付の人数は物頭加藤金助以下116人という。この時の川越藩出動の総人員は、水主なども含めて920人、船が80艘にも及んだという。(『松平藩記録』)</p> <p>5. - 浦之郷村、「河船極印名前帳」を作成する。(『県史』資料編9)</p> <p>6.30 川越藩、サラセン号来航時に出精した三浦郡村々の数十人に褒美を下付する。(『県史』資料編10)</p> <p>10. - 川越藩、三浦・鎌倉郡の所領村々に大豆・質屋冥加永の上納を免除する。(『逗子市誌』6-2)</p>
<p>文政6 (1823)</p>	<p>1. - 浦之郷村等6か村、御用船を押送船に替えるように川越藩に上申する。(『県史』資料編10)</p> <p>2.17 川越藩、御用船を押送船に代えるという浦之郷村等6か村の献言を受け入れる。(『県史』資料10)</p> <p>6. - 川越藩、大筒試射御用に精勤の浦之郷村名主らを褒賞する。(『県史』資料編10)</p>
<p>文政7 (1824)</p>	<p>7. 2 浦之郷陣屋の川越藩士斉藤氏童子、本浦・自得寺に葬られる。(墓碑銘)</p> <p>11. 1 浦之郷陣屋の川越藩士加藤氏、本浦・自得寺に葬られる。天保3年5月墓碑を建立。(墓碑銘)</p>
<p>文政8 (1825)</p>	<p>1. - 川越藩、三浦郡所領村々の奉公人の華美な衣類や賭博、鎌倉・金沢への出奉公を禁止する。(『逗子市誌』6-2)</p> <p>2.29 川越藩、異国船打払令を三浦郡所領の村々に触れる。(『県史』資料編10)</p>
<p>文政9 (1826)</p>	<p>この年、本浦・自得寺開山の「聞叟玄令画像」が制作される。賛は建長寺第218世真浄元苗。(『新市史』別文)</p>
<p>文政10 (1827)</p>	<p>10. - 三浦郡15か村総代公郷村永島庄兵衛他、鶴岡八幡宮再建の加助郷の免除願を川越藩役所(浦郷役所)に差し出す。(関口家文書)</p> <p>10. - 本浦・自得寺の木造阿弥陀如来像が造立される。(『総合調査』5)</p>
<p>文政11 (1828)</p>	<p>2. - 三浦郡の川越藩領村々と小田原藩領村々とが相談し、鶴岡八幡宮再建の加助郷の免除願を川越屋敷江戸懸り山下権助に差出す。(関口家文書)</p>

年 号	出 来 事
	8. 1 鶴岡八幡宮再建に伴う三浦郡村々の継人馬負担等が決定する。(関口家文書)
文政12 (1829)	この年、川越藩、所領村々の支配機構として、東西領の寄場組合村を設置し、大惣代・小惣代を置く。浦之郷村名主の高橋幸八は東領の小惣代となる。(『県史』資10)
天保2 (1831)	3.16 川越藩、三浦郡所領村々へ俵物密売禁止の幕令を触れる。(『逗子市誌』6-2)
天保3 (1832)	11. - 川越藩、文政10年よりの日掛縄積金3,800両余満会につき、そのうちから1,000両を上納するよう三浦郡所領村々に命じる。(『県史』資料編10)
天保4 (1833)	8. 1 関東地方で大風雨に見舞われ、飢饉となる。(『鎌倉年表』) この年、川越藩『已給帳』に、相州分「米拾六石 平田豊之助、米九石 平田慶次郎」などの名がある。(『川越藩史料』)
天保5 (1834)	この年、『新編相模国風土記稿』三浦郡分が、脱稿する。浦之郷村「松平大和守矩典陣屋」の項に「村の中程にあり、構内凡一町五段許。北条氏分国の頃は領主朝倉氏居住す。(中略) 御分国の後は倉廩を置れて県令の持ちなりしが、酒井氏以来領主の陣屋とす」とあり、また、「塩浜、雀ヶ浦にあり、段別二町六段余」と記す。その他、村地誌があり民戸267という。(『新市史』資古中補) この年、「三浦郡郷帳」(天保郷帳)によれば、浦之郷村石高739石6斗3升9合という。(国立公文書館蔵)
天保6 (1835)	11. - 鎌倉仏師三橋永助、本浦・自得寺の本尊聖観音菩薩立像を修理する。(『新市史』別文) この年、恵比寿屋七蔵(小山氏)、豊海稲荷社(神応)に手水鉢を奉納する。(刻銘)
天保8 (1837)	この頃、相模湾生魚荷は従来田越～榎戸～江戸のルートで運送されてきたが、近年は皆船で運ばれてこのルートは使われていないという。(『尾州御用日記』)
天保9 (1838)	閏4. - 江戸・町絵師長谷川雪堤、三浦半島を旅行し、風景などを写生する。のち地誌『相中留恩記略』の挿絵となる。(『相中留恩記略』) 8.11 川越藩、所領の三浦郡組合村々に質屋株取決めと冥加金上納を命じる。(『逗子市誌』6-3)
天保10 (1839)	2. - この頃、川越藩浦之郷陣屋の常備(居付)人数は、徒目付1人、足軽小頭1人、足軽20人などであった。(『松平藩記録』)

年 号	出 来 事
	4. - 『相中留恩記略』(本篇)が完成する。浦之郷村分でも「松平大和守陣屋図」など、村内の名勝を図会形式で紹介する。(有隣堂刊)
天保11 (1840)	4. - 川越藩郡代所(浦之郷役所)、従前の裁許状写の差出しを三浦郡所領村々に命じる。(『逗子市誌』6-3)
天保12 (1841)	<p>4. - 龍崎戒珠、三浦郡中の寺院を巡回して『三浦諸仏寺院回詣記』を著す。阿弥陀、観音、地藏等の霊場札所が詳述され、浦之郷村寺院の記載もあり。(光心寺文書)</p> <p>3.3 川越藩士木村三平、本浦・自得寺に葬られる。(墓碑銘)</p> <p>この年、中村湘雲(日向・光龍寺住職・画家)、本浦・自得寺の「紙本仏涅槃図」を描く。(款記)</p> <p>この年、『新編相模国風土記稿』全編脱稿する。(『新市史』資古中補)</p>
天保13 (1842)	<p>4. - この時の浦郷陣屋の陣容は、武者奉行小河原佐宮外76名とあり、他に居付の郷方役人が存在した。(『松平藩記録』)</p> <p>8.3 幕府はこれまでの浦賀奉行中心の江戸湾海防体制を変更して、相模は川越藩に専任警備を命ずる。これに伴い従前の小田原藩の所領は川越藩に移され、さらに鎌倉郡に15か村と武州久良岐郡に5か村の村々が加えられて、100か村が所領となる。(『逗子市史』通史編)</p>
天保14 (1843)	<p>2. - 川越藩、大津陣屋の建設を始める。同年9月に完成する。(『松平藩記録』『相中留恩記略』)</p> <p>4.27 榎戸・能永寺本堂建立の上棟を行う。棟梁相川吉佐衛門政常。(『新市史』別文)</p> <p>4. - 川越藩、三浦郡所領の村民に水主差配役、同添役、船手組、旗差の諸役を申し付け、勤中地廻、苗字帯刀を許し、各人に扶持を下付する。(『県史』資料編10)</p> <p>8.11 川越藩、夏島において同月20日迄の間、大筒試打並びに船打稽古を行う。(『松平藩記録』)</p> <p>8.14 夏島で大筒試打、弾丸が案外に飛び散り、山を越したので騒ぎになったが、怪我人なし。(『松平藩記録』)</p> <p>閏9.3 浦之郷村の在地家士平田小十郎、浦之郷より大津へ移住する。(『松平藩記録』)この頃、浦之郷陣屋の用途が廃止されるか。</p> <p>この年、榎戸・能永寺本堂が大工棟梁相川吉左衛門によって建立される。(棟札銘)</p>

年 号	出 来 事
弘化元 (1844)	6. - 川越藩、浦之郷村をはじめ所領の村々に、異国船来航時の心得を 通達する。(『逗子市史』資料編) この年、龍崎戒珠著『新編三浦往来』に浦之郷村の沿岸漁獲類が述べられる。 (県立金沢文庫所蔵)
弘化2 (1845)	この年、本浦・自得寺の木造大黒天像が造立される。(『総合調査』5)
弘化3 (1846)	3.10 鎌倉仏師三橋永助、深浦・観音寺の木造七観音菩薩立像を造立する。 (『新市史』別文) 4. - 鎌倉仏師大石左門、鉾切・正禅寺の木造大黒天像を造立する。(『総 合調査』5)
弘化4 (1847)	2.15 幕府は海防体制強化のため、三浦半島は川越、彦根、房総半島は忍、 会津の4藩に警衛を担当させる。(『通統』5) 11. - 『彦根藩相州御他領取調書』によれば、浦之郷村は高716石6斗 3升9合、家数291軒とある。また、「川越様御陣屋跡」の記載 がある。(彦根文書)
嘉永元 (1848)	2. - 鎌倉仏師三橋永助が雷電社天王神輿の四神像を彩色修理する。(雷 神社文書) 6. 7 『相州海岸紀行』(荻原行篤著)に、夏島、烏帽子島、鉾切などの 描写あり。(『県郷土資料』)
嘉永3 (1850)	6. - 三浦・鎌倉郡の村々、不漁や海防による役船徴発などを理由に肴・ 薪仲買運上免除を浦賀奉行所に願う。(『新市史』資近世I)
嘉永4 (1851)	8. 6 郡代所より浦郷村慶蔵院へ五穀成就・虫除けの二夜三日の御祈禱 が仰せ付けられる。(福本三郎家文書) 12. - 三浦・鎌倉両郡の川越藩所領の村々、非常御備金捻出のため日掛 縄代上納の3か年延長を願う。(『県史』資料編10)
嘉永5 (1852)	2. 3 浦之郷村の甘粕・鈴木・久保寺・大黒屋・鍛冶屋の面々13人が、紀伊・ 高野山に登山参拝する。(『高野山高室院登山帳』) 9. - 川越藩、浦之郷村名主田中源右衛門の質屋・穀屋行事頭取、代々 組頭格任命を検討する。(『県史』資料編10)
嘉永6 (1853)	2. 2 震源地小田原北方の大地震が発生、小田原で3,300戸が倒壊 する。(『大日本地震史料』) 4. - 本浦・自得寺山門が建立される。棟梁は地元大工政五郎という(『新 市史』別文)

年 号	出 来 事
	<p>5.16 川越藩、異国船渡来時の水主、人足徴発につき不足のないよう所領村々組合に通達する。(『県史』資料編10)</p> <p>6. 3 アメリカ東インド艦隊司令長官M. C. ペリー、浦賀沖に来航する。(『ペリー遠征』)</p> <p>6. 6 ペリー艦隊のミシシッピー号、小柴沖に到る。(『ペリー遠征』)</p> <p>6. 9 幕府、久里浜の応接所で、ペリーからアメリカ大統領の国書を受理する。夕刻、ペリー艦隊4艘は江戸内海に侵入し、金沢・乙艦・小柴沖に碇泊する。(『ペリー遠征』)</p> <p>6.11 ペリー艦隊、夏島沖に碇泊して、近海を測量する。(『ペリー遠征』)</p> <p>6.12 ペリー、来春の来航を予告して浦賀沖を去る。その際、異国船から打ち捨てられた異人頭巾・フラスコ・鳥籠体の品・木玉・沓・鉄丸打錠などを浦郷の農民が拾い上げたという。(『松平藩記録』)</p> <p>7. 7 郡代所より本浦・慶蔵院に二夜二日の五穀成就雨乞いの御祈祷を申し付けたが、降雨の験が無かったので、さらに関本・最乗寺に依頼したという。(福本三郎家文書)</p> <p>11.14 幕府、海防担当諸藩の持場を再編し、川越藩・彦根藩に替り、江戸湾警備(相模国)を萩(長州)藩と熊本藩に命じる。(『逗子市史』通史編)</p>
<p>安政元 (1854)</p>	<p>1.11 ペリー艦隊が再来航し、このうちサザンプトン号が小柴沖に投錨する。(『ペリー遠征』)</p> <p>1.16 ペリー艦隊6艘が、武蔵国小柴沖に集結する。(『ペリー遠征』)</p> <p>2. - ペリー艦隊ミシシッピー号の水夫死亡につき、ペリー提督は夏島(ウエブスター島)に埋葬することを希望するが、幕府の計らいで横浜村の増徳院境内の丘に埋葬する。現在の外人墓地の第1号である。(『ペリー遠征』)</p> <p>3. 3 横浜の応接所で神奈川条約(日米和親条約)が調印される。同月22日ペリー艦隊は残らず退帆。(『ペリー遠征』)</p> <p>4. 1 熊本藩(細川越中守斉護)は川越藩領等(大津陣屋・鴨居陣屋)を引き継ぐ。このため浦之郷村は熊本藩領となる。(『逗子市史』通史編)</p> <p>11. 4 大地震が発生、金沢辺、浦賀辺、大津三崎辺、また鎌倉に津波あり。(『大日本地震史料』)</p>

年 号	出 来 事
<p>安政2 (1855)</p>	<p>4.19 李院妻女の「江の島紀行」によれば、この日金沢八景の海を遊覧、途中夏島の干潟に降り立ち、潮干狩に興じたという。(雑誌『鎌倉』12)</p> <p>10. 2 安政の大地震が起こる。余震が20日程続き、上宮田陣屋が倒壊、即死6人など被害甚大という。(『大日本地震史料』)</p>
<p>安政3 (1856)</p>	<p>8.25 大暴風で家屋や漁船等に大きな被害あり。(『鎌倉年表』)</p>
<p>安政4 (1857)</p>	<p>閏5. - 異国船防禦など嚴重の固めのため、浪人・諸勸化・物貰い等の郡内立ち入りを防ぐため、郡境の浦之郷村(2か所)外3か村に高札・小番屋を設ける。(『県史』資料編10)</p>
<p>安政5 (1858)</p>	<p>3.29 熊本藩、浦之郷村をはじめ預所村々に諸村安全・五穀豊穰・魚業繁栄の祈願執行を命じる。(『県史』資料編10)</p> <p>3. - 旭松閣吉隆、浦之郷村の景勝を愛でて「浦郷八景」を撰し、扁額を深浦・観音寺に掲げる。(観音寺蔵)</p> <p>5. - 熊本藩、15～60歳の次男等を調査し、非常時の徴発に備える。『県史』資料編10)</p> <p>6.21 萩藩は相州警備を解かれ、安政6年1月26日に引き渡しが行われる。このため相州警備は熊本藩の一手引負いとなる。(『県史』資料編10)</p> <p>この年、三浦郡内村々にてコレラが流行する。(『県史』資料編10)</p>
<p>万延元 (1860)</p>	<p>4.28 深浦・独園寺の木造愛染明王像が造立される。(『総合調査』5)</p> <p>7.22 伊豆、相模、武蔵にかけて大風雨、数日止まず被害甚大。(『市史80』別)</p>
<p>文久3 (1863)</p>	<p>3. 3 熊本藩主細川慶順、相模国警衛担当の解任を幕府に上申する。3月17日に許可される。(『県史』資料編10)</p> <p>5.27 熊本藩は相州御備場警衛を免ぜられ、新たに佐倉藩堀田家が命じられる。(『県史』資料編10)</p> <p>6.23 佐倉藩は熊本藩預所であった武蔵・相模両国の3万3千石を引き継ぐ。このため浦之郷村も佐倉藩の支配下となる。(『逗子市史』通史編)</p>

年 号	出 来 事
<p>元治元 (1864)</p>	<p>1. ー 品川四番御台場築造のため、浦之郷村日向名主三左衛門の持山が買収され、土丹岩を採取し積出す。この1月から7月にかけて、品川沖に築造中の内海四番御台場用に、浦之郷村字日向と長浦村字田ノ浦から大量の土丹石（三浦石）が切り出される。その運送に漁師たちも従事しており、浦之郷村勘蔵・重右衛門、鉦切の忠五郎、日向の安治郎などの名が見える。（堤磯右衛門『懐中覚』他）</p> <p>7.10 蒲谷政右衛門外2名、鉦切・正禅寺に半鐘を寄進する。（正禅寺『什物書上控』）</p>
<p>慶応2 (1866)</p>	<p>4. 1 佐倉藩、預所村々へ横須賀製鉄所建設用石灰調査につき、フランス人廻村の旨を触れる。（『船廠史』I）</p> <p>4.26 佐倉藩預所村々、横須賀製鉄所建設の継立場加助郷を願い、人馬継立高一日分を届ける。（『県史』資料編10）</p>
<p>慶応3 (1867)</p>	<p>3.14 幕府は佐倉藩の相州警衛および松本藩の浦賀警衛を免除し、両藩の預所を天領に編入。その支配を伊豆韮山代官江川太郎左衛門に命じる。同年6月、佐倉藩預所は正式に江川代官所へ引き渡される。（『逗子市史』通史編）</p> <p>5. ー 日向・光龍寺住職で画家の中村湘雲、本浦・平田以周家所蔵の「四季耕作図」を描く。（当図款記）</p>
<p>明治元 (1868)</p>	<p>6.29 韮山代官所の天領支配地と旗本領が、新置の韮山県（旧代官江川太郎左衛門を治県事に任命）の管内に編入され、三浦郡全村もその管轄となる。（『逗子市史』通史）</p> <p>8.25 「神奈川十里四方」が神奈川府の行政管轄下に置かれ、このため三浦郡の全村もその管轄下に入るが、韮山県から移管され神奈川県に編入されたのは同年12月のことである。（『県史』通3）</p> <p>9.21 神奈川府は神奈川県と改称される。神奈川県の新創（スタート）である。（『県史』通3）</p> <p>この年、浦之郷村には自得寺塾、慶蔵院塾、正観寺塾（朝倉仁山）があり、維新前から寺子屋教育が行われ、引続き講義が行われる。（『市教育史』）</p>

近 現 代 編

年 号	出 来 事
明治2 (1869)	9.15 東鉦切・神明社、再建され落慶する。(『神社明細帳 三浦郡』)
明治3 (1870)	この年、鉦切・正禅寺塾(森川祖証)が開かれる。(『田浦町誌』)
明治4 (1871)	<p>3. - 本浦塾(自得寺塾と慶蔵院塾を併合)を秋山長平宅に開く。大雅堂とも云い通学する者30名前後という。(『田浦町誌』『市教育史』)</p> <p>4. - 「相模国三浦郡浦郷村 平民族戸籍上」(名主高橋幸八、年寄田中善八)が作成される。(横須賀市史編さん室所蔵)</p> <p>5. - 本浦・慶蔵院(修験宗)、廃寺となり、住職は帰農する。(横須賀市所蔵文書)</p> <p>7. - 廃藩置県では神奈川県はそのまま存続し、同年11月の府県の統廃合では六浦県(金沢藩を六浦藩と改称、廃藩置県では六浦県となる)を合併して新置の神奈川県が成立する。(『県史』資料編10)</p> <p>この年、蒲谷又右衛門、鉦切で蒲谷新田の開発工事に着手する。(『土木史』)</p>
明治5 (1872)	<p>2. 1 戸籍法を施行。戸籍編成のため三浦郡を10区に分ち、浦之郷村、田浦村、長浦村、横須賀村及び逸見村他5か村は1区となる。名主、年寄の名称を廃し、戸長、副戸長に統一する。(『市史50』)</p> <p>8. - 「学制」「学事奨励に関する被仰出書」「小学教則」が出され、公教育が開始される。(『市史50』)</p> <p>11. - 神奈川県下に「筆学所」、すなわち寺子屋廃止の通知を出す。(『県教育史』)</p> <p>この年、①鷹取石の切出しが始まるという。(聞取調査)②「社寺領上知令」によって、浦之郷村各社寺より旧朱印地及び除地を政府に上知(返納)する。(横須賀市所蔵文書)</p>
明治6 (1873)	<p>4. - 「学制」(太政官布告)による「小学教則」の制定により、本浦塾を本浦学舎、正観寺塾を南浦学舎、正禅寺塾を北浦学舎と改称、開校する。(『田浦町誌』)</p> <p>4. - 「第拾五区壺番組相模国三浦郡浦郷村戸籍 全」が作成される。社寺数25、戸数391、人口2,202人とあり。この内、士族は僅か1戸である。(横須賀市所蔵文書)</p>

年 号	出 来 事
	<p>6. ー 雷神社、村社の社格が許可される。(『田浦町誌』)</p> <p>5. 1 神奈川県は町村区画を大幅に改正し、区番組制とする。このため浦之郷村、船越新田、田浦村、長浦村は第15区1番組となる。(『市史50』)</p> <p>7. ー 浦郷村各社寺より「社寺上知田畑山林御払下ケ願」が提出される。(横須賀市所蔵文書)</p> <p>8. ー 浦之郷村各寺院より「寄附什物其外取調帳」が戸長役場に提出される。(横須賀市所蔵文書)</p> <p>9.10 起源は不明であるが、この日三浦相撲が雷神社で開催され、例年この日に行われる。(『市体育史』)</p> <p>11. ー 浦郷村2番地の地藏堂が廃堂となり、仏像等は支配の自得寺へ移される。(横須賀市所蔵文書)</p>
<p>明治7 (1874)</p>	<p>4.15 本浦、北浦、南浦各学舎を廃止、自得寺を仮校舎として、名称を第1大学区第10中学区第55番小学本浦学舎と改称する。(『浦小沿革』)</p> <p>6.15 県は区番組制を廃止して、大区小区制を実施。このため浦之郷村、船越新田、田浦村、長浦村は第15大区第1小区となる。(『市史50』)</p> <p>7.11 村内各寺院より再び「寺院上知山林御払下願書」が提出される。(横須賀市所蔵文書)</p> <p>8. 4 日向・八王子社の社殿を再建する。(『田浦町誌』)</p> <p>この年、第15大区第1小区扱所(会所)を榎戸4,325番地(能永寺隣接)に新築し、浦郷・船越新田・田浦・長浦4か村の事務を取り扱う。(『皇国地誌』)</p>
<p>明治8 (1875)</p>	<p>8. 7 第15大区々長より「炎暑につき小学舎生徒を11日より25日迄休業とする」ことを通達する。(『新市史』資近現I) 小学校での夏休の先駆けか。</p> <p>9.20 浦郷、田浦、長浦各村連名で「火葬場新設願」を県令に提出する。(横須賀市所蔵文書)</p> <p>10. ー 第55番小学本浦学舎を第55番小学浦郷学校と改称する。(『田浦町誌』)</p>
<p>明治9 (1876)</p>	<p>1. 1 浦郷村の民戸数397、人口2,274人とある。(『浦郷村戸籍』)</p>

年 号	出 来 事																					
	<p>3.28 県令より「社寺無代御下ケ渡同払下ケ御達書」が通達され、第15大区会所は5月9日社寺に対し通知する。このため、雷神社、良心寺、自得寺、能永寺等の旧朱印地・除地が無代および有償で払い下げられる。(横須賀市所蔵文書)</p> <p>12. - 浦郷村大字別の戸数及び人員数。(『浦郷村戸籍』)</p> <table border="1" data-bbox="510 479 1114 782"> <thead> <tr> <th>字 名</th> <th>戸 数 (戸)</th> <th>人員数 (人)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>本 浦</td> <td>1 0 7、社寺 1 0、</td> <td>6 2 7</td> </tr> <tr> <td>鉦 切</td> <td>1 4 5、社寺 5、</td> <td>8 5 7</td> </tr> <tr> <td>深 浦</td> <td>6 2、社寺 3、</td> <td>3 2 3</td> </tr> <tr> <td>榎 戸</td> <td>2 2、社寺 3、</td> <td>1 2 8</td> </tr> <tr> <td>日 向</td> <td>5 6、社寺 4、</td> <td>3 3 9</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>3 9 2、社寺 2 5、</td> <td>2, 2 7 4</td> </tr> </tbody> </table>	字 名	戸 数 (戸)	人員数 (人)	本 浦	1 0 7、社寺 1 0、	6 2 7	鉦 切	1 4 5、社寺 5、	8 5 7	深 浦	6 2、社寺 3、	3 2 3	榎 戸	2 2、社寺 3、	1 2 8	日 向	5 6、社寺 4、	3 3 9	計	3 9 2、社寺 2 5、	2, 2 7 4
字 名	戸 数 (戸)	人員数 (人)																				
本 浦	1 0 7、社寺 1 0、	6 2 7																				
鉦 切	1 4 5、社寺 5、	8 5 7																				
深 浦	6 2、社寺 3、	3 2 3																				
榎 戸	2 2、社寺 3、	1 2 8																				
日 向	5 6、社寺 4、	3 3 9																				
計	3 9 2、社寺 2 5、	2, 2 7 4																				
<p>明治10 (1877)</p>	<p>3. - 公立小学浦郷学校が狭溢につき、平田貢氏所有の本浦313番地に校舎を新築する。建物は東西13間、南北15間、面積186坪で、生徒は男76人、女66人、教員3名とある。(『皇国地誌残稿(三浦郡)』上巻、『浦小沿革』)</p> <p>3. - 浦郷村代表人高橋弥惣八等4町村から「神社合併伺」が県令に提出される。これには、浦郷村字天神の天神社(天文6年勧請)及び同村字湯屋ノ下の山ノ神社が同村雷神社に合併、同村東鉦切の稲荷社が同所神明社に合併、同村字大久保の諏訪社が同所八王子社に合併することが記される。(『新市史』資近現1)</p> <p>8.28 横須賀港近海西北夏島より東南猿島に至る海面を海軍港と定め、海軍省所管となる。(『太政類典』)</p> <p>9. - コレラが東京から全国に広がり、横浜での死者は600余名という。(『県史』資料編10)</p> <p>10. - 西南戦争に従軍した兵士が凱旋の途中コレラに罹り、浦郷字貉ヶ谷の仮病舎に収容、死亡者は48名を数えた(10.18～11.11)。(『新市史』別軍)</p> <p>12. - 西南戦争戦病者埋葬地として、陸軍省は鉦切地内の字矢濱(浦郷村3579番地)の3畝歩(90坪)を借用。翌11年4月該地を官有地として買収、陸軍省が管理することを太政官が許可する。(『新市史』別軍)</p>																					
<p>明治11 (1878)</p>	<p>5.30 浦郷村内の天神社、山ノ神社、稲荷社(2)、諏訪社の小5社が、雷神社等に合併する。(横須賀市所蔵文書)</p>																					

年 号	出 来 事																																																
	<p>7.22 郡区町村編制法の公布により、大小区制は廃止され、浦郷村、船越新田、田浦村、長浦村となる。(『市史50』)</p> <p>11.18 郡区町村編制法の施行で大小区制が廃止となり、第14大区と第15大区が合併して三浦郡となる。初代郡長に小川茂周が就任。(『市史50』)</p> <p>11. - 「皇国地誌編輯例規」に基づき、浦郷村より『村誌』を県に提出する。(『皇国地誌残稿(三浦郡)』)</p> <p>11. - 『神奈川県皇国地誌残稿』上巻の「相模国三浦郡浦郷村誌」によれば、田40町8反余、畑64町余、宅地13町4反余、山林240町9反余、塩田八反余という。なお、戸数、人口、船数は次のとおり。</p> <table border="1" data-bbox="207 722 1153 1025"> <thead> <tr> <th colspan="5">戸 数</th> <th colspan="3">人 口</th> </tr> <tr> <th>民家</th> <th>社</th> <th>寺</th> <th>学校</th> <th>計</th> <th>男</th> <th>女</th> <th>計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>397</td> <td>15</td> <td>10</td> <td>1</td> <td>423</td> <td>1,171</td> <td>1,103</td> <td>2,274</td> </tr> <tr> <th colspan="8">船</th> </tr> <tr> <th colspan="2">荷船</th> <th colspan="2">押送船</th> <th>漁船</th> <th colspan="2">伝馬船</th> <th>計</th> </tr> <tr> <td colspan="2">17</td> <td colspan="2">25</td> <td>205</td> <td colspan="2">16</td> <td>263</td> </tr> </tbody> </table>	戸 数					人 口			民家	社	寺	学校	計	男	女	計	397	15	10	1	423	1,171	1,103	2,274	船								荷船		押送船		漁船	伝馬船		計	17		25		205	16		263
戸 数					人 口																																												
民家	社	寺	学校	計	男	女	計																																										
397	15	10	1	423	1,171	1,103	2,274																																										
船																																																	
荷船		押送船		漁船	伝馬船		計																																										
17		25		205	16		263																																										
<p>明治12 (1879)</p>	<p>6.13 「町村会規則」が発布され、戸数の多少に従い村会議員が選出される。(『市史50』)</p> <p>6.30 浦郷村戸長役場で『村中八ヶ寺院檀家取調帳』を作成する。(横須賀市所蔵)</p> <p>6. - 神奈川県が浦賀往還(横浜～浦賀)を仮県道に指定する。(『県史』資料編10)</p> <p>7. 1 浦郷村より「浦郷村火葬場設置願」が県令に提出される。候補地は字麴屋島2101番。(『新市史』資近現1)</p> <p>7.22 県令より内務卿に「三浦郡浦ノ郷へ避病院建築ノ儀ニ付上申」する。場所は「コウト」とあり字郷戸(ごうど)のことである。(『県史』資料編10)</p> <p>9. - 教育令(太政官布告40号)により大中小区制を廃止、町村別に小学校を設立。義務教育年限の制をたて、18か月(1年6カ月)を義務期間とする。(『市教育史』)</p>																																																

年 号	出 来 事
	<p>11. - 『神社明細帳（三浦郡）』（明治12年調）によれば、浦郷村字本浦・村社雷神社は境内313坪、氏子600戸。祠掌（神主）秋山長平とある。（若松町・諏訪神社所蔵）</p> <p>この年、①浦谷又右衛門が開発した浦谷新田が、一応完成。全体面積は3町3畝11歩（約3万平方尺）という。（『土木史』） ②全国でコレラが大流行し、患者数16万人以上、死者も10万人を超えたという。三浦半島でも多数の死者を数える。（『県史』資料編10）</p>
<p>明治13 (1880)</p>	<p>5. - 夏島を官有地として陸軍省が買収。同島は鉦切の人たちの所有で、1反10円で全島1,800円で売却したという。（『田浦町誌』）</p> <p>6. - 虎列刺病死者焼場（浦郷村火葬場）を字麴屋島（現・追浜東町）に設置した旨、三浦郡長に届ける。（横須賀市所蔵文書）</p> <p>8. - 本浦地区大火で民家24戸を焼失する。この時、田中易金・平田貢・高橋幸八・高橋弥惣八、義捐金を差出し、県令より賞される。（『横賀』）</p> <p>10. 3 夜半、暴風雨で被害あり。小坪村では民家20戸余が流出するという。（『逗子年表』）</p> <p>10. - 浦郷村字矢濱（黒崎）の西南戦争戦病者埋葬地は陸軍省が管理していたが、内務省に移管される。（『新市史』別軍）</p> <p>12.22 再び本浦地区大火に見舞われ、民家65戸を焼失、小学浦郷学校や法福寺なども類焼する。学校は深浦・坂中観音寺に移転する。（『浦小沿革』『法福寺誌』『横賀』）</p> <p>12. - 教育令改正（太政官布告59号）により、義務教育年限を3か年に延長する。（『市教育史』）</p>
<p>明治14 (1881)</p>	<p>1. - 校舎焼失のため、小学浦郷学校を深浦・観音寺で開校する。建坪18坪。しかし、児童を収容しきれず、鉦切だけ独立して正禅寺を校舎としたという。（『追浜とその付近』）</p> <p>7. - 浦郷村日向の三縄重左エ門外6名、海難事故における人命救助の功により、県令より賞賜金を授与される。（『横賀』）</p> <p>8. - 浦郷村等7か村、漕桂網禁止の願を県令宛て提出する。（『新市史』資近現I）</p> <p>この年、浦郷村に8反1畝28歩の塩田が存在した。（横須賀市所蔵文書）</p>
<p>明治15 (1882)</p>	<p>1. - 本浦・法福寺本堂焼失のため、沼間・海宝院の講学所の建物を移築、上棟式を挙げる。（『法福寺誌』）</p>

年 号	出 来 事
	<p>9. - 第55番小学浦郷学校は村立浦郷学校と改称する。(『浦小沿革』)</p> <p>この頃、本浦・旧名主家高橋清光、本格的に鷹取石の切出しを行う。(聞取調査)</p>
<p>明治16 (1883)</p>	<p>3.26 浦郷村等7か村、再び県令宛て漕桂網漁業御禁止願を提出する。(『新市史』資近現代I)</p> <p>7. - 雷神社社殿を新築する。同時に境内を拡張し、社殿を下段より中腹の現在地に移す(浦郷字本浦303番地)。(『田浦町誌』)旧社殿は金沢の洲崎に移されたという。(『追浜とその付近』)</p> <p>11. - 深浦・大国主社の社殿を再建する。(『田浦町誌』)</p> <p>この年、浦郷村戸長より県令宛て『浦郷村字地誌』(字地書上)を提出する。(横須賀市所蔵)</p>
<p>明治17 (1884)</p>	<p>7. 5 浦郷村、船越新田、田浦村、長浦村4か村の連合戸長役場が船越新田に設置される。戸長に渡辺富太郎(榎戸)就任。(『横須賀の町名』)</p> <p>9.15 大暴風雨で三浦半島地区は家屋の全半壊など被害甚大という。(『逗子市誌』5)</p> <p>11.9 暴風雨により、逗子・田越橋が流出するという。(『逗子市誌』5)</p>
<p>明治19 (1886)</p>	<p>4. - 小学校の義務教育年限が4か年となる。(『市教育史』)</p> <p>5. - 「梅田坂新道開鑿願」(発起人渡辺富太郎外5名)が、県知事あて提出される。(旧田川家文書)</p> <p>5. 5 浦郷村日向字大久保にトンネル工事が着手される(梅田トンネル)。(旧田川家文書)</p> <p>7. - 全国的にコレラが発生、県下の死亡者4,176人に上り、全国では10万8千余人という。(『県史』資料編)</p>
<p>明治20 (1887)</p>	<p>2. - 伊藤博文、陸軍用地である夏島に別荘の建築を始める。建築費約1,600円という。(『三浦古文化』第5号)</p> <p>3. - 地元民によって梅田トンネル(浦郷町1丁目・船越町間)が開通する。総工費1,552円73銭という。(『田浦町誌』・『浦郷村郷土誌』他)</p> <p>6. - 伊藤博文の別荘が夏島に完成。伊東巳代治、金子堅太郎、井上毅らと、憲法草案の起草・審議を行う。(『三浦古文化』第5号)</p>

年 号	出 来 事
	<p>7. 8 法令によって国道45号（東京～横須賀鎮守府）が制定され、村内に通ずる旧浦賀道が国道となる。（『市史50』）</p> <p>11.19 浦郷村外3か村組合立で尋常高等併置の船越小学校が創設され、浦郷村の高等科進学の子供たちは、以後昭和11年3月までここに通った。（『田浦町誌』）</p> <p>この年、吉倉運輸組によって吉倉・榎戸間の渡船が開業する。所用時間は約40分で3人乗合で片道6銭という。（『市史50』）</p>
<p>明治21 (1888)</p>	<p>2.10 伊藤博文、憲法草案の審議を再び行うという。（『三浦古文化』5）</p> <p>4. 1 村立浦郷学校は、公立浦郷学校と改称する。（『浦小沿革』）</p> <p>8.14 陸軍による夏島砲台の築造工事が始まる。翌日笹山砲台（深浦）も着工する。（『三浦半島城郭史』下）</p> <p>12.10 公立浦郷学校、浦郷字神応（稲荷谷戸・追浜東町）に校舎新築落成、開校式を挙げる。建坪99.5坪、運動場396坪。新築校舎へ移転のため観音寺仮校舎を廃止。（『浦小沿革』）</p>
<p>明治22 (1889)</p>	<p>1. 5 伊藤博文、秘書官伊東巳代治を伴い、夏島の別荘に滞在する（2週間の滞留という）。（東京日日新聞）</p> <p>1. ー 公立浦郷学校、神応校舎で授業を始める。（『浦小沿革』）</p> <p>4. 1 「町村制」施行され、浦郷村、船越新田、田浦村及び長浦村が合併して「浦郷村」となり、「旧浦郷村」は「浦郷村大字浦郷」となる。村役場は船越に開設、永島忠胤初代村長に就任。村会が開かれる。（『市史50』）</p> <p>8.20 笹山砲台が竣工する。備砲は同26年10月24 糶加農砲4門据付を完了。（『三浦半島城郭史』）</p> <p>11.14 夏島砲台（夏島町）が竣工する。同25年12月24 糶白砲6門据付竣工。（『三浦半島城郭史』）</p> <p>12.28 伊藤博文、夏島別荘を小田原城の程近い辺り（小田原市緑1丁目8番地）に移す。（『明治小田原町誌』中）</p>
<p>明治25 (1892)</p>	<p>3. ー 蒲谷新田の開発者蒲谷又右衛門死去。享年70歳（正禅寺墓碑）。</p> <p>4. ー 公立浦郷学校で女子のため裁縫科を付設する。（『浦小沿革』）</p>
<p>明治26 (1893)</p>	<p>2. ー 公立浦郷学校は小学校令の改正により、神奈川県三浦郡浦郷村立尋常浦郷小学校と改称する。（『浦小沿革』）</p>

年 号	出 来 事
	この年の 暮、鉾切地区で仲町から出火した大火で、91戸を焼失するという。 (『浦郷村の今昔』)
明治27 (1894)	1. - 村井弦斉、『桜の御所』(春陽堂刊)を執筆、浦郷・天神山麓での三浦道寸と楽岩寺種久との架空合戦を小説として記す。(左書奥付) 6. 1 浦郷4566番地(浦郷町1丁目)に日向巡査駐在所が設置される。(『田浦町誌』) 8.26 石渡磯右衛門の名で、浦郷沿岸から横浜沖合の中の瀬間の漁業許可を求めた「横須賀軍港出入願」が横須賀鎮守府に提出される。(『横賀』) この年、浦郷村に消防組が設置される。(『横賀』)
明治28 (1895)	2. 8 浦郷(東鉾切)より出火、民家11軒および神明社社殿を全焼する。(『神奈川県公報』『神社明細帳』) 2. - 尋常浦郷小学校、中野健明県知事より樟樹を頒布される。(『浦小沿革』) 11. - 横浜停車場を起点として、久良岐郡・三浦郡にわたる相海鉄道敷設に関する起業目論見及び発起趣旨が発表される。(『新市史』資近現II)
明治29 (1896)	2. - 小説家田山花袋、浦郷村に姪の神田あいを訪ねる。のち、「こもり江」「島の心中」に反映する。(『田山花袋研究』) 8. - 『相模百景』(折井愚哉編)が刊行される。夏島、烏帽子島辺で潮干狩をする風景画を載せる。(著言日付)
明治30 (1897)	8.17 浦郷村田中易金、高橋清光の兩人、神奈川県知事あて「水面埋立地願」を提出する。その内容は浦郷字本浦水面および同字山ノ脇水面の埋立で、面積は合計で2万5,395坪9合であった。翌31年3月に許可の見通し。(国立公文書館蔵)
明治31 (1898)	5.20 浦郷村戸長や村長を歴任した渡辺富太郎(榎戸)が死去する。享年51歳。(『田浦町誌』) 5. - 鷹取山石材採取の創始者と伝える高橋清光が死去。享年37歳(良心寺)。(墓碑銘) この年、①浦郷村立尋常浦郷小学校は学級4、在籍児童数276人(男139、女137)とある。(『浦小沿革』)②外科医斎藤研精が村医として日向の八王子神社下に開院する。(『追浜とその付近』)

年 号	出 来 事
明治32 (1899)	<p>5. ー 本浦出身の力士谷の川（本名鈴木安蔵、本浦1289番地・鈴木伊右衛門の次男）が夏場所で大幕、のち前頭2枚目まで昇る。相撲界全盛期に手取り力士として妙技を振るったが、惜しくも怪我で明治41年1月場所で引退、39歳であった。年寄荒汐を継ぐ。（『市博研（人文）』5、『追浜とその付近』）</p> <p>7.15 政府は軍機保護法及び要塞地帯法を公布。浦郷村全域が要塞地帯に含まれる。（『官報』）</p> <p>10. 7 暴風雨により被害あり。（『横買』）</p> <p>この年、①榎戸・能永寺山門が改修される。（『新市史』別文） ②この頃、海堡構築のため深浦の山や本浦の天神山を掘り崩すという。（『追浜とその付近』）</p>
明治33 (1900)	<p>9.30 東鉦切の源範頼伝説による戯曲「鎌倉山蒲桜重咲」が東京明治座で公演される。竹柴其水作、出演市川左団次、市川権十郎他。（『続々歌舞伎年代記』）</p> <p>12. ー 尋常浦郷小学校、県知事より楠苗を受領する。（『教育年表』明）</p>
明治34 (1901)	<p>1.15 東鉦切の源範頼伝説による戯曲「蒲冠者後日聞書」「祖先光輝磨鉦切」が明治座で公演される。（『続々歌舞伎年代記』）</p>
明治35 (1902)	<p>6. ー 榎戸・正観寺、薬師堂が石造に改築され落慶する。大工棟梁は中西浦村秋谷の村田伊之助、石工は瀬ヶ崎相川嘉平という。（正観寺棟札銘）</p>
明治36 (1903)	<p>4. ー 田川精米所（田川平三郎・浦郷4568番地）を創業する。（『新市史』資近現Ⅲ）</p> <p>9.10 雷神社で三浦相撲が興行される。三浦相撲は毎年定期的に三浦半島の10か所で実施され、雷神社もこの月日に催される。（『県体育史』）</p> <p>10. 1 2日まで三浦半島に暴風雨があり、横須賀線が不通となり、鎌倉三崎方面で崖崩れ、死者42人という。（『横買』）</p>
明治37 (1904)	<p>7.26 浦郷村船越尋常高等小学校高等科生徒、受持ち教師の専横に抗議して同盟退校。当時、浦郷地区からも高等科進学の子は船越尋常高等小学校に通学していた。（『買新』）</p>
明治38 (1905)	<p>4. 3 横須賀平民舎の救世軍兵士が浦郷村で講演会を開催する。平民舎は横須賀と浦郷の有志20余名で組織する。（『直言』）</p>

年 号	出 来 事
	<p>4. - 筒井トンネル(追浜東町1丁目・浦郷町2丁目間)が竣工する。(『田浦町誌』)</p> <p>この年、浦郷村(浦郷、船越、田浦、長浦)の戸数1,350、人口8,588人という。</p>
<p>明治39 (1906)</p>	<p>10. - 尋常浦郷小学校に実業補習学校を付設する。(『田浦町誌』)</p>
<p>明治40 (1907)</p>	<p>3. - 小学校の義務教育年限の4か年を6か年に延長する。(『市教育史』)</p> <p>6. 1 本浦(浦郷1231番地)に巡查駐在所が設置される。(『田浦警察署史』)</p>
<p>明治41 (1908)</p>	<p>4.26 浦郷村戸長や村長、県議員を歴任した田中易金(本浦)が死去。享年67歳(法福寺墓碑)。</p> <p>7.22 『三浦繁盛記』(岡田緑風著)が発刊され、日向の料理屋恵比寿屋のさくが公正新聞募集の美人投票で当選した記事が載る。恵比寿屋は榎戸の料亭叶屋とともに江戸時代からの老舗である。</p>
<p>明治42 (1909)</p>	<p>4. - 尋常浦郷小学校の在籍児童数454人という。(『浦小沿革』) この年、尋常科が6か年制となる。(『市教育史』)</p> <p>10.14 横須賀田戸の料亭小松で浦郷村を中心とする横須賀・金沢及び横浜間の電気鉄道敷設について、有志の協議が行われる。(『新市史』資近現Ⅱ)</p> <p>この年、水産講習所(後の東京水産大学)教授の妹尾秀実が室の木沿海で牡蠣養殖の試験場を設立し、実習を行う。(『牡蠣礼讃』)</p>
<p>明治43 (1910)</p>	<p>2.28 浦郷村会、全会一致で町制を可決する。(『新市史』資近現Ⅱ)</p> <p>3.12 浦郷村会での町制問題で長浦町派と浦郷町派に分かれ、紛糾混乱し血雨を見る形勢と報道される。(『横賀』)</p> <p>10. - 尋常浦郷小学校附属の実業補習学校が休止となる。(『田浦町誌』)</p> <p>12. - 特設電話が開通する。翌44年12月の「村内加入者凡10名あり」という。(『浦郷村郷土誌』)</p> <p>この年、①海軍水上機練習所として、追浜海岸一帯が海軍に接収され、その地先の公有水面の埋立てが承認される。②浦郷村(浦郷・船越・田浦・長浦)の戸数2,446、人口1万3,860人、船越の兵器廠職工数約4,000人という。(『浦郷村郷土誌』)</p>

年 号	出 来 事																					
明治44 (1911)	<p>4. 1 共楽園（田川公園・約3,600坪）が、日向に開園する（田川平三郎経営）。共楽園の命名は当時の県知事周布浩平で、園内には巖谷小波の句碑が建つ。（『田浦町誌』・『回想』）</p> <p>4. 3 浦郷村日向青年団、共楽園（田川公園）で青年団の発会式を挙げる。（『横買』）</p> <p>6.18 暴風雨のため、被害あり。逗子では小学校が倒壊する。（『横買』）</p> <p>6.23 浦郷青年会、尋常浦郷小学校で講話大会を開催する。（『横買』）</p> <p>7.26 前日からの暴風雨による高潮で浦郷村本浦の海岸堤防決壊、140戸の住宅が浸水、家屋・農産物に被害が出る。（『横買』）</p> <p>8. - 浦郷・鷹取山の土工300余人、賃上げを要求。3割増給を獲得する。（『民主運動史』）</p> <p>9. 8 浦郷・鷹取山の石材運搬船夫、10%増給を要求してストライキに入る。（『民主運動史』）</p> <p>12. - 『三浦郡浦郷村郷土誌』（孔版）が発行される。浦郷の記録によると、明治43年の各字の戸数・人口は下記の通りである。（東京大学史料編纂所蔵）</p> <table border="1" data-bbox="491 1000 1096 1306"> <thead> <tr> <th></th> <th>戸 数</th> <th>人 口</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>本 浦</td> <td>1 6 7</td> <td>1, 1 7 1</td> </tr> <tr> <td>鉞 切</td> <td>2 1 7</td> <td>1, 3 1 3</td> </tr> <tr> <td>深 浦</td> <td>1 1 7</td> <td>6 7 3</td> </tr> <tr> <td>榎 戸</td> <td>1 6 1</td> <td>9 2 2</td> </tr> <tr> <td>日 向</td> <td>1 2 6</td> <td>7 1 8</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>7 8 8</td> <td>4, 7 9 7</td> </tr> </tbody> </table> <p>この『浦郷村郷土誌』下巻の漁獲動物（魚類）の記事のなかに、「かき（牡蠣）は近年養殖場を設けて盛んに増殖を図れり」、との記事あり。</p> <p>この年、①深浦・亀島周辺一帯が海軍によって買収され、横須賀海軍建築部深浦出張所が開設される。（『田浦町誌』）②水産講習所（東京水産大学）が夏島の西岸浅瀬に養蠣場を設け、牡蠣の養殖を行う。（『牡蠣礼讃』）</p>		戸 数	人 口	本 浦	1 6 7	1, 1 7 1	鉞 切	2 1 7	1, 3 1 3	深 浦	1 1 7	6 7 3	榎 戸	1 6 1	9 2 2	日 向	1 2 6	7 1 8	計	7 8 8	4, 7 9 7
	戸 数	人 口																				
本 浦	1 6 7	1, 1 7 1																				
鉞 切	2 1 7	1, 3 1 3																				
深 浦	1 1 7	6 7 3																				
榎 戸	1 6 1	9 2 2																				
日 向	1 2 6	7 1 8																				
計	7 8 8	4, 7 9 7																				

年 号	出 来 事
明治45 (1912)	<p>2. ー 追浜トンネル（浦郷町3丁目・浦郷町5丁目間）が竣工する。当初は「鉦切トンネル」と称したが、昭和8年に改修された際、追浜トンネルと改称される。（『横買』）</p> <p>3. 7 飛行場用地拡張のため、海軍は夏島地先公有水面79,244坪の埋立申請を県知事あて行う。以来この地先の入り江は、20数回にわたり埋立が行われる。（『横買』）</p> <p>3. ー 浦郷村鉦切、久良岐郡野島村、六浦荘の漁民、海軍築港部による浦郷村深浦と鉦切間の築港と、深浦前面烏帽子岩および夏島間の海面1万坪の埋立は、漁船が航路を失うため沿岸に一道の航通路を残すよう海軍省に陳情することを協議する。（『市史80』別）</p> <p>6. 8 尋常浦郷小学校、字清水2320番地（現在地）に校舎新築、開校式を挙げる。校舎163坪、運動場1,377坪、建築費5,490円。この日を創立記念日とする。（『浦小沿革』）</p> <p>6.26 海軍航空術研究委員会が設立され、事務所を田浦水雷団に置かれる。（『航空史』）</p>
大正元 (1912)	<p>8.22 浦郷村で野犬により8人が咬傷を負う。（『横買』）</p> <p>9.30 追浜での航空術研究のための格納庫及び事務所が竣工する。「木造堀建荒木造」の平家建で、建坪245坪、工費7,130円であった。（『海軍営繕研』）</p> <p>10. 9 米国製複式水上飛行機2機、追浜の水上飛行機航空術研究所に到着する。（『横買』）</p> <p>10.20 尋常浦郷小学校附属実業補習学校、子守の女子なども通学できるよう夜間授業の特殊部を設置する。（『市教育史』）</p> <p>10.21 海軍航空術研究委員会は追浜に南北600メートル、東西200メートルの地積を整理して機体格納庫1棟、海岸に滑走台を造る。追浜飛行場の誕生である。（『航空史』）</p> <p>10. ー 尋常浦郷小学校付設の実業補習学校を再開する。（『浦小沿革』）</p> <p>11. 2 追浜飛行場で河野三吉大尉ら、新着のカーチス式水上機で初めて試乗飛揚に成功する。日本海軍初の飛行であった。（『航空史』）</p> <p>11. 5 金子養三大尉操縦のファルマン式水上機の飛行に成功する。（『航空史』）</p> <p>11. 8 横須賀市及び三浦郡内にコレラ発生のため、市内の魚問屋や魚商らに鮮魚販売禁止通告（『横買』）</p>

年 号	出 来 事
	<p>11.12 金子・河野両大尉、横浜沖にて挙行の観艦式に参加、天覧飛行に成功する。(『航空史』)</p> <p>12.17 金子大尉、ファルマン機で東京湾横断に成功する。(『横買』)</p> <p>この年、水産講習所(東京水産大学)が夏島の養蠶場でフランス式稚貝付着器を設置し、養殖法の改良試験に着手。(『牡蠣礼讃』)</p>
<p>大正2 (1913)</p>	<p>1. 4 鉦切青年同志会の第1回総会を正禅寺で開催、講話や教育的娯楽などを実施、数百名が参加する。(『横買』)</p> <p>1. - 榎戸・日の出常設館が開館する。建坪36坪、定員380名、経営は日向・石戸伝吉。(『田浦町誌』)</p> <p>2.18 浦郷村研究会、尋常浦郷小学校で青年修養講演会を開催する。(『横買』)</p> <p>4. - 海軍航空術研究委員会の事務所を、田浦水雷団から追浜に移す。(『横買』)</p> <p>8.17 浦郷村本浦青年団、尋常浦郷小学校で発会式を挙げる。(『横買』)</p> <p>10.20 西南役兵士の墓碑を追浜海岸の黒崎より、現在地に改葬される。(『横買』)</p> <p>この年、①本浦地区に初めて電気がつく。②浦郷(本浦・鉦切・深浦・榎戸・日向)の戸数1,142となる。③宮城新昌(沖縄出身)が米国から帰国。その後、鉦切に牡蠣養殖のローヤル商会(浦郷2873)を設立し、牡蠣養殖を開始する。(『牡蠣礼讃』)④浦郷小学校の在籍児童数574名という。(『浦小沿革』)</p>
<p>大正3 (1914)</p>	<p>1. 7 追浜飛行場で新購入のドゥペルデュッサン式飛行機の初飛行に成功する。(『横買』)</p> <p>3. 3 追浜海軍飛行場でドゥペルデュッサン式飛行機が墜落。井上・庄司両大尉が重傷。(『航空史』)</p> <p>4. 1 「町村制」の規程により区を置き、各区に区長及び区長代理者を置いて、町一般行政の補助及びその区の重要事務を執行させる(本浦・鉦切・深浦・榎戸・日向各区)。(『田浦町誌』)</p> <p>6. 1 浦郷村、町制を施行。田浦町と改称し、役場を船越に置く。初代町長に金谷運吉が就任。(『県公報』『田浦町誌』)</p> <p>8.13 暴風雨で汽船流出沈没や崖崩れが相次ぐ。(『横買』)</p> <p>8.23 海軍航空隊、青島攻囲戦に参加する。(『航空史』)</p> <p>10. - 相海鉄道工事期限延長願却下される。(『新市史』資近現II)</p>

年 号	出 来 事
	<p>12.20 追浜飛行場の設備が整い、飛行機11機となる。(『航空史』)</p> <p>この年、①御大典(大正天皇即位)記念に町から各社寺に銀杏を2本植樹する。②この頃、水産講習所とローヤル商會が共同して試験養殖を行い、海軍用地である夏島周辺浅瀬など80町歩(?)を設定している。(『牡蠣礼讃』)</p>
<p>大正4 (1915)</p>	<p>3.6 追浜にて練習飛行のファルマン機墜落、安達・武部両大尉および柳瀬三等兵曹の3名が殉職。海軍航空最初の犠牲者であった。(『航空史』)</p> <p>4.13 小説家有島武郎、飛行機見学のため追浜を訪れる。(『有島武郎全集』書簡編)</p> <p>4. — 浦郷尋常小学校の実業補習学校を休止する。(『浦小沿革』)</p> <p>7.15 「榎戸青年会の現況」、会員数57名、殆ど海軍職工で、海軍工廠造兵部に勤務する。(『横買』)</p> <p>7.26 追浜飛行場で第1回夜間飛行に成功する。(『横買』)</p> <p>9.17 夏島砲台、笹山砲台ともに防禦營造物より除籍され、海軍省に移管される。(『新市史』別軍)</p> <p>9. — 追浜地先埋立地の一部を田浦町に編入(以後昭和5年2月まで5回にわたり、計49万平方尺=14万9千坪を編入)。</p> <p>11. — 日向に「梅田隧道之碑」が建立される。発起人田川平三郎他、撰文田辺新之助(漢学者・逗子開成中学校長)。(碑文銘)</p>
<p>大正5 (1916)</p>	<p>1.24 浦郷の座間與吉と田中勝太両名申請の同町地先公有水面約1,482坪の埋立が許可される。</p> <p>3.20 東京の海事博覧會開會式訪問の阿部中尉・頓宮機関大尉搭乗機が帰途に墜落、両将校死亡。(『横買』)</p> <p>4.1 海軍航空術研究委員会を廃し、横須賀海軍航空隊(鉦切・追浜)を開隊する。追浜飛行場は同隊付属となる。(『航空史』)</p> <p>4.23 梅田隧道開鑿記念碑除幕式を挙げる。(『案内状』)</p> <p>9.1 尋常浦郷小学校、浦郷字深浦・鉦切にコレラが発生のため、同月15日まで閉校する。(『市教育史』)</p> <p>10.17 深浦トンネル(浦郷町3丁目・追浜東町2丁目間)の開通式を行う。すでに開削工事は去る8月中旬に竣工していたが、虎列刺(コレラ)が蔓延したため、開通式は延期されていた。(『横買』)</p>

年 号	出 来 事
	11.20 横須賀海軍航空隊第1回飛行学生卒業飛行で東京湾を飛行する。 (『横買』)
大正6 (1917)	<p>2. 1 横須賀市と田浦町の合併協議会が横須賀市役所で行われる。田浦町から町長金谷運吉、町会議員田川平三郎、田中勝太など7名が参加する。(『横須賀市史稿』)</p> <p>2.19 天皇陛下、横須賀海軍航空隊に行幸し、飛行訓練等を天覧する。(『航空史』)</p> <p>5. 1 浦郷字南郷、南郷谷戸、駒寄、皆ヶ作、梅田、梅田谷戸、長畠を大字船越に編入する。(『横須賀の町名』)</p> <p>8.27 田浦町浦郷字追浜地先水面埋立地に追浜の字名を付す。(『県公報』)</p> <p>9.30 暴風雨と大潮が重なり、船舶の流出や家屋倒壊、軒下浸水など被害甚大。(『横買』)</p>
大正7 (1918)	<p>2. 4 浦郷の火の見櫓建築費問題で浦郷区長が引責辞任する。(『横買』)</p> <p>4. 1 横須賀海軍航空隊(追浜)に気球隊を設置する。(『航空史』)</p> <p>4. - 「横廠式水上偵察機」2機、横須賀・佐世保間無着水飛行に成功する。(『横買』)</p> <p>6. 1 追浜に陸上飛行場を造成するため夏島・野島の海面(約15万坪)の埋立工事が始められる。烏帽子島(標高15m、周囲約200m)は、この年最初に崩されて跡形も無くなった。(『市史50』)</p> <p>12.27 東鉦切・神明社、同所の稲荷社、酒ノ宮両社を合併する。(『田浦町誌』『神社明細帳(三浦郡)』)</p> <p>12.30 『三浦郡誌』(神奈川県三浦郡教育会編)が発刊される。「浦郷」の項に「夏島の付近に有名な牡蠣の養殖地あり」と記される。(左書奥付)</p> <p>この年、①鉦切にコレラが流行、死者9名という。(『浦郷村の今昔』)②水産講習所・ローヤル商会共同の牡蠣試験養殖場であった海面が、海軍航空隊の敷地拡張のため埋立となる。代地として深浦湾口に移して試験を続行。(『牡蠣礼讃』『三浦郡誌』)</p>
大正8 (1919)	<p>1.17 横須賀海軍航空隊の桑原大尉、水上飛行機で日本初の宙返りに成功する。(『横買』)</p> <p>3.30 横須賀海軍航空隊気球隊、繫留気球の製作試験飛行に成功する。(『横買』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>4.11 国道45号は道路法制定により、国道31号（横浜・横須賀鎮守府間）となる。（『官報』）</p> <p>10.31 東鉦切・神明社、本殿・覆殿改築が竣工する。（『神社明細帳（三浦郡）』）</p> <p>11.26 西鉦切・稲荷社及び同所酒ノ社の2社が、東鉦切・神明社に合併処分済を届出る。（『神社明細帳（三浦郡）』追記）</p> <p>12.23 鷹取山で石材運搬中に事故があり、1人死亡する。（『横買』）</p> <p>この年、吉倉・榎戸間渡船の田浦発着所を廃止、海軍地拡張のため。（『横経済史』）</p>
<p>大正9 (1920)</p>	<p>4. — 座間愛蔵、法福寺に半鐘を寄進する。（『法福寺誌』）</p> <p>5. — 鳥海医院、榎戸（現浦郷町1丁目59番地）に産婦人科を主体にして開院する。（仮題『自伝青山松次』）</p> <p>6.26 横須賀海軍航空隊で初の艦船発着飛行に成功する。（『横買』）</p> <p>7. 7 フランス・フォール航空使節団が追浜の横須賀海軍航空隊で航空教育を開始、講習は8月2日まで行われる。（『新市史』別軍）</p> <p>7. — 飛行場造成の埋立地の一部を田浦町に編入（以後昭和17年7月まで18回にわたり約20万平方尺＝6万3千坪＝を編入）する。</p> <p>9.30 海軍航空隊の航空機3機が、第1回国勢調査の宣伝ビラを市街上空から散布する。（『横買』）</p> <p>10. 1 第一回国勢調査が実施される。田浦町（浦郷、船越、田浦、長浦）の人口20,180人。（『国勢調査』）</p> <p>10.30 尋常浦郷小学校で教育勅語御下賜30年記念式が挙行される。（『市教育史』）</p> <p>11. 6 県の商工展覧会開会に際し、海軍航空隊（追浜）の航空機3機が、宣伝ビラを散布。（『横買』）</p> <p>12.20 夏島の埋立工事現場で落石、土工1名が死亡する。（『横買』）</p> <p>この年、①掛田商店が創業される（掛田仁市・鷹取町）。（『此処』）②航空隊地埋立の一部が完成、このため養蠶場を深浦湾から再び夏島埋立地に隣接する浅瀬や水路に選定、同12年まで継続する。（『牡蠣礼讃』）</p>
<p>大正10 (1921)</p>	<p>2. 8 横須賀海軍航空隊（追浜）拡張工事（夏島埋立地）で崖崩れがあり、3人死傷する。（『横買』）</p>

年 号	出 来 事
	<p>3. ー 横須賀海軍航空隊に飛行船隊を設置し、飛行船の戦術用法の本格的な研究を始める。(『航空史』)</p> <p>6.18 追浜で飛行機より初めて魚雷発射に成功する。(『横買』)</p> <p>7.19 尋常浦郷小学校の敷地拡張のため浦郷字清水の畑地を買収(約1,500坪、単価2円10銭)と校舎建設費の総額三萬八千貳百三円の追加予算案を提出。(『田浦町議会記録』)</p> <p>この年、吉倉運輸組は吉倉運輸(株)となり、吉倉・榎戸間の海路に発動機船5隻を備えて発着する。(『市史50』)</p>
<p>大正11 (1922)</p>	<p>1.25 追浜飛行場の巨大な飛行船格納庫が大爆発し、飛行船共に一瞬にして焼失する。(『浦郷村の今昔』『横買』)</p> <p>3.16 追浜で日本人の落下傘練習に成功する。(『横買』)</p> <p>4.26 地震あり。観音埼灯台に大亀裂を生じる。震源地は浦賀水道付近という。(『県災害誌』)</p> <p>6. 1 国道第31号の改修工事を起工。船越坂を掘削して浦郷トンネルの造成に着手する。(『横買』)</p> <p>7.21 田浦町議会、浦郷字天神地先水面の2万9,868坪の埋立工事のため、25万円の起債を決議する。(『新市史』資近現II)</p> <p>8.10 寺田寅彦(当時東京帝国大学航空研究所所員)、追浜に行き飛行船焼失現場を視察、当時の状況を査問する。(『寺田寅彦全集』)</p> <p>11. ー 国道特23号(国道第31号から航空隊まで、4間半乃至5間幅)を起工着手する。「特」とは軍道のこと。(『田浦町誌』)</p>
<p>大正12 (1923)</p>	<p>2.11 深浦青年団総会で民力涵養の講演会を行う。(『横買』)</p> <p>3. 4 尋常浦郷小学校保護会が発足する。(『商工案内』11)</p> <p>4. 1 尋常浦郷小学校は、田浦町浦郷尋常小学校と改称する。在籍児童数899人という。(『浦小沿革』)</p> <p>5.10 横須賀市医師会(会長長岡幻廓)一行、家族連れで追浜飛行場を見学する。(『横須賀医師会略史』)</p> <p>7.24 浦郷字郷戸地先の公有水面埋立地662坪を編入する。(『田浦町議会記録』)</p> <p>8.24 浦郷字矢濱地先の公有水面を埋立て、691坪5合30を編入する。(『田浦町議会記録』)</p>

年 号	出 来 事																											
	<p>9. 1 関東大震災。浦郷尋常小学校の神心・清水両校舎全壊、男児2名死亡、女児1名負傷。10月10日まで授業休止。以後全学年2部授業を実施。(『市教育史』) 田浦町の被害は、死者128名、負傷者480余名、全壊家屋473戸、半壊家屋1,379戸、破壊家屋1,650戸という。田浦町浦郷の被害(町役場調)9月12日報告。</p> <table border="1" data-bbox="279 513 1112 703"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th colspan="3">人 員</th> <th colspan="2">家 屋</th> </tr> <tr> <th>死者</th> <th>傷者</th> <th>行方不明</th> <th>全壊</th> <th>半壊</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>本浦・鉞切</td> <td>7</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>83</td> <td>460</td> </tr> <tr> <td>深浦・榎戸・日向</td> <td>5</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>25</td> <td>186</td> </tr> </tbody> </table> <p>9. 2 海軍航空隊による震災被害状況の第1次偵察撮影飛行が東京一横浜一三浦半島上空で開始された(計6回行われる)。(『市震災誌』)</p> <p>9. 6 海軍航空隊、横須賀一芝浦(鎮守府・海軍省)間の定期飛行開始(12日まで7回飛行)。(『市震災誌』)</p> <p>9. 9 海軍航空隊、第2次偵察撮影飛行開始(～12日)。(『市震災誌』)</p> <p>11.1 航空船隊を横須賀海軍航空隊から霞が浦航空隊へ移転する。(『横買』)</p> <p>この年、①浦郷火葬場、民営(船越葬儀社大野屋)であったが大震災後町営となる。(『市史50』) ②浦郷小学校の在籍児童数899名という。(『浦小沿革』) ③夏島付近の牡蠣養殖は関東大震災で大被害を受け、地盤の隆起などで地蒔き式養殖法では継続できなくなる。このため海の立体利用が図られ深所の養殖技術が考案され、ローヤル商会の宮城新昌などによって画期的な垂下式養殖法が開発される。(『牡蠣礼讃』)</p>						人 員			家 屋		死者	傷者	行方不明	全壊	半壊	本浦・鉞切	7	0	0	83	460	深浦・榎戸・日向	5	0	0	25	186
	人 員			家 屋																								
	死者	傷者	行方不明	全壊	半壊																							
本浦・鉞切	7	0	0	83	460																							
深浦・榎戸・日向	5	0	0	25	186																							
<p>大正13 (1924)</p>	<p>1.14 浦郷字郷戸地先の公有水面埋立地の261坪を編入する。(『田浦町議会記録』)</p> <p>4. 一 田浦町各尋常小学校に児童保護者会を設置、浦郷尋常小学校の初代保護者会長に田川平三郎が就任。(『田浦町誌』)</p> <p>5. 一 石渡製材所(石渡峰吉、浦郷2485番地)が創業する。(『横経済史』)</p> <p>6. 8 田浦町女子青年会浦郷支部が発足する。(『横買』)</p> <p>6.21 田浦町は浦郷字細浦地先の公有水面356坪を埋立てる議案を提出する。(『田浦町議会議案』)</p>																											

年 号	出 来 事
	<p>7.30 榎戸・正観寺本堂を邱上の現在地へ新築・移転。完成に伴い入仏式の練行列が行われる。(『正観寺誌』)</p> <p>8.26 大暴風雨のため崩崖・浸水など被害甚大という。(『新市史』資近現Ⅱ)</p> <p>12. - (株)川井組(浦郷4317、田川平三郎)が設立される。(『商工案内』11)</p> <p>この年、深浦・大国主社に海軍砲身及び砲架が奉納される。(『田浦町誌』)</p>
<p>大正14 (1925)</p>	<p>1. - 国道第31号の改修工事が田浦・吉倉間を除き完成。この月、特23号国道(軍道、本浦駐在所から航空隊正門迄、幅9㍎)も完成する。(『市史50』)</p> <p>6.16 海軍施設に夏季中遊泳所を開設、浦郷では航空隊前に追浜遊泳所を開設する。(『新市史』資近現Ⅱ)</p> <p>9.29 29日～10月1日まで集中豪雨が続き、床上浸水や全壊家屋、死者6名など被害甚大。(『横賀』)</p> <p>9. - 鈴木木工場(鈴木金五郎、本浦212番地)が創業する。(『新市史』資近現Ⅲ)</p> <p>12. - 関東興信銀行浦郷代理店が日向に開業する。(『田浦町誌』)</p> <p>この年、①浦郷トンネル(追浜町1丁目・船越町間)が竣工する。(『市史50』)②鉈切・ローヤル商会の宮城新昌は牡蠣養殖の新技法である垂下式養殖法をクリアすると、新しく宮城県石巻に会社を興し、牡蠣の生産を開始する。この新技法で牡蠣生産は飛躍的な増産となり、その技術は昭和前期に全国に普及した。鉈切は宮城新昌の名とともに、その技術革新の名誉ある地である。なお、ローヤル商会による鉈切の牡蠣養殖所は昭和11年頃まで存在していたと思われる。(『田浦町誌』『郷土地理読本』『空技廠と航空隊』『牡蠣礼讃』)</p>
<p>大正15 (1926)</p>	<p>2.16 浦郷・佐野平次郎、浦郷字清水2357番地山林3畝10歩(内芝地1畝18歩)を浦郷小学校敷地として寄付する。(『田浦町議会記録』)</p> <p>3. 1 大正7年以来工事を進めてきた追浜陸上飛行場が一応完成、埋立地は約15万坪(この内約11万坪が陸上飛行場)に及び、その費用は137万3,564円という。(『新市史』別軍)</p> <p>4. - 日向・八王子社へ海軍砲身・砲架及び弾丸が奉納される。(『田浦町誌』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>5.17 浦郷尋常小学校児童保護者会代表田川平三郎より教授用大形オルガン壺台（価格二百八拾九円）を同校に寄付する。（『田浦町議会記録』）</p> <p>7. 1 田浦町立浦郷青年訓練所を浦郷尋常小学校内に設置、生徒数160名という（昭和3年度の生徒数は37名）。（『田浦町誌』）</p> <p>9.25 雷神社、県公報布告411号により神饌幣帛料を奉る指定神社となる。（『田浦町誌』）</p> <p>10. - 榎戸・山中社、再建され、消防組役付山田正次郎外15名が石灯笼一對を奉納する。（石灯笼刻銘）</p> <p>11.27 「明治憲法起草遺跡記念碑」の除幕式を挙げる（横須賀海軍航空隊内・夏島）。高松宮殿下、伊東巳代治、金子堅太郎、加藤寛治等が列席する。碑文は伊東巳代治伯の撰書。（『田浦町誌』）</p> <p>12. 4 皆ヶ作トンネル（追浜町1丁目・船越町6丁目間）が竣工する。（『横賀』）</p>
<p>昭和2 (1927)</p>	<p>3. 4 米国寄贈の人形伝達式が県庁で行われ、浦郷尋常小学校も受領する。（『市教育史』）</p> <p>5. - 「烏帽子巖之跡」碑が旧地点に建立される（花崗岩、高さ93、幅36.5センチ）。（『田浦町誌』）</p> <p>5. - 官修墓地（西南戦争戦病者墓地）荒廃のため改修を加える。（『田浦町誌』）</p> <p>6. - 国道31号（現・16号線）、浦郷本浦より長浦田ノ浦まで竣工する。（『田浦町誌』）</p> <p>8. 1 浦郷字細浦地先の公有水面の埋立て完成により編入する。（『県公報』）</p> <p>11.17 深浦地先の公有水面埋立618坪を議決する。（『田浦町議会記録』）</p> <p>11.17 田浦町は日向・榎戸地先の公有水面410坪の埋立案（共同荷揚場）を知事に提出。（『田浦町議会記録』）</p> <p>12.20 田浦町議会は①浦郷字前田に電車停留所特設費（追浜駅設置）として、3,000円を湘南電気鉄道(株)に寄付すること②本町浦郷字日向・榎戸地先公有水面410坪7合埋立及び護岸工事費として5,000円の支出を議決する。（『田浦町議会歳入歳出追加予算案』）</p>

年 号	出 来 事
	<p>12. ー 井口辰之助（横須賀の人）、浦郷字神応（現・追浜東町）の蓮田や畑を埋立て、住宅地を造成する。（『田浦町誌』）</p> <p>この年、①浦郷（本浦・鉈切・深浦・榎戸・日向）の戸数1,172という。 ②浦郷尋常小学校の在籍児童数961名（男483、女478）。（『浦小沿革』）</p>
<p>昭和3 (1928)</p>	<p>2.27 田浦町議会は小学校設備の財源に充てるため、本年4月より昭和4年3月迄尋常科児童一人一ヶ月金二十銭、高等科児童一人金八十銭を徴収することを議決する。（「田浦町議会記録」）</p> <p>2.27 軍事上必要につき浦郷字亀島（80坪、単価20円）を海軍省に売却する議案を提出。（『田浦町議会記録』）</p> <p>3.22 浦郷字郷戸地先の公有水面606坪の埋立を議決する。（「田浦町議会記録」）</p> <p>3. ー 深浦湾内の亀島は海軍に買い上げられ、亀島社の社殿は大国主社に移転する。売却代金は1,596円（80坪）であった。亀島の旧姿は海軍航空廠を設置するための埋立てで消滅した。（『田浦町誌』）</p> <p>4.27 蒲谷惣七他出願の浦郷字東鉈切地先公有水面の埋立て262坪を許可する。（「田浦町議会記録」）</p> <p>4.27 蒲谷又左衛門他出願の浦郷字西鉈切地先公有水面の埋立て485坪を許可する。（『田浦町議会記録』）</p> <p>4. ー 日向の関東興信銀行浦郷代理店は戸塚銀行と業務併合により廃店する。（『田浦町誌』）</p> <p>5.30 御大典記念事業として浦郷尋常小学校の御真影奉安殿が落成する。工費2,500円。（『浦小沿革』）</p> <p>5. ー 合名会社杉山商店（浦郷336、杉山剛平）が設立される。（『商工11』）</p> <p>6.30 浦郷字本浦252番地の従来防波堤（官有地、1反2畝15歩）として維持管理してきたものが、同地先海面埋立の結果存置の必要なきに至ったため、無償を以って払下げ方を其の筋に出願することを決議する。（「田浦町議会記録」）</p> <p>6.30 浦郷字郷戸地先公有水面2,022平方メートルを田浦町の区域として編入する。（「田浦町議会記録」）</p> <p>6.30 浦郷字亀島及び深浦地先の公有水面埋立618坪、追認許可される。（「田浦町議会記録」）</p>

年 号	出 来 事
	<p>7.12 平田八重、「首斬観音碑」(現・追浜町1丁目)を建立する。題字松竹庵梅月書。(刻銘碑文)</p> <p>7.13 金沢町野島魚業組合陳情中の海軍航空隊西北海面に海苔採取場設置の件、条件付きで海軍から許可される。(『横買』)</p> <p>11. 2 浦郷尋常小学校児童保護者は御真影奉安殿(1棟、2千3百円)を田浦町に寄付する。(「田浦町議会記録」)</p> <p>11.10 田浦町の御大典記念事業で80歳以上全員に天杯授与。浦郷地区では90歳以上女1名、80歳以上男7名、女13名、計21名。(『田浦町誌』)</p> <p>12. 一 御大典(昭和天皇即位)奉祝記念事業として、『田浦町誌』(孔版)が刊行される。三浦郡教育会第一部会編、田中作造・高橋真太監修する。</p> <p>この年、①国道31号線、浦郷から逸見まで7つのトンネルで結ばれ開通する。(昭和27年道路法改正によって、小川町までを国道16号と改称)。(『市史50』)</p> <p>②広部合名会社(東京)による天神山下公有水面埋立工事が目下進行中で、完成すれば3万6,000坪の住宅地が造成される。(『田浦町誌』)</p> <p>③雷神社で国道に続く参道を築造する。(『田浦町誌』)</p> <p>④浦郷地区の医院は榎戸の鳥海医院、村瀬医院のみで、本浦・鉦切・深浦・日向には医院がゼロであった。(『田浦町誌』)</p> <p>⑤追浜堂書店が創業する(現在の追浜町3丁目2番地)。(聞取調査)</p> <p>⑥魚金本店が創業する(現在の駅前銀座通り・さかいや店舗地)。(聞取調査)</p> <p>⑦若葉花園(追浜町2丁目)の前身である高橋商店が創業する。(聞取調査)</p> <p>⑧浦郷尋常小学校の在籍児童数962人とあり。(『浦小沿革』)</p> <p>⑨浦郷青年訓練所の本年入所生徒21名、卒業生徒5名で、現在入所生徒数21名という。(『田浦町事務報告書』)</p> <p>⑩浦郷字日向・榎戸地先公有水面410坪を埋立てる。工費予算5000円。(田浦町議会記録)</p>
<p>昭和4 (1929)</p>	<p>3.31 浦郷尋常小学校に付設町立浦郷青年訓練所を設置する。(『浦小沿革』)</p> <p>4. 一 相模運輸(株)造船部(藤原英三郎、浦郷4954番地)が設立される。(『新市史』資近現Ⅲ)</p> <p>5.19 横須賀海軍航空隊(追浜)でサイパン～横須賀往復飛行実施。22日同島ガラパンに着水、25日横須賀(追浜)に帰還。(『横買』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>10. - 雷神社に狛犬・石灯笼が氏子によって、奉納される。(「刻銘」)</p> <p>12. - 浦郷尋常小学校、二階建校舎1棟(6教室)を、新築する。在籍児童数996人という。(『浦小沿革』)</p> <p>この年、広部合名会社(東京)、天神山下の水面を埋立て、3万6,000坪の住宅地を完成させる。(『横賀』)</p>
<p>昭和5 (1930)</p>	<p>4. 1 湘南電気鉄道(株)、黄金町・浦賀間の営業が開始され、追浜駅が設置される。当初は駅員無配置駅であったが、同6月11日より配置。(『京急80』)</p> <p>6. 1 横須賀海軍航空隊に飛行予科練習部を設置、第1期生79名の教育を開始する(同14年3月に茨城県霞が浦に移転する)。(『新市史』別軍事)</p> <p>6. - 渋谷製綿工場(渋谷巳代治、浦郷1476番地)が設立される。(『新市史』資近現Ⅲ)</p> <p>7.30 夏島で漁夫が拾った練習用の爆弾が暴発し、2人が重傷を負う。(『横賀』)</p> <p>9.23 榎戸・能永寺で政友会の演説会を開催、弁士に植原悦二郎、大井鉄丸、加藤小兵衛他。(『横賀』)</p> <p>11.29 日向・光龍寺が全焼する。(『横賀』)</p> <p>11. - 本浦会館(追浜本町1丁目)が完成、同時に火の見櫓の設置と消防用蒸気ポンプ1台を購入。一般寄付金五千五百円により賄う。(『追浜本町一部会 名鑑』)</p> <p>この年、①八百竹商店(沼田商店、追浜町3丁目)が創業する。(聞取調査) ②浦郷地区の人口7,589人という(国勢調査) ③榎戸・鳥海医院長鳥海順、浦郷1241番地(現在地)の約600坪を購入する。(仮題『自伝青山松次』)</p>
<p>昭和6 (1931)</p>	<p>2.20 横須賀海軍航空隊で殉難飛行将士の葬儀が行われる。(『横須賀市事務報告』)</p> <p>3. 8 深浦にできる航空廠敷地買収問題は海軍と地主の価格が折り合わず、その差額1万円を町で負担するよう地主側が要求、町ではその半額の5,000円の支出を決める。(『横賀』)</p> <p>3.18 田浦町は軟式野球場を造るべく、湘南電鉄追浜駅裏に2,500坪の土地を買収、山林・田畑を整地してグラウンドを設けることにする。(『横賀』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>4. 3 横須賀海軍航空隊（追浜）では、一般市民に開放する恒例の汐干狩を19日（日）に開催する。（『横賀』）</p> <p>4.15 海軍航空廠建設の敷地買収問題は紛糾したが、宅地3,284坪、畑2,673坪、田7,104坪、山林105坪、池759坪の合計1万3,925坪で、価格10万400余円（家30戸の移転料を含む）で妥結。海軍が10万円を支出したため、町の負担は少額で済む。（『横賀』）</p> <p>4.19 全田浦が慶応倶楽部を招いて、天神グラウンドで軟式野球試合を行う。（『横賀』）</p> <p>4. 一 榎戸・正観寺、山門を建立する。（『正観寺誌』）</p> <p>4. 一 浦郷尋常小学校に浦郷青年訓練所を設置する。（『浦小沿革』）</p> <p>5. 9 学習院生徒等500名、追浜の海軍航空隊で空中戦闘を見学する。（『横賀』）</p> <p>9. 一 築島跡（現・追浜町3丁目）に「雷神社古址」碑を建立する。望月勤作の捐資による。（碑文銘）</p> <p>9.26 夜来の豪雨で、床上浸水等の被害あり。（『逗子年表』）</p> <p>11. 一 有限会社湘南堂（現・追浜町3丁目、佐藤順次）が創業する。（『商工36』）</p> <p>この年、①横須賀海軍航空隊本部庁舎が竣工する。設計は建築家三輪幸左衛門。（「三輪幸左衛門履歴」）②榎戸・吉倉間渡船営業の吉倉運輸（株）が、廃業する。（『市史50』）③望月本店（望月貞吉、現・追浜本町）が創業する。（『此処』）④亀井自転車店（現・追浜町2丁目、現亀井輪業）が創業する。⑤勝野金物店（追浜町3丁目）が開業する（聞取調査）</p>
<p>昭和7 (1932)</p>	<p>3. 一 本浦巡查駐在所を追浜巡查派出所（浦郷1231番地）に改称する。（『田浦警察署史』）</p> <p>4. 1 「海軍航空廠令」の発布により、深浦に海軍航空廠が開設される。7月7日開廠式を挙げる。（『新市史』別軍）</p> <p>4. 1 追浜郵便局（現・追浜町3丁目・田川貞二）が3等局として開設される。（『商工案内』11）</p> <p>6. 一 日向・八王子社が再建される。（棟札銘）</p> <p>7.15 浦郷尋常小学校に少年赤十字団（尋常5・6年生）が設立される。（『浦小沿革』）</p>

年 号	出 来 事
	<p>10.9 海軍共済組合横須賀購買所浦郷支所が深浦に開所する。(『工廠沿革』続)</p> <p>10.20 横須賀海軍共済組合病院浦郷分院が新築(51坪)され、診療を開始する。現在の横浜南共済病院の前身。(『共済病80』)</p> <p>11.14 台風の暴風雨により被害あり。(『県災害誌』)</p> <p>12.5 田浦町会で航空廠道路の梅田トンネル迂回案を採択する。(『横買』)</p> <p>12.15 夏島断崖切り崩し工事中、崩壊のため土工3人が死亡する。(『横買』)</p> <p>この年、①浦郷少年赤十字団が結成される。(浦小沿革) ②浦郷地区の戸数2,308、人口9,585人。(『横須賀市史稿』)</p>
<p>昭和8 (1933)</p>	<p>1. - 田浦青物市場株式会社(浦郷1613、岡田八郎)が設立される。(『商工案内』11)</p> <p>1. - 夫婦橋(追浜本町1丁目)が竣工する。(親柱銘)</p> <p>1.28 海軍航空隊で講演、展覧、見学の会が開催され、大井市長参列する。(『市事務報告』)</p> <p>2.6 田浦町合併問題で横須賀市側が田浦町の条件を一部修正のうえ承諾し合併が決定する。(『横買』)</p> <p>4.1 湘南電鉄(株)、浦賀・品川間の直通運転が開始される。(『京急80』)</p> <p>4.1 田浦町が横須賀市に合併し、浦郷は横須賀市浦郷となる。横須賀市の人口15万825人。(『県告示』)</p> <p>4.1 浦郷尋常小学校は横須賀市立浦郷尋常小学校となり、尋常科23学級、在籍児童数1,407人となる。(『浦小沿革』)</p> <p>4.1 浦郷火葬場(現・追浜東町)、町営から横須賀市に移管される。(『横買』)</p> <p>5.9 官修墓地(西南戦争戦病死者墓地)が破壊・掘り返される。(『横買』)</p> <p>5.10 鳥海病院、日向より浦郷1241番地(現・追浜町3丁目7番地)に新築移転し、開院する。建坪136坪という。(仮題『自伝青山松次』)</p> <p>6. - 向坂トンネル(追浜南町1丁目・鷹取1丁目間)が竣工する。(『市史50』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>8. 9 浦郷小学校で防空演習における小学校児童火災避難救護演習が実施される。(『市事務報告』)</p> <p>8. - 榎戸トンネル (浦郷町2丁目・浦郷町3丁目間) が竣工する。(『市史50』)</p> <p>9. 6 「京浜・湘南沿線案内」が発行され、両電鉄沿線の観光案内を図絵する。追浜駅では追浜遊園地、鷹取山、追浜飛行場、憲法遺蹟が載る。</p> <p>9. - 合資会社三升屋商店 (浦郷5295、相原猪三郎) が設立される。(『商工案内』11)</p> <p>10.18 深浦の官修墓地 (現・浦郷町3丁目) に西南戦争戦病者慰霊の「義勇千秋義烈萬古」碑を建立する。撰文北村包直。相陽時事新聞老兵会建立。(『横買』)</p> <p>10. - 日向トンネル (浦郷町1丁目・船越町7丁目間) が竣工する。(『市史50』)</p> <p>11.10 (株)湘南丸金商会 (田川誠治、浦郷町) を設立する (湘南商事の前身)。(『横経済史』)</p> <p>この年、①海軍航空廠庁舎が清水組によって建設完成する (建築面積約1571平方尺)。②浦郷字山ノ脇地先の海面1,178坪を埋め立てる。(『市史50』) ③浦郷地区の戸数2,523、人口男6,333、女5,425、計1万1,758人。④浦郷小学校の在籍児童数1,407人。(『浦小沿革』)</p>
<p>昭和9 (1934)</p>	<p>1.27 浦郷塵芥焼却所 (浦郷2226) を6,700円で改築する。のち昭和52年3月で廃止。(『市史50』)</p> <p>3. 3 浦郷尋常小学校で4年生用の『郷土地理読本』を刊行。「天神山」の解説で、三浦氏と落雁寺氏の合戦を史実として記す。</p> <p>3.31 浦郷尋常小学校付設の青年訓練所を廃止する。(『浦小沿革』)</p> <p>4. - 海軍航空廠見習職工教習所 (深浦) が設立される。(『商工案内』11)</p> <p>5.17 浦郷尋常小学校の講堂を新築、工費16,800余円という。(『浦小沿革』)</p> <p>7. 5 横須賀・龍本寺に横須賀海軍航空隊の「航空殉職将士追悼之碑」が建立される。相陽時事新聞社建立。(碑文銘)</p> <p>9.12 市営墓地計画で浦郷字平六ヶ入2,700坪が選定され、同12月2日測量が終了する。のち、計画変更となる。(『新市史』資近現Ⅲ)</p>

年 号	出 来 事
	<p>9.21 室戸台風による、被害あり。(『市史50』)</p> <p>この年、①浦郷字山ノ脇地先の公有水面3,350坪、鉾切地先公有水面1,598坪及び榎戸地先公有水面481坪を各埋め立てる。(『市史50』) ②この頃、追浜駅裏山にイチゴ園が完成、営業を開始する。(聞取調査) ③浦郷地区の戸数2,990、人口男7,497、女6,486、計1万3,983人。(『市統計書』)</p>
<p>昭和10 (1935)</p>	<p>1. - 合資会社蒲谷履物店(本浦)が創業する(靴のしげるの前身)。(『横経済史』)</p> <p>3. 5 横須賀婦人会浦郷支部、浦郷尋常小学校で発会式を挙げる。(『横買』)</p> <p>3.20 日向巡查駐在所を浦郷4349番地(現浦郷町2丁目66番地)に新築移転、榎戸巡查駐在所とする。(『田浦警察署史』)</p> <p>4. 1 瑞穂保育園(浦郷2582・並木通り沿い)が設立される。(『県社会』)</p> <p>7. 6 横須賀一帯の豪雨で、浸水家屋が続出する。(『横買』)</p> <p>9.25 横須賀海軍航空隊より横須賀鎮守府に追浜神社建立に付き、土地(304平方㍍)使用の許可願が提出される。(『横空第168号出願書写』)</p> <p>10.12 横須賀海軍航空隊で追浜神社の鎮座祭を行う。(『市公報』)</p> <p>11.18 横須賀海軍航空隊構内に追浜神社創設のための土地使用の件、認可される。(官房第4870号認可書写)</p> <p>この年、①浦郷字天神地先の公有水面1,875坪を埋め立てる。(『市史50』) ②浦郷地区の戸数3,469、人口男8,644、女7,467、計1万6,111人という。(『市統計書』)</p>
<p>昭和11 (1936)</p>	<p>4. 1 浦郷尋常小学校に高等科を付設、浦郷尋常高等小学校と改称、校舎(6教室)を増築する。在籍児童数2,051人という。(『浦小沿革』)</p> <p>6. 1 浦郷に設けられている行政区のうち本浦区を追浜区と改称する。(『市史50』)</p> <p>10.31 深浦・海軍航空廠の爆発火災事故で、工事用火薬取扱いの10名が死傷する。(『横買』)</p> <p>10.11 浦郷郵便局(深浦)が開設される。(聞取調査)</p>

年 号	出 来 事
	この年、浦郷字天神地先の公有水面9,542坪が埋め立てられる。(『市史50』)
昭和12 (1937)	<p>4. ー 浦郷尋常高等小学校に海軍より250馬力艦上戦闘機が寄贈され、同6月8日校庭内の格納庫で命名式があり、天神号と名付けられた。(『浦小沿革』)</p> <p>5. ー 本浦・正光寺の本堂が再建され、落慶入仏の法要を挙げる。(『正観寺誌』)</p> <p>7. 3 相模運輸造船部(浦郷)で湘南丸進水式を挙げる、鈴木齊次郎市長列席する。(『市事務報告』)</p> <p>9. ー 向坂土地区画整理事業が組合施行で行われる(14年3月迄)。現在の鷹取町1丁目の一部で、面積1万3,712平方^尺。横須賀市における土地区画整理事業の第1号である。(『市史80』下)</p> <p>11. 2 「海軍航空発祥之地」の碑が、横須賀海軍航空隊によって最初の格納庫跡地に建てられる。碑文の揮毫は金子養三少将である。現在、貝山緑地に移される。(碑文銘)</p> <p>12.26 横須賀二業組合田浦支部加盟の浦郷地区の料理店は、叶家(榎戸)、亀島屋(榎戸)、魚忠(深浦)、追浜園(本浦)、富士ノ荘(本浦)の5店である。(『横須賀二業組合員名簿』)</p> <p>この年、①本浦・自得寺本堂が建立される。(『新市史』別文) ②浦郷小学校が市内小学校少年野球大会(三笠球場・日の出町)で優勝する。(『浦郷小記念誌』)</p>
昭和13 (1938)	<p>5. ー 雷神社の石段を1,100円で改修する。</p> <p>6.29 連日の豪雨により家屋倒壊等の被害あり。(『横賀』)</p> <p>7. ー 森重歯科医院、日向から本浦(追浜東町)に移転して開業する。(『ふるさと浦郷』)</p> <p>8.11 天皇陛下、深浦の海軍航空廠に行幸、作業状況を天覧する。この時、特23号国道を改修する。(『昭和天皇実録』『横須賀市事務報告』)</p> <p>10. 1 浦郷字本浦(現在の追浜本町・追浜南町・追浜東町・追浜町・鷹取町の地域)の戸数3,051という。</p> <p>10. 7 浦郷・本浦会館で県商工経営相談所による講演会が開かれる。(『市公報』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>11. ー 天皇陛下行幸を記念して、航空廠庁舎敷地に「行幸碑」を建立する。(銅板刻銘碑文)</p>
<p>昭和14 (1939)</p>	<p>1.21 浦郷小学校講堂で支那事変戦死者の合同市葬が行われる。(『横須賀市事務報告』『市史50』)</p> <p>3.31 飛行予科練習生(予科練)を横須賀航空隊から霞ヶ浦航空隊(茨城県阿見町)に移す。(『新市史』別軍)</p> <p>4. 1 市立浦郷青年学校を浦郷尋常高等小学校に併置する。小学校の在籍児童数2,719人(37学級)という。(『浦小沿革』)</p> <p>4. 5 深浦・海軍航空廠は海軍航空技術廠(略称「空技廠」と改称される。(『官報』)</p> <p>6.12 横須賀海軍共済組合病院浦郷分院を閉鎖し、同病院追浜分院を新たに六浦(六浦町506番地)に新設開院する。(『共済病80』)</p> <p>6. ー 信濃屋製パンが浦郷小学校下で創業(北原治夫、北原製パン所の前身、現在追浜本町)する。(聞取調査)</p> <p>7.31 追浜映画劇場の建設が始まる。延坪数119坪で、定員446名。請負は花崎組、工費は3万円で、9月中の落成という。(『横買』)</p> <p>8. ー 平六トンネル(追浜町2丁目・追浜東町2丁目間)が竣工する。(『追浜二丁目平和会のあゆみ』)</p> <p>8.20 夜来の集中豪雨により家屋浸水被害あり。(『横買』)</p> <p>この年、瑞穂保育園で救世軍追浜分隊の講演会が開かれる。(『救世軍日誌』)</p>
<p>昭和15 (1940)</p>	<p>6. ー 浦郷尋常高等小学校の児童増加により、新たに分校校舎を現・鷹取町に建設着手する。この年、在籍児童数2,788人となり、最多児童数となる。(『浦小沿革』)</p> <p>12.15 伊香輪一虎著『追浜とその付近』(孔版)が発行される。</p> <p>12. ー 「横須賀市町内会整備要綱」が定められ、北郷聯合町内会のうち現追浜地区の町内会は、追浜第一、追浜第二、追浜第四、追浜第五、追浜第六、追浜第七、追浜第八、本追浜、深浦、榎戸、日向の11町内会となる。(『市史50』)</p> <p>12. ー この月、浦郷尋常高等小学校分校(現・鷹取町2-95)が完成。第2期の増築等により敷地3,341坪、校舎771坪、教室18、経費18万円であった。(『市教育史』)</p>

年 号	出 来 事
	この年、①紀元二千六百年の祭典が各地で挙行される。②深浦・航空技術廠浦郷物資配給所が開設される。『新市史』資近現Ⅲ ③浦郷地区の人口2万7,645人という。(国勢調査)
<p>昭和16 (1941)</p>	<p>3. 1 「国民学校令」が公布され、4月より横須賀市浦郷国民学校となる。 (『浦小沿革』)</p> <p>4. 1 追浜国民学校が開校される。浦郷小から964名、船越小から159名、児童合計1,123名で発足。(『追浜小学校記念誌』)</p> <p>4. 1 海軍航空技術廠支廠が六浦、釜利谷町にまたがって設置される。 (『新市史』別軍)</p> <p>6. 9 皇太后が葉山御用邸から浦郷の海軍航空隊・海軍航空技術廠をご視察される。(『市公報』)</p> <p>4.21 横須賀海軍共済組合病院追浜分院を追浜海軍共済組合病院として分離独立する。(『共済病80』) なお、昭和20年10月に財団法人共済協会追浜共済病院となり、同40年4月に横浜南共済病院と改称して現在に至る。</p> <p>7.20 浦郷海洋少年団が設立される。(『浦小沿革』)</p> <p>9.21 浦郷国民学校、県下児童相撲大会に山崎国民学校とともに横須賀市代表として出場する。(『浦郷小学校記念誌』『市事務報告』)</p> <p>11. 1 京浜電鉄(株)、湘南電鉄(株)、湘南半島自動車(株)が合成合併、京浜電気鉄道(株)となる。(『京急80』)</p> <p>12. 8 米英両国に宣戦布告する。</p> <p>この年、①航空技術廠水上機試験水槽2基築造のため独園寺墓地が強制撤去され、このため墓地を南側(現在の山上墓地)に移転新設する。(『地区覚書』) ②この頃から鉾切地区の建物強制疎開が始まるという。(聞取調査)</p>
<p>昭和17 (1942)</p>	<p>3. ー 追浜東郵便局(追浜町)が開設されるが、昭和24年頃に追浜東町(現地)に移転、本浦郵便局と改称して営業する。(聞取調査)</p> <p>3. ー 市内各小・中学校の銅像、鉄柵などが供出される。(『横経済史』)</p> <p>4. ー 銭湯・郷の湯(岩崎要松、追浜町2丁目)が営業を始める。(『追浜本町一部会 名鑑』)</p> <p>5. 1 京浜電気鉄道(株)が東京横浜電鉄(株)と合併、東京急行電鉄(株)となる。(『京急80』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>5. ー 横須賀憲兵分隊の田浦憲兵分遣隊を浦郷（現・白鳩幼稚園地）に設置する。同 20 年 3 月には憲兵分隊となる。（『新市史』別軍）</p> <p>11. 1 横須賀海軍航空隊構内（夏島町）に追浜海軍航空隊が開隊され、整備術教育を担当する（昭和 19 年 12 月 20 日解隊）。（『新市史』別軍事）</p> <p>11.10 田浦・比与宇火薬庫が爆発。梅田・日向地区で家屋・人員に被害がでる。（『留守中日記』）</p> <p>11.19 榎戸・正観寺半鐘（宝永 3 年鑄造）が金属回収令により供出される。（『正観寺誌』）</p>
<p>昭和 18 (1943)</p>	<p>2.10 鉦切女子青年団約 40 名、モンペ・タスキで戦勝祈願の夜間行軍を挙行する。（『神新』）</p> <p>2.21 榎戸・日の出館で出征家族慰安のため、子供演芸会が開催される。（『留守中日記』）</p> <p>2. ー 金属回収令により、独園寺半鐘が供出される。（後年、熔解されず返戻される。）（『地区覚書』）</p> <p>3. 6 浦郷・船越両青年学校を統合し、船越商工青年学校となる。（『市教育史』）</p> <p>3. ー 横須賀市及び大政翼賛会横須賀支部から市民に「隣組員の信条（こころがけ）」が配布される。（原本写）</p> <p>5. ー 日向・八王子社は軍事上の要請により、日向トンネル付近の山腹に遷宮する。（『回想』）</p> <p>9.10 浦郷に市立追浜戦時特設託児所（良心寺内）を開設する。収容人員 170 人。（『市史 50』）</p> <p>12. ー 榎戸湾周辺の民家が建物強制疎開で取り壊され、この時江戸時代から続いた料理屋兼旅館の叶屋も解体撤去される。（『横浜市歴史博物館紀要』第 1 号）</p> <p>この年、本浦・良心寺梵鐘が「金属回収令」によって供出される。（『良心寺しおり』）</p>
<p>昭和 19 (1944)</p>	<p>2. ー この頃、日向・榎戸地区で引き続き民家の強制疎開が行われる。（聞取調査）</p> <p>3. 1 市域の国民学校で昼食の給食が実施される。（『横経済史』）</p>

年 号	出 来 事
	<p>7.15 海軍設営隊による緊急戦備施設（防空施設）として「野島隧道」と「夏島隧道」の急速設営が行われる。計画によると夏島には「零戦」40機分の大型飛行機隧道の建設であった。（『新市史』別軍）</p> <p>8.16 学童疎開のため浦郷国民学校の児童345名が、高座郡海老名町へ出発する。（『市教育史』）</p> <p>8.20 学童疎開のため追浜国民学校の児童232名が、高座郡小出村へ出発する。（『市教育史』）</p> <p>8. — 浦郷小学校校舎が空技廠に動員された仙台・宮城高女生徒たちや海軍高射砲隊々員などの宿舎として終戦まで使用される。（『浦小沿革』）</p> <p>11.10 相模運輸倉庫(株)より分離独立して、相模造船鉄工(株)が設立される（浦郷町1丁目）。（『工業30』）</p> <p>12. — 日向山防空砲台（浦郷町2丁目）が設置される。装備は7.5cm連装高角砲2基、25mm連装機銃2基である。この砲台地は「共楽園」という園地であったが、砲台設置のため無残な姿となった。（『新市史』別軍）</p> <p>この年、鷹取山防空砲台（湘南鷹取1丁目）が設置される。装備は12cm高角砲4基、25mm機銃3基、13mm連装機銃2基、96式150cm探照灯1基等。（『新市史』別軍）</p>
<p>昭和20 (1945)</p>	<p>1.30 喜劇役者古川緑波、追浜の海軍航空隊で格納庫内の急造舞台で慰問演芸を披露する。（『古川緑波昭和日記』）</p> <p>2.25 海軍航空技術廠本廠（深浦）を第一海軍技術廠、支廠（釜利谷）を第一海軍技術廠支廠と改称し、別に電波、音響関係の実験研究機関として、第二海軍技術廠が設けられた。この頃、両廠で職員1,700人、工員3万1,700人という。（『海軍空技廠』）</p> <p>3. 1 航空技術廠内（深浦）に田浦海軍航空隊が開隊。雷爆兵器整備教育担当の練習航空隊であった。（『新市史』別軍）</p> <p>3.11 鷹取山で憲兵による女学生凌辱事件が起こる。（『横須賀警察署史』）</p> <p>5. 5 横浜興信銀行追浜支店が営業を開始（旧都南銀行追浜支店を継承、駅前銀座通り）、同32年1月21日に現在地（追浜本町1丁目）に店舗を移転する。（『工業30』）</p> <p>7. 7 ロケット戦闘機「秋水」、第1回試験飛行を追浜飛行場で行うが、事故で失敗する。（『新市史』別軍）</p>

年 号	出 来 事
	<p>7.10 米空母「バターン」の第47戦闘機隊によって、追浜飛行場が爆撃を受ける。(『新市史』別軍事)</p> <p>7.31 横須賀海軍警備隊戦闘詳報第6号によれば、この時点で鷹取山高角砲台、追浜山機銃砲台、夏島機銃砲台、空技廠機銃砲台が設置されていた。(『新市史』別軍)</p> <p>8.15 戦争終結の詔書が放送される。</p> <p>8.30 連合軍(アメリカ軍)が、横須賀海軍航空隊追浜飛行場に進駐する。同時に横須賀海兵団(稲岡町)にも進駐。(『新市史』別軍)</p> <p>10. 2 追浜国民学校児童、同4日浦郷国民学校児童、集団疎開から帰る。(『市教育史』)</p> <p>10.22 追浜海軍共済組合病院が財団法人共済協会追浜共済病院と改称し、一般市民の診療を開始。(『共済病80』)</p> <p>11.11 追浜連合町内会は地元進駐軍慰安のため、慰安会を催すことになり、市当局にその斡旋を依頼する。(『神新』)</p> <p>この年、終戦直前まで追浜駅沿線(両側)の家屋が強制疎開で取り払われる。(聞取調査)</p>
<p>昭和21 (1946)</p>	<p>1. - (株)ボタンヤが創業する(川端延幸、追浜町)。(『工業30』)</p> <p>2. - 各小学校の御真影を県庁に返還する。(『市史80』別)</p> <p>3. 1 湘南国際病院が元海軍航空技術廠の技術将校宿舎(現在地)に開院する(70床)。(『湘南病50』)</p> <p>4. 1 浦郷・追浜国民学校を各小学校と改称する。同日市立追浜保育園が開設され、同時に戦時特設託児所(良心寺内)を廃止する。(『市史50』)</p> <p>4. - 伊奈典雄、「横須賀新聞」(発行隔日・週間)を発行。本社を天神橋前に置く。昭和28年1月より日刊とする。(『夕刊横須賀』)</p> <p>4. - 浦郷小学校で海軍航空隊寄贈の艦上戦闘機(天神号)を破棄、同格納庫を取り壊す。(『浦小沿革』)</p> <p>6. - 各学校の御真影奉安殿の撤去が指令される。(『教育年表』昭)</p> <p>11.18 日協低温(株)が設立される(川口満、浦郷町5丁目)。(『工業30』)</p>
<p>昭和22 (1947)</p>	<p>3. 1 協同工作(株)が設立される(浦郷町)。(『横経済史』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>3.27 光工業(株) (浦郷町 3 丁目、井上淳一) が設立される。(『横経済史』)</p> <p>3.31 昭和 1 5 年に定められた町内会は、訓令によって廃止される。(『市公報』)</p> <p>4. 1 新制中学校が発足し、同年 5 月浦郷中学校が浦郷小学校内に設置・開校される。(『浦小沿革』)</p> <p>9. - 各校の在籍生徒数は、浦郷小学校 9 7 5、追浜小学校 1, 1 8 1、浦郷中学校 3 5 7 とある。(『市勢要覧』)</p> <p>9. - 共立農機(株)横須賀工場が設立される (田中修吾、追浜本町)。(『横経済史』)</p> <p>10. - 横須賀市消防団条例が施行され、浦郷に消防団 (第 1 0 分団) が置かれる。(『市公報』)</p> <p>12.12 浦郷・船越両中学校を廃止し、田浦中学校を旧防備隊跡 (船越町) に開校する。(『市教育史』)</p> <p>12.26 日本和紡興業(株)が設立される (脊山藤吉、浦郷町 5 丁目)。(『横経済史』)</p> <p>この年、①旧天神海軍用地 (追浜本町 2 丁目) に戦後初の本格的な市営住宅の建設が始まる。昭和 2 2 年度から同 3 3 年度までの 1 2 年間に、敷地総面積約 2 2, 8 9 0 坪、住宅 2 9 9 戸が建設される。(『市史 5 0』) ②浦郷地区の人口 1 万 8, 7 2 0 人という。(臨時国勢調査)</p>
<p>昭和 2 3 (1 9 4 8)</p>	<p>1. 1 この時まで追浜地区に進出した転換企業は 2 0 社となる。(『横経済史』)</p> <p>2. 5 旧鉾切地区住民が追浜復興協同組合を結成、軍用施設の返還に際して、大蔵省国有財産部に地上権の返還と軍用建物の払下げを要望する。(『神新』)</p> <p>3.17 追浜繊維(株)が設立される (広田講三、浦郷町)。(『横経済史』)</p> <p>3. - 市立追浜保育園、浦郷小学校内に移転。2 教室を使用する。(『浦小沿革』)</p> <p>4. - 私立白鳩幼稚園 (追浜本町 2 丁目) が開園する。(聞取調査)</p> <p>4. - 浦郷小学校在籍児童数 1, 3 2 7 人 (学級数 2 6)、追浜小学校 9 5 6 人 (同 1 8) という。(『新市史』 資近現Ⅲ)</p> <p>5. 1 横須賀市役所浦郷支所が新たに設置 (旧田浦憲兵分遣隊跡、追浜本町) される。(『市史 5 0』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>5. ー 追浜工業会が結成され、横須賀工業クラブに加入し、追浜支部となる。(『横経済史』)</p> <p>6. 1 京浜急行電鉄(株)が東京急行電鉄(株)から分離して独立する。(『京急80』)</p> <p>6.13 鉦切遺跡(古墳時代)の発掘調査が開始される。(『新市史』別考)</p> <p>7. ー 追浜浜勇商店が設立される(林信良、追浜町)。(『此処』)</p> <p>8.15 米陸軍特需会社の富士自動車(株)(社長山本惣治)が横須賀海軍航空隊跡地に進出、米軍車両の修理・再生を主要業務として米軍と契約。昭和33年(1958)までに再生した米軍車両は、のべ22万9,100台に及ぶ。(『占領下の横須賀』『横経済史』)</p> <p>8.23 良心寺本堂(追浜南町)が焼失する。(『良心寺しおり』)</p> <p>11. 8 追浜駅前病院医師で公安委員が朝比奈峠辺で殺害される事件が起こる。(『横須賀警察署史』)</p> <p>11. ー 浦郷小学校御真影奉安殿を取り壊し、その跡に学校給食調理所を新築する。(『浦小沿革』)</p>
<p>昭和24 (1949)</p>	<p>4. 1 追浜運動公園(夏島町)が開設される。面積8万7,682平方メートル。(『市公園』)</p> <p>6. 1 友和鑄造(株)が設立される(長谷川説雄、浦郷町1丁目)。(『横経済史』)</p> <p>7.19 石渡直次(榎戸)、第20代横須賀市長に就任する。(『市史50』)</p> <p>8.31 キティ台風の猛烈な風雨で甚大な被害あり。全県下に災害救助法が発令。(『神新』)</p> <p>9. ー 本浦会館(追浜本町)脇の火の見櫓が消防団によって建立される。(聞取調査)</p> <p>10. ー 米軍より旧海軍航空技術廠10万坪(総数約60万坪)が、日本政府に返還される。(『横経済史』)</p> <p>11.27 追浜総合運動場の硬式野球場開業式が、東急対太陽の公式試合を招いて盛大に挙行される。建設工事は昭和23年5月着工、同24年11月竣工。収容人員3万人、総面積1万300坪、工事費は約1,450万円。さらに軟式野球場、庭球場など建設工事中。(『市政時報』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>12.26 旧横須賀海軍航空隊追浜飛行場の帰属に関連して、横須賀・横浜両市境界問題の折衝が行われる。(『神新』)</p> <p>この年、追浜駅前商店会が結成される(追浜本町)。(『横経済史』)</p>
<p>昭和25 (1950)</p>	<p>1.24 追浜小学校、火災により496坪(14教室)を焼失する。(『追浜小50』『神新』)</p> <p>3.23 夏島貝塚(縄文時代早期)の第1回発掘調査(4月4日まで)が行われる。(『夏島貝塚』)</p> <p>4. 1 浦郷小学校の在籍児童数1,631人、追浜小学校在籍児童数1,054人という。(『教育統計』)</p> <p>4.25 ステルマン貿易倉庫(株)を設立(ステルマン、浦郷町5丁目、朝日貿易倉庫(株)の前身)。(『横経済史』)</p> <p>5. - (株)鈴木商店(鈴木善吉、浦郷町3丁目)が設立される。(『此处』)</p> <p>5. - 浦郷町2丁目地先水面(榎戸湾)1,603平方メートルの埋立地を編入する。(『市政時報』)</p> <p>6.28 「旧軍港市転換法」が公布・施行され、旧軍港市の平和産業港湾都市への転換が図られるようになる。主な目的は国有財産の払い下げに伴う特別待遇であった。(『官報』)</p> <p>7.11 市立追浜保育園を追浜本町(現在地)に新築移転し、落成式を行う。22日に開園する。(『市政時報』)</p> <p>8.10 本浦巡査駐在所を追浜町3丁目2番地(現在地)に新築移転、追浜駅前巡査派出所と改称する。(『田浦警察署史』)</p> <p>9.18 横須賀食糧商事(株)が設立される。同44年10月に太陽商事(株)と社名変更(浦郷町3丁目)。</p> <p>9.29 浦郷食糧販売企業組合(追浜本町1丁目、田川誠治)が設立される。(『商工名鑑』29)</p> <p>9.29 追浜食糧販売企業組合(追浜町2丁目、森辰衛)が設立される。(『商工名鑑』29)</p> <p>11.11 京浜発条(株)(片平與惣次、浦郷町5丁目)が設立される。(『此处』)</p> <p>11.30 「昭和25年国勢調査概数」では、浦郷地区の世帯数5,219、人口2万2,279とある。(『市報』)</p> <p>11. - 第1回米海軍基地杯争奪県下都市対抗軟式野球大会を追浜球場にて開催する。(『市体育史』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>この年、市営日向アパート2棟48戸（浦郷町1丁目）が建設される。これは横須賀市の公営アパート（鉄筋コンクリート造）の始めである。以後、同地で同27年までの3年間で4棟96戸が建設される。（『市史50』）</p>
<p>昭和26 (1951)</p>	<p>2.11 「明治憲法起草遺跡地記念碑」復興除幕式（大正15年建立したものが荒廃したため復興）を挙げる。（『神新』）</p> <p>3. 1 武山渉外労務管理事務所追浜分室（浦郷町）の事務が開始される。（『横経済史』）</p> <p>3.10 第1回京浜急行社長杯争奪女子野球大会が追浜球場で開催される。（『神新』）</p> <p>4. 1 浦郷地区の町名町界地番整理を実施。その結果、横須賀市浦郷は鷹取町、追浜本町、追浜町、追浜東町、追浜南町、夏島町、浦郷町の新町名に変更する。（『市報』）</p> <p>5.21 追浜進駐軍労働組合が結成される。組合員500人。（『民主運動史』）</p> <p>5. - 少年消防クラブが結成され、追浜・浦郷両小学校にもクラブ員を擁し、課外教育を実施する。（『市史50』）</p> <p>6.11 天神橋巡査派出所（追浜本町2-1）を設置する。のち、夏島巡査派出所と改称、さらに平成6年夏島町交番となる。（『田浦警察署史』）</p> <p>9.11 横須賀市議会、追浜地区再接収反対の陳情を議決する。（『民主運動史』）</p> <p>9. - この月、富士自動車(株)の従業員は6,033人という。旧追浜飛行場跡地は米軍追浜兵器廠で、軍直備が3,000人おり、富士自動車は契約工場として解体から組立てまでの作業を請負い、昨年再生車輛は4万6千台という。</p> <p>11. - 富士珪瑯鉄工(株)横須賀工場が設立される（市川義雄、浦郷町5丁目）。（『此処』）</p> <p>この年、協同組合追浜商盛会を設立（追浜町）及び追浜本町共栄会を結成。同年、帝国プロパン瓦斯(株)、追浜営業所を開設（横須賀において初のプロパン瓦斯を販売）。（『横経済史』）</p>
<p>昭和27 (1952)</p>	<p>1. 1 (株)片山工業所追浜工場が設立される（大木隆二郎、浦郷町5丁目）。（『横経済史』）</p>

年 号	出 来 事
	<p>6. ー 知事、追浜地区埋立地完成（112万8千平方m^2＝34万1千坪）承認を告示する。（『県告示』）</p> <p>7.26 日米行政協定により旧海軍航空技術廠跡に米陸軍第5兵器廠が設置され、既に進出していた転換工場20社のうち17社が再接収という。（『新市史』資近現Ⅲ、『横経済史』）</p> <p>8.15 全駐労横須賀追浜分会、フォマン排斥問題でストを開始する。（『民主運動史』）</p> <p>8.21 横須賀三浦信用金庫追浜支店（追浜町）が開設される。のち、三浦藤沢信用金庫（追浜本町）と改名、さらにはかながわ信用金庫となる。（『横経済史』）</p> <p>8. ー 「大東亜戦争戦死者慰霊塔」が、鉾切・正禅寺境内に建立される。（刻銘碑文）</p> <p>10. 1 神奈川県追浜涉外労務管理事務所（浦郷町）が設置される。（『横経済史』）</p> <p>10. ー 天神橋（鷹取川）が竣工する。（親柱銘）</p> <p>10. ー 榑青木商店追浜工場が設立される（吉田金雄、夏島町）。（『此处』）</p> <p>12. 4 道路法の全面改正により国道路線は全廃され、国道31号は新しく一級国道16号線となる。（『市史50』）</p>
<p>昭和28 (1953)</p>	<p>1.12 鈴鹿建設榑が創業する（山田文雄、夏島町）。</p> <p>4. 5 室ノ木に保安隊の宿舍約100戸が建設省によって建てられる。（『神新』）</p> <p>4.10 榑多田工業が設立される（追浜南町1丁目）。</p> <p>5.21 横須賀信用金庫追浜支店（追浜本町）が開設される（平成1年7月に湘南信用金庫と改称）。（『横経済史』）</p> <p>5.21 米軍より追浜兵器工場跡の3,031平方m^2が返還される。（『横須賀市と基地』）</p> <p>6. ー 相模プロパン瓦斯商会在が設立される（水澤誠三郎、追浜町）。（『横経済史』）</p> <p>8.22 追浜地区社会福祉協議会が開立される。（『地区社会福祉協議会の概要』）</p> <p>10. 9 盗難にあった明治憲法起草遺跡記念碑の銅版発見により、原位置に納め再度の復元披露が行われる。（『神新』）</p>

年 号	出 来 事
	<p>10. - 追浜渉外労務管理事務所が閉鎖される。(『神新』)</p> <p>12.17 第一消防署追浜出張所(夏島町)の開所式が行われる。(『市報』)</p> <p>12.19 「市営母子住宅条例」により、追浜(追浜本町)に母子住宅が設置される。(『市史50』)</p>
<p>昭和29 (1954)</p>	<p>2.19 追浜ヘリコプター地区、再接収される。(『提供施設』)</p> <p>5.24 追浜渉外労務管理事務所が再置(追浜本町2丁目)される。(『県公報』)</p> <p>6.30 私立追浜幼稚園(鷹取1丁目)が開園する。(聞取調査)</p> <p>6. - 相模造船(株)が本店を三春町から浦郷町2丁目に移転する。(『相模造50』)</p> <p>7.20 県立横須賀公共職業補導所(浦郷町4丁目)が設置される。(『県公報』)</p> <p>7.26 浦郷町5丁目地先に第2港湾局の埋立294平方メートルが竣工し認可となる。(『市報』)</p> <p>7. - 特需会社日本飛行機(株)が、追浜の米陸軍第5兵器廠内に進出する。(『横経済史』)</p> <p>10. 1 高坂工務店が創業する(高坂英司、追浜本町)。昭和53年神奈川県ナショナル住宅(株)となる。(『横経済史』)</p> <p>11.22 浦郷小学校創立80周年式典を行い、『沿革誌』(孔版)を発刊する。在籍児童1,005人、19学級。(『創立八拾周年記念 沿革誌』)</p> <p>12. 1 浦郷支所管内の世帯数6,066、人口2万6,248人という。(『市統計書』)</p> <p>この年、(株)東横製作所(中沢誠一、追浜本町)が創立し、浦郷町5丁目に工場を設置。(『此処』)</p>
<p>昭和30 (1955)</p>	<p>1.20 武山渉外労務管理事務所を追浜渉外労務管理事務所に統合する。(『県公報』)</p> <p>2.20 法福寺本堂(追浜本町)が近隣からの出火で類焼する。(『法福寺誌』)</p> <p>3.24 独園寺境内(浦郷町3丁目)に「大東亜戦争戦没者慰霊塔」が建立される。(刻銘碑文)</p> <p>4. 1 湘南国際病院を湘南福祉会湘南病院と改称する。(『湘南病50』)</p> <p>4.19 全駐労追浜支部300人が144時間ストを実施する。(『民主運動史』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>5.15 浦郷町3丁目地先を横須賀市が816平方㍍を埋立、竣工認可される。</p> <p>5.18 特需会社富士自動車(株)が、従業員3,880人の解雇を発表。3,569人が解雇される。(『民主運動史』)</p> <p>5.－ 第1回小・中・高校第二部会児童生徒体育大会を追浜小学校にて開催する。(『市体育史』)</p> <p>6.10 富士自動車(株)従業員、解雇反対の24時間ストライキおよびデモを行う。(『民主運動史』)</p> <p>6.18 夏島貝塚の第2回発掘調査が行われる。6月23日まで継続。(『新市史』別考)</p> <p>6.21 富士自動車(株)従業員、48時間ストライキを実施する。(『民主運動史』)</p> <p>6.－ 雷神社社殿(追浜本町)が焼失する。(『神新』)</p> <p>8.9 横浜市金沢区長ら、米軍ヘリコプター基地(現追浜運動公園)を訪れ、騒音に抗議する。(『民主運動史』)</p> <p>8.18 日向児童公園(浦郷町1丁目、1,509平方㍍)が開設される。(『市公園』)</p> <p>10.25 浦郷小学校分校(浦郷町4-35)のRC3階校舎が完成。校地は旧海軍鉞切用地6,700余坪。11月8日に開校する(後の夏島小学校)。(『市報』)</p> <p>10.－ 第10回国民体育大会神奈川大会の軟式野球が追浜球場で実施される。</p> <p>この年、歌人吉野秀雄が追浜小学校の校歌を作詞する。(『追浜小50』)</p>
<p>昭和31 (1956)</p>	<p>4.1 私立ぎんのすず幼稚園(追浜町2丁目)が開園する。(聞取調査)</p> <p>5.5 鷹取公園(鷹取町1丁目、12,955平方㍍)が開設される。(『市公園』)</p> <p>5.28 戦後荒廃していた「海軍航空発祥之地記念碑」を再建竣工、除幕式を挙げる。(『神新』)</p> <p>5.－ 京浜研磨機工業(株)(野中元司、浦郷町)が設立される。(『横経済史』)</p> <p>10.31 豪雨のため鷹取川が氾濫する。(『神新』)</p> <p>12.－ 追浜小学校、給食優良校として県表彰を受ける。(『戦後教育』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>この年、①浦郷塵芥焼却場の炉を補修し、30mの煙突を築造して処分日量23トンとする。(『市報』) ②追浜東映劇場(追浜本町)が開館するという。(聞取調査)</p>
<p>昭和32 (1957)</p>	<p>1.20 浦郷官修墓地は戦後国がその維持管理を打ち切ったため、「横須賀市追浜等にある官修墳墓の祭祀及管理の復活に関する請願書」が農洋会によって国会に提出される。(請願書写)</p> <p>1.21 横浜銀行追浜支店、現在地(追浜本町)に店舗を移転する。(『工業30』)</p> <p>6. - 湘南病院、小児結核療養施設の湘南玉葉愛児園を設置する。(『湘南病50』)</p> <p>9. - 有限会社岸風呂店(岸竹春、追浜町3丁目)が設立される。(『此处』)</p> <p>12. - 東亜学園東亜高等学校(現・横浜創学館高校)が現在地にあった旧海軍兵舎に横浜市鶴見区から移転し、再開する。(『学校記念誌』)</p> <p>12. - 雷神社社殿(RC造)が再建される。設計大岡実博士、施工高坂工務店。(大岡実建築研究所HP)</p>
<p>昭和33 (1958)</p>	<p>1.24 東亜高等学校を横浜商工高等学校に名称変更し、この日を創立記念日とする。(『学校記念誌』)</p> <p>1. - 米陸軍特需会社日本飛行機(株)追浜工場で1,000人が解雇される。(『民主運動史』)</p> <p>3. 3 浦郷町1丁目地先の公有水面226平方メートルの埋立竣工が認可される。</p> <p>6. - (株)岡村製作所、追浜工場(浦郷町)を新設、操業を開始する。(『岡村70』)</p> <p>7. 1 日本飛行機(株)追浜工場が労務者1,006人の解雇を発表する。(『民主運動史』)</p> <p>9. 3 追浜基地内7組合共闘会議主催、人員整理反対総決起大会(5,000人、富士自動車内広場)を開催する。(『民主運動史』)</p> <p>9.15 日本飛行機(株)追浜工場3労組、一斉ストライキ。(『民主運動史』)</p> <p>9.19 追浜基地内7組合はストライキと工場閉鎖反対の第2回総決起大会を開催、参加者4,000人。(『民主運動史』)</p> <p>9.26 狩野川台風の豪雨により、家屋等甚大な被害があり、災害救助法が発動される。(『横須賀百年史』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>9.30 特需会社日本飛行機(株)が閉鎖され、全従業員2,986人が解雇される。(『神新』)</p> <p>10. ー 浦郷町3丁目65番地地先(深浦湾)816平方m^2を埋立・編入する。</p> <p>この年、①追浜東町商店会が発足。また、天神商店会も結成される。②西武系の国土計画興業が、鷹取山一帯約132万平方m^2(40万坪)を買収する。(『神新』)</p>
<p>昭和34 (1959)</p>	<p>1. 6 米陸軍特需会社富士自動車(株)が閉鎖され、全従業員3,346人が解雇される。(『民主運動史』)</p> <p>4. 1 北郷児童公園(追浜町1丁目)が開設される(1,474平方m^2)。(『市公園』)</p> <p>4.16 夏島貝塚出土のカキ・木炭のC年代測定をミシガン大学で行い、カキ(9450\pm400BP)、木炭(9240\pm500BP)の測定値がでる(我が国初の試み)。(『朝日新聞』)</p> <p>5. ー 日産自動車(株)、追浜地区払下げの申請をする。(『横経済史』)</p> <p>6.30 米陸軍追浜兵器廠が閉鎖され、全従業員2,152人が解雇される。(『民主運動史』『市広報』)</p> <p>6.30 追浜米陸軍兵器廠跡地約156万7,500平方m^2(47万5千坪)が14年振りに返還されることになり、その第1回分として約118万8,000平方m^2(36万坪)が解除され、この日返還式が行われる。(『民主運動史』『横須賀と基地』)</p> <p>7. ー 日向・八王子社、もとの宮地へ拝殿を修築して遷宮する。(『回想』)</p> <p>8.14 横浜市が追浜返還予定地区の帰属未定を理由に、工場進出申請の保留を大蔵省に申し入れる。(『神新』)</p> <p>8.17 追浜地先埋立地の帰属について、県が横須賀・横浜両市長を招いて、その主張を聴取。(『神新』)</p> <p>9.30 追浜地先埋立地の帰属に関する県知事の斡旋案が、横須賀・横浜両市に提示される。(『神新』)</p> <p>9.30 米軍、日本政府へ追浜地区の土地1,526坪、建物1,756坪を正式に返還する。(『民主運動史』)</p> <p>10.18 追浜埋立地の件で横須賀・横浜両市境界、知事斡旋案受諾の調印式が行われる。当面、横須賀市に帰属することに決まり、11年振りに解決する。(『神新』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>10.24 (告示) 総理府339号により、横須賀市夏島地先公有水面埋立地34万1,409.36坪の所属未定地を、横須賀市に編入することが確定する。(『官報』)</p> <p>11.9 国有財産処理審議会が追浜接收解除地区進出希望企業72社のうち、日産自動車(株)ほか26社を決定する。(『横須賀百年史』)</p> <p>11.24 全駐労横須賀支部追浜分会、解雇反対などで48時間ストを行う。(『民主運動史』)</p> <p>11.30 米軍、日本政府へ追浜地区の土地14万7,414坪、建物1,618坪を正式に返還する。(『民主運動史』)</p>
<p>昭和35 (1960)</p>	<p>2.25 日産自動車(株)、追浜地区(夏島町)に進出する。(『横経済史』)</p> <p>4.1 夏島小学校(浦郷小学校分校)、独立して開校する。(『夏島小学校記念誌』)</p> <p>4.1 田浦中学校分校(夏島町)が設置される(のちの追浜中学校)。(『追浜中学校記念誌』)</p> <p>4.1 在籍児童数は浦郷小1,492人、追浜小952人、夏島小738人という。(教育統計)</p> <p>4.7 イシカワ製作所横須賀工場が開設される(石川昇、浦郷町5丁目)。(『此処』)</p> <p>4. 鷹取山の磨崖仏第1号の釈迦如来坐像(高約4m)が完成する。作者藤島茂(市内佐原、二紀会会員)。(『神新』)</p> <p>5.26 米軍、日本政府へ追浜地区の土地8,161坪、建物5,880坪を正式返還する。(『民主運動史』)</p> <p>5. 良心寺(追浜南町)本堂が再建される。RC造、バゴダ風の意匠で、建坪約80坪。設計は藤岡通夫博士。(聞取調査)</p> <p>6.6 関東自動車工業(株)、深浦工場(浦郷町5丁目)の一部操業開始する。(『横経済史』)</p> <p>6.27 米軍、日本政府へ追浜地区の土地5,232坪、建物2,056坪を正式返還する。(『民主運動史』)</p> <p>7. 大島工業(株)、追浜工場を開設する(大島竹一、浦郷町5丁目)。(『横経済史』)</p> <p>8.26 米軍、日本政府へ追浜地区の建物275坪を返還する。(『民主運動史』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>9. ー 雷神社境内に「戦没者慰霊碑」を浦郷支所管内戦没者慰霊碑建設委員会が建立、題字野村吉三郎書。(刻銘碑文)</p> <p>10.21 東邦化学工業(株)、追浜工場及び研究所(浦郷町5丁目)を開設する。(『横経済史』)</p> <p>10.24 米軍、日本政府へ追浜地区の土地1万9,794坪、建物320坪を正式返還する(ヘリコプター基地を含む)。昭和34年より延べ7回にわたり土地54万3,040坪、建物6万9,291坪を返還する。(『民主運動史』『市と基地』)</p> <p>10. ー 追浜会を結成する(第2次接収解除により進出した企業で組織)。(『横経済史』)</p> <p>11. 9 夏島小学校創立記念式典が挙行され、校歌・校章が発表される。(『夏島小学校記念誌』)</p> <p>11. ー 日本和紡興業(株)、営業を開始する(浦郷町5丁目)。(『横経済史』)</p> <p>12.23 追浜渉外労務管理事務所が廃止され、横須賀渉外労務管理事務所に統合される。(『県公報』)</p> <p>この年、①鷹取商栄会が結成される。②東京ファインケミカル(株)が設立される(夏島町)。(『工業会30年』)③浦郷地区の人口2万7,396人という。(国勢調査)</p>
<p>昭和36 (1961)</p>	<p>2. 3 国有財産処理審議会が追浜解放地区第2次進出企業として14社を決定する。(『横須賀百年史』)</p> <p>2.10 横須賀市による浦郷町2丁目地先1,603平方m^2の埋立が竣工認可される(榎戸湾・公園用地)。(『市報』)</p> <p>2.25 日産自動車(株)追浜工場(夏島町)の起工式が行われる(敷地100万平方m^2、総工費139億円)。(『横経済史』『神新』)</p> <p>3. 9 関東自動車(株)横須賀工場(浦郷町5丁目)の竣工式が行われる。敷地面積3万7,018平方m^2。(『横経済史』)</p> <p>3.31 神応橋(鷹取川)が竣工する。(親柱銘)</p> <p>3. ー 新浦郷トンネル(追浜町1丁目・船越町5丁目間)が竣工する。(『トンネル』)</p> <p>4. 1 追浜中学校(田浦中学校分校)が独立して開校する。敷地2万6,357平方m^2、木造2階建て校舎5棟を新設。工費5,687万余円。生徒数1,918人という。(『追浜中学校記念誌』)</p> <p>4.10 追浜協同工業企業組合が設立される。(『横経済史』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>5.12 池田物産(株)追浜工場（夏島町）が開設される。（『横経済史』）</p> <p>6. 1 田川地所（株）が設立される（田川誠治、浦郷町）。（『横経済史』）</p> <p>6. 7 鷹取山に磨崖仏第2作の「弥勒菩薩坐像」が完成、公開する。作者藤島茂。（『神新』）</p> <p>6.15 日産自動車(株)、追浜工場に高速試験場完成。（『横経済史』）</p> <p>6.28 台風6号の集中豪雨により、全市で死者16人、家屋全壊71、同半壊97、床上浸水876などの被害があり、被災者総数1万7,826人と云われ、災害救助法が発動される。（『市概要』）</p> <p>6. - 日本エアブレーキ(株)横須賀工場（浦郷町5丁目）が開設される。（『横経済史』）</p> <p>11. 7 鷹取川氾濫防止対策委員会は、開発工事に関して西武鉄道、県に陳情する。（『西武社内報』）</p> <p>11. 9 追浜プレス企業組合を設立する。（『横経済史』）</p> <p>11.27 川西工業(株)追浜工場が開設される（浦郷町5丁目）。（『横経済史』）</p> <p>11. - 浜浦給食(株)が操業を開始する（浦郷町5丁目）。また(株)東横製作所が浦郷工場を新設。（『横経済史』）</p> <p>この年、浦郷支所管内の世帯数6,806、人口2万7,330人。（市統計書）</p>
<p>昭和37 (1962)</p>	<p>3.13 横須賀北ロータリークラブが設立される（会長木村秀雄）。（『横経済史』）</p> <p>3.27 日産自動車(株)追浜工場が竣工し、全面稼働に入る。（『横経済史』）</p> <p>3. - 追浜橋（鷹取川河口）が竣工する。長さ23メートル、工費1,627万余円。（親柱銘）</p> <p>4.20 浦郷団地（浦郷町4丁目・追浜東町3丁目地内）の造成工事が竣工する。市都市施設公社施工。（『公社のあゆみ』）</p> <p>5. 3 榎戸・正観寺薬師堂が再建され、落慶法要が挙行される。（『正観寺誌』）</p> <p>5. - 日本ラヂエーター(株)追浜工場が設立される（木村秀雄、夏島町）。（『横経済史』）</p> <p>5. - (株)富士オイルが設立される（夏島町）。（『横経済史』）</p> <p>6.10 (株)青木製作所追浜工場が設立される（浦郷町5丁目）。（『横経済史』）</p>

年 号	出 来 事
	<p>6. - ビジネスホテル夏島園（夏島町）が営業を開始する。（『工業30』）</p> <p>6. - カルソニック(株)追浜工場（夏島町）が設立される。（『工業30』）</p> <p>6. - 北辰工業(株)、旧海軍航空技術廠庁舎（浦郷町5丁目）の払下げを受ける。（『新市史』別文）</p> <p>7.11 三上製作所追浜工場（夏島町）が操業開始する。（『横経済史』）</p> <p>7.20 追浜市営プールの竣工式が挙行される（市営追浜球場隣り・追浜公園用地内）。工費900万円。昭和61年10月に廃止。（『神新』）</p> <p>10. 1 神奈川県立追浜高等学校の設置（県告示）</p> <p>10. - 追浜地区進出転換企業各社の従業員数が7,605人に達する。（『横経済史』）</p> <p>11. 1 浦郷官修墓地は国より無償貸付けとなり、管理を委託されて引継ぎを終了。（『市公示』）</p> <p>11. - 京浜発条(株)が本社・工場を浦郷町5丁目に移転し、操業を開始する。（『工業30』）</p>
<p>昭和38 (1963)</p>	<p>1.10 グレート・スーパー・チェーン結成、大木商店（追浜町3丁目）が加盟する。（『横経済史』）</p> <p>4. 1 県立追浜職業訓練所（浦郷町4丁目）が開設される。（『県公報』）</p> <p>4. 1 浦郷児童公園（浦郷町2丁目・5,919平方m^2）が開設される。（『市公園』）</p> <p>4. 1 榎戸巡査駐在所を浦郷町駐在所と改称する。（『田浦警察署史』）</p> <p>4. 5 県立追浜高等学校が開校、第1回生501名が入学。5月20日に開校式を挙行、敷地4万9,500平方m^2。（『追高40』）</p> <p>6.14 (株)京急自動車学校、追浜自動車学校を開校する（夏島町）。（『横経済史』）</p> <p>8. 6 夏島土地区画整理事業が始まる（40年1月22日迄）。面積20万8,664平方m^2。（『市史80』下）</p> <p>8. - 追浜駅前に追浜ショッピング・センターが完成する（追浜町3丁目）。（『神新』）</p> <p>9.27 横須賀市、旧横須賀海軍航空隊施設（土地49万9,854平方m^2）の全面返還を米軍・日本政府などに要望する。（『神新』）</p> <p>10. - (株)瀧澤鑄機製作所が設立される（浦郷町3丁目）。</p>

年 号	出 来 事
<p>昭和39 (1964)</p>	<p>1. - 浜見台トンネル（浜見台1丁目・浜見台2丁目間）が竣工。市都市施設公社施工。（『公社のあゆみ』）</p> <p>2. - 北辰化学工業(株)横須賀工場が操業開始する（浦郷町5丁目）。昭和52年10月北辰工業(株)と改称する。（『工業会30』）</p> <p>3.16 横須賀市議会、旧追浜海軍航空隊施設の返還要望の決議を可決する。（『議会史』記1）</p> <p>4. 1 県立大船技術高等学校の追浜分校が開校、追浜職業訓練所を併置する（浦郷町4丁目31番地）。（『県公報』）</p> <p>4. 1 県立追浜高等学校に定時制を設置する。（『県公報』）</p> <p>4. 1 追浜管内学校の在籍児童生徒数は、追浜中1,633、浦郷小1,108、追浜小657、夏島小605という。（『教育資料』）</p> <p>4.28 日産自動車(株)、追浜工場でI車種（ブルーバード）月産1万台を達成する。（『日産64』）</p> <p>8.30 朝倉能登守景隆一統の慰霊祭を、追浜南町1丁目の正明会有志がやぐら前で挙げる。（聞取調査）</p> <p>9. - 上原塗装工業(株)が設立される（追浜本町2丁目）。（『横経済史』）</p> <p>10. 1 横須賀市浦郷支所を追浜支所と改称する。（『市広報』）</p> <p>10. 7 東京オリンピックの聖火リレー、追浜駅前を通過する。（『神新』）</p> <p>11. - 追浜小学校、健康優良学校全国第3位となる。（『追浜小学校記念誌』）</p> <p>この年、日産自動車(株)追浜工場の従業員4,700人という。</p>
<p>昭和40 (1965)</p>	<p>2. 6 土地区画整理施行のため、浦郷町4丁目及び追浜東町3丁目の一部を夏島町に変更する。（『横須賀の町名』）</p> <p>2.27 市道追浜～鷹取線（拡幅）520メートルが完成する。（『神新』）</p> <p>3. 5 追浜中学校の体育館兼講堂の落成式が行われる。（『追浜中学校記念誌』）</p> <p>3.30 鷹取川の下流が2級河川に昇格、県管理となる。（『県公報』）</p> <p>3. - 大浜鉄工所が追浜工場を新設する（夏島町15番地）。昭和53年市内三春町に在った本社・工場を現在地に移転する。（『工業会30』）</p> <p>4. 1 追浜共済病院が横浜南共済病院と改称、本館が新築完成する。（『図説かなざわの歴史』）</p>

年 号	出 来 事
	<p>7. 一 (株)三鈴精機が設立される (浦郷町3丁目)。</p> <p>11.4 日産自動車(株)追浜工場の「第1追浜丸」(日本最初の外航乗用車専用船)、対米輸出で長浦港を出港する。(『日産64』)</p> <p>この年、夏島商店会が結成される (浦郷町)。(『横経済史』)</p>
<p>昭和41 (1966)</p>	<p>1. 3 追浜大通り会、アーケードが完成する。(『横経済史』)</p> <p>1.22 県立追浜高校、全校舎落成式を挙げる。(『記念誌』)</p> <p>2.19 市立追浜乳児保育園(追浜本町2丁目)が建設・竣工する。開園は5月1日、定員32名とする。(『市広報』)</p> <p>3. 8 夏島小学校、講堂兼体育館の落成式を挙げる。(『夏島小学校記念誌』)</p> <p>3.21 榎戸・正観寺、半鐘が新鑄されて奉納される。(『正観寺誌』)</p> <p>4. 1 追浜本町第2幼児公園(追浜本町2丁目・367平方m)が開設される。(『市公園』)</p> <p>4. 1 山川工業(株)横浜工場第2製造所(夏島町)が開設される。(『横経済史』)</p> <p>6.28 台風4号の暴風雨で被害あり。(『神新』)</p> <p>6.29 追浜小学校で学校給食による集団赤痢中毒発生のため学級閉鎖される。罹患児童数460名。同6月30日～7月13日まで休校する。(『追浜小50』)</p>
<p>昭和42 (1967)</p>	<p>1.16 西武鉄道(株)、鷹取山分譲地造成の起工式を挙げる。(『社内報西武』)</p> <p>3.31 『校訂三浦古尋録』が刊行される。(左書奥付)</p> <p>4. 1 県立大船技術高等学校追浜分校、県立追浜技術高等学校として独立する。(『県公報』)</p> <p>6.11 法福寺本堂(追浜本町)を再建、この日入仏式を挙げる。(『法福寺誌』)</p> <p>10.21 西武鉄道(株)、鷹取町宅地造成工事に着手。造成面積117万8,589平方mという。(『横経済史』)</p> <p>11. 一 雷神社前の歩道橋が竣工する。</p> <p>11. 一 ヨコサンスーパー追浜店が開店(追浜本町、ヨコサンスーパーの1号店)。(『横経済史』)</p>

年 号	出 来 事
	この年、岡村製作所(浦郷町5丁目)の工場建設のため、範頼伝説の「やぐら」が取崩され、消滅する。(社内報)
昭和43 (1968)	<p>3. 1 ㈱美装が設立される(福島義信、湘南鷹取1丁目)。(『横経済史』)</p> <p>5. 3 榎戸・正観寺で新鑄梵鐘と鐘楼の落慶法要が挙行される。(『正観寺誌』)</p> <p>10. - 日産自動車(株)追浜工場の従業員が1万人を突破する。(『横経済史』)</p> <p>11. 1 浦賀重工業(株)、造船施設(夏島)新設許可申請書を運輸省に提出。(『横経済史』)</p> <p>12.16 西武鉄道(株)による湘南鷹取団地造成工事の第1期工事(湘南鷹取1丁目地区、16.5%)が竣工する。(『西武社内報』)</p> <p>この年、浦郷塵芥焼却場の廃止が決定されたが、以後、日量2.5トン程の処分を継続、最終的に昭和57年に廃止される。(『市史80』)</p>
昭和44 (1969)	<p>1. 5 鷹取川流域の浸水対策のため、市営追浜ポンプ場の運転を開始する。(『下水道概要』)</p> <p>3. - 湘南鷹取第1および第2トンネルが竣工する。(『トンネル』)</p> <p>3. - 西武鉄道鷹取分譲地、第一期426戸分を売り出す。平均面積56坪、坪当たり約6万円。(『社内報西武』)</p> <p>5. 1 石川工業(株)(石川達治、浦郷町)が設立される。(『横経済史』)</p> <p>6.30 浦賀重工業(株)、住友機械工業(株)と合併、住友重機械工業(株)となる。(『住友100』)</p> <p>7. 1 ㈱タケナガが設立される(竹永幸衛、追浜本町)。(『横経済史』)</p> <p>9.17 夏島運輸(株)が設立される(近藤誠、夏島町)。のち同57年12月浦郷町5丁目の現在地に移転。(『横経済史』)</p> <p>10. 1 県立追浜職業訓練所(浦郷町4丁目)、職業訓練法改正により追浜専修職業訓練校と改称される。(『県公報』)</p> <p>11. 2 追浜電話交換局(追浜東町3丁目・天神橋前)が開局し、追浜地区の局番は61局から65局に変更となる。(『神新』)</p> <p>11. 8 夏島小学校、創立10周年記念式典を挙げる。(『記念誌』)</p> <p>11.11 住友重機械工業(株)、追浜造船所建設許可を運輸大臣から受ける。(『住友100』)</p>
昭和45 (1970)	4. 1 追浜地区の在籍児童数は浦郷小929人、追浜小656人、夏島小542人という。(『教育資料』)

年 号	出 来 事
	<p>4.13 追浜支所管内再開発促進協議会が発足する。(『横経済史』)</p> <p>4.13 市立追浜青少年の家が開設される(鷹取1丁目)。(『市報』)</p> <p>5.11 自得寺(追浜町)所蔵の「木造十王坐像」、能永寺(浦郷町)所蔵の「絹本地蔵十王図」、良心寺(追浜南町)所在の「朝倉能登守墓」が横須賀市重要文化財及び史跡に指定される。(『市報』)</p> <p>5.27 追浜歩道橋(旧行政センター前)の開通式が行われる。</p> <p>6.30 日米合同委員会、旧追浜海軍航空隊施設(45万平方m^2)について日本政府へ27万平方m^2を返還し、残りの18万平方m^2は海上自衛隊の使用・管理とすることを決定する。(『神新』)</p> <p>7. 1 日本触媒化学工業(株)追浜工場(夏島町)が開設される。(『横経済史』)</p> <p>11.18 住友重機械工業(株)追浜造船所(夏島町)のマンモスドックの起工式が挙行される。(『神新』)</p>
<p>昭和46 (1971)</p>	<p>2.19 米軍、日本政府へ旧追浜海軍航空隊施設の土地83,500坪(27万平方m^2)を返還する。(『横須賀と基地』)</p> <p>3. 4 追浜地区転換計画審議会が設置される。(『市概要』)</p> <p>6. 1 住友重機械工業(株)、追浜造船所が発足(世界最大の鍛造プレス完成)する。(『横経済史』)</p> <p>9.10 平和幼児公園(追浜町2丁目、708平方m^2)が開設される。(『市公園』)</p> <p>10. 1 海洋科学技術センターが正式に発足。横須賀市米が浜に仮事務所を設ける。(『海洋10』)</p> <p>12.19 住友重機械工業(株)追浜造船所が操業を開始する。(『住友100』)</p> <p>この年、鳶ノ入川(女川)の暗渠工事が始まる(妙法橋迄)。</p>
<p>昭和47 (1972)</p>	<p>1.27 「夏島貝塚」(夏島町)が国指定史跡となる。(文部省告示)</p> <p>2.10 住友重機械工業(株)、夏島町で62万3,236平方m^2の公有水面埋立が竣工許可される。9月には新ドックで第1船が完成する。(『住友100』)</p> <p>2. - 追浜小学校、創立30周年記念誌を発行する。(『教育資料』)</p> <p>4. 3 旧第1航空技術廠、横須賀海軍航空隊及び付属追浜飛行場の土地17万9,827平方m^2が返還される。この日まで約250万平方m^2が返還され、全地域が返還される。(『横須賀と基地』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>5.21 浦郷町駐在所を榎戸（浦郷町2丁目）より日向（浦郷町1丁目55番地）に新築移転する。（『田浦警察署史』）</p> <p>5.26 住友重機械工業(株)追浜造船所が完成する。（『横経済史』）</p> <p>6.28 浦郷火葬場（追浜東町）の使用を休止する。（『市概要』）</p> <p>11. 1 京急・追浜駅の橋上駅舎が完成、営業を開始する。</p> <p>11.18 新生商事(株)が設立される（昭和56年5月(株)寿徳庵商事と名称変更、追浜本町）。（『横経済史』）</p> <p>12.14 「大日本帝国憲法草案起草地記念碑」の移転について、横須賀市文化財専門審議会より横須賀市長に対して、史蹟保存の見地から再考善処の要望書が提出される。（要望書写）</p> <p>この年、鳶ノ入川の暗渠工事が続行、同48年に完成する。</p>
<p>昭和48 (1973)</p>	<p>2.10 米軍、夏島地先制限水域80万平方メートルを、日本政府に返還する。（『横経済史』）</p> <p>4. 1 夏島歴史公園（夏島町2、414平方メートル）を開設する。（『市公園』）</p> <p>4. 1 横須賀市追浜支所を追浜行政センター（夏島町7）と改称、公民館を併設して開館する（神応橋際）。建物概要はRC造地下1階、地上4階、塔屋1階で、公民館施設を備える。（『市報』）</p> <p>6. 1 追浜観光協会が設立される。（『会則』）</p> <p>6.13 海洋科学技術センター、夏島町へ仮事務所及び東京連絡所を移転。（『海洋10』）</p> <p>10. 5 (株)日本オートメーションサービスが設立される（杉山誠一郎、浦郷町4丁目）。（『横経済史』）</p> <p>12. 4 海洋科学技術センター（夏島町）が開所式を挙げる。（『海洋10』）</p>
<p>昭和49 (1974)</p>	<p>2.15 湘南鷹取1丁目から6丁目まで、住居表示が行われる（従来の鷹取町、追浜南町、追浜町の各一部の地区）。（『市報』）</p> <p>4. 1 私立たかとり幼稚園（湘南鷹取5丁目）が開園する。（聞取調査）</p> <p>4. 1 追浜管区内学校の在籍児童生徒数は、追浜中1,037、浦郷小895、追浜小919、夏島小583という。（『教育資料』）</p> <p>4.30 浦郷小学校、創立百周年記念『浦郷』を発刊する。（後書日付）</p> <p>5.16 鷹取台郵便局（湘南鷹取4丁目）が開局する。（聞取調査）</p>

年 号	出 来 事
	<p>6. 8 浦郷小学校、創立100周年の式典を挙げる。(『浦郷小学校百周年記念誌』)</p> <p>7. 8 台風8号による集中豪雨で被害あり。追浜地区で家屋全壊1、半壊15、床上浸水53等あり。(『市広報』)</p> <p>8. - 湘南病院が総合病院湘南病院と改称する。(『湘南病50』)</p> <p>11.7 たかとり宅造公害反対協議会(丸山正男会長)、西武汚水処理場拡張反対で市に陳情する。(『民主運動史』)</p> <p>12. 1 追浜工業(株)が設立される(北沢意成、追浜本町1丁目)。(『横経済史』)</p> <p>この年、浦郷商店会が発足する(浦郷町)。(『横経済史』)</p>
<p>昭和50 (1975)</p>	<p>4. 1 鷹取小学校(湘南鷹取4丁目)が追浜小学校から分離独立して開校する。在籍児童数448人(12学級)。(『市報』)</p> <p>4. 1 湘南鷹取巡査駐在所(湘南鷹取1-31)を設置する。(『田浦警察署史』)</p> <p>4.26 日産自動車(株)工場建設のため、「明治憲法起草遺跡記念碑」を設置場所より北へ200メートルの現在地に移設される。(『神新』)</p> <p>6.28 鷹取小学校、開校式を挙げるし、この日を創立記念日とする。(『教育資料』)</p> <p>7. 4 集中豪雨で被害あり。平作川が氾濫する。(『神新』)</p>
<p>昭和51 (1976)</p>	<p>2.11 三井住宅設備(株)が設立される(三浦茂実、追浜本町)。(『横経済史』)</p> <p>3. - 県立追浜技術高等学校は第10回、同追浜専修職業訓練校は第9回の卒業式を挙げ、各廃校となる(浦郷町4丁目)。(『神奈川県立技術高等学校の設立と廃止』)</p> <p>4. - 湘南病院、病弱児童のため追浜小学校の分教室「ねぎぼうず学級」を開設する。(『湘南病50』)</p> <p>6. 1 (株)カワバタを設立(川端延幸、追浜町)。昭和54年5月(株)コーワハウジングと名称変更。(『横経済史』)</p> <p>9.22 (株)寿福が設立(齊藤音吉、追浜本町)される。</p> <p>9.26 海洋科学技術センター(夏島町)、日本最初の海中ロボットを完成する。(『海洋10』)</p> <p>10. - 追浜公民館サークル協議会が結成される。(『公民10』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>11. ー 第1回追浜公民館の市民サロン(作品展示会)が開催される。(『公民10』)</p> <p>この年、追浜2丁目共栄会が結成される。(『横経済史』)</p>
<p>昭和52 (1977)</p>	<p>3. 1 浜見台1丁目、2丁目の住居表示が実施される。(『市報』)</p> <p>3. 1 住居表示により、浦郷町1.2丁目の一部を船越町8丁目に変更する。(『横須賀の町名』)</p> <p>3. 1 榎戸・正観寺で『正観寺誌』(宮沢善正著)を発刊する。(左書奥付)</p> <p>3.24 旧鉾切住民代表蒲谷秀吉より横須賀市長あて陳情書が提出される。旧鉾切地区に残った自然環境を整備し、夏島を含めて自然臨海公園を実現して欲しいという内容である。(陳情書写)</p> <p>4. 1 市立追浜保育園(追浜本町)、現在地で全面改築する。(『市広報』)</p> <p>4. 1 神奈川花王(株)横須賀営業所を開設する(浦郷町)。(『横経済史』)</p> <p>4.30 良心寺庫裏で「郷土を語る会」が開催される。住職野中純道、高橋慎太、丸山一雄など多数参加する。(議事覚書)</p> <p>6.18 皇太子殿下、夏島の海洋科学技術センターをご視察される。(『海洋10』)</p> <p>7.12 追浜東町1丁目第2幼児公園(886平方m^2)が開設される。(『市公園』)</p> <p>9. 1 三ツ星ベルト(株)神奈川工場が開設される(夏島町)。(『横経済史』)</p> <p>この年、追浜東宝劇場(追浜本町・銀座通り)が閉館するという。(聞取調査)</p>
<p>昭和53 (1978)</p>	<p>2. 1 住友横須賀鉄工(株)が設立される(久保田元、夏島町)。(『横経済史』)</p> <p>2.24 東洋企業(株)が設立される(大島明、浦郷町)。(『横経済史』)</p> <p>6.21 (株)横須賀環境技術センターが設立される(鈴木才一郎、浦郷町5丁目)。(『横経済史』)</p> <p>7. 1 湘南鷹取5丁目第2児童公園(5,581平方m^2)及びプールが開設される。(『市公園』)</p> <p>9. 1 住友重機械工業(株)浦賀造船所、造船不況のため追浜造船所に統合、追浜造船所浦賀工場となる。(『住友100』)</p> <p>12.16 湘南鷹取から国道16号への跨線跨道橋の開通式が行われる。(『神新』)</p>

年 号	出 来 事
	12.18 横須賀郷土資料叢書第1回配本で、『浦郷村郷土誌』『田浦町誌』が復刻発刊される。
昭和54 (1979)	<p>1.25 住友重機械工業(株)追浜造船所住友労組、希望退職1,200人で労使妥結する。(『民主運動史』)</p> <p>2.13 住友重機械工業(株)、造船不況による希望退職者数が583人になったと発表。(『民主運動史』)</p> <p>5.11 住友重機反合闘争支援連絡会、追浜造船所門前で抗議集会を開催する。(『民主運動史』)</p> <p>6.25 追浜駅前市街地再開発の都市計画が決定する。(『市報』)</p> <p>7. - 第二浜見台トンネル(浜見台2丁目・53㍍)が完成する。(『トンネル』)</p> <p>10. - 横須賀工業(株)、生産工場を市内根岸から追浜(浦郷町5丁目)に全面移転する。(『工業30』)</p> <p>11.17 夏島小学校、創立20周年記念式典を挙行し、『創立20年記念誌なつしま』を発刊する。(『教育資料』)</p> <p>この年、鉾切遺跡(古墳時代)を発掘調査、さらに同58年にも再度調査する。(『新市史』別考古)</p>
昭和55 (1980)	<p>4. 1 鷹取中学校(湘南鷹取2丁目)が、追浜中学校から分離独立して開校する。生徒数449人(『市報』)</p> <p>4. 1 追浜東町1丁目児童公園(1,926平方㍍)が開設される。(『市公園』)</p> <p>4.15 住重追浜造船所で貨物船の改造作業中に事故、下請け作業員13人が軽傷を負う。(『民主運動史』)</p> <p>7.26 追浜公園硬式野球場でナイター設備完成、点灯式と第1回市民納涼のつどいが行われる。(『神新』)</p> <p>10. - 鷹取山で校外授業の小学生が転落死、岩登り3年間全面禁止となる。(『神新』)</p> <p>10. - 追浜行政センター管内の人口3万3,566人、横須賀市の人口42万1,107人となる。(『市統計書』)</p> <p>この頃、追浜東映劇場(追浜本町)が閉館するという。(聞取調査)</p>
昭和56 (1981)	3.15 『古老が語るふるさとの歴史』北部編(横須賀市広報課編)が刊行される。(左書奥付)

年 号	出 来 事
	<p>3.31 浦郷火葬場（追浜東町1丁目）を廃止する（昭和46年6月から休止）。(『神新』)</p> <p>4. 1 湘南鷹取1丁目児童公園(4,226平方㍍)が開設される。(『市公園』)</p> <p>4. 1 湘南鷹取1丁目第2幼児公園（388平方㍍）が開設される。(『市公園』)</p> <p>4. 1 湘南鷹取2丁目幼児公園（465平方㍍）が開設される。(『市公園』)</p> <p>4. 1 湘南鷹取4丁目幼児公園（396平方㍍）が開設される。(『市公園』)</p> <p>4. 1 湘南鷹取4丁目第2児童公園（9,181平方㍍）が開設される。(『市公園』)</p> <p>4. 1 湘南鷹取2丁目第2幼児公園(809平方㍍)開設される。(『市公園』)</p> <p>4. 1 湘南鷹取5丁目児童公園(5,117平方㍍)が開設される。(『市公園』)</p> <p>4. 1 湘南鷹取3丁目児童公園(1,385平方㍍)が開設される。(『市公園』)</p> <p>4. 1 ケープ・トレーディング(株)が設立される（花房志郎、追浜町）。(『横経済史』)</p> <p>4.13 横須賀市が浦郷町1・2丁目地先（榎戸湾）5,704平方㍍を公園用地として埋立・編入する（浦郷公園）。(『市広報』)</p> <p>5. 2 追浜駅前第1街区市街地再開発ビルに関して、追浜駅前大型店対策委員会が結成される。(『横経済史』)</p> <p>5.20 第一勧業銀行追浜支店(追浜町3丁目・銀座通り)が開業する。(『横経済史』)</p> <p>6. 1 「予科練誕生之地」碑が、貝山緑地（浦郷町5丁目）に建立され、除幕式を挙げる。(刻銘碑文)</p> <p>7. - 追浜地区の事業所数1,190。従業員数2万3,559人という。(『市統計書』)</p>
<p>昭和57 (1982)</p>	<p>1.21 浦郷町5丁目横須賀市が清掃施設用として2万8,700平方㍍の埋立竣工が認可される。(『市報』)</p> <p>1.21 夏島町・浦郷町地先で日産自動車(株)による27万7,080平方㍍の埋立地が竣工認可される。(『市報』)</p> <p>3. - 鷹取川人道橋が竣工する（県立追浜高前）。4月2日渡り初め式が行われる。(『神新』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>4. 1 追浜管区内学校の在籍児童生徒数は、追浜中 1, 0 1 2、鷹取中 5 5 4、浦郷小 1, 0 2 4、追浜小 4 7 7、夏島小 6 6 1、鷹取小 1, 3 5 8 で、この年、鷹取小は最多数となる。(『教育資料』)</p> <p>4.26 正光寺(追浜町)所蔵の木造阿弥陀如来立像が横須賀市重要文化財として指定される。(『市報』)</p> <p>4. ー 良心寺(追浜南町)、梵鐘を新鑄して鐘楼を再建する。(『良心寺しおり』)</p> <p>5.10 日向ヶ丘団地(日向・船越)が竣工する。同 5 5 年に「日向ヶ丘団地造成記念碑」(船越町 8 丁目公園)が建立される。(碑文銘)</p> <p>6. ー 「烏帽子岩の跡」碑が 1 5 0 メートルほど南西の現位置に移設される。(『神新』)</p> <p>6. ー 追浜球場にて東日本軟式野球選手権大会が開催される。(『市体育協会史』)</p> <p>7.26 夏島町で海洋科学技術センターによる 1 万 8, 3 9 1 平方メートルの埋立が竣工。8 月 1 0 日認可される。(『海洋 1 0』)</p> <p>10. ー 池田運輸(株)が創立される(浦郷町 5 丁目)。</p> <p>この年、①追浜行政センター管内の世帯数 1 万 1, 5 7 8 という。②笹古隆司著『浦郷村の今昔』(手刷版)が発行される。</p>
<p>昭和 5 8 (1 9 8 3)</p>	<p>2. 5 (株)東湘食品チェーンが設立する(高橋毅一郎、湘南鷹取)。(『横経済史』)</p> <p>4. 1 貝山緑地公園(45,274 平方メートル、浦郷町 5 丁目)が開設される。緑地の一部は自然教材園となっている。(『市報』『市公園』)</p> <p>4. 1 鷹取山一帯の 7 万 9, 2 2 7 平方メートルが西武鉄道(株)から横須賀市に無償譲渡され、鷹取山公園(湘南鷹取 3 丁目)として開設される。(『市公園』)</p> <p>4.25 西武鉄道(株)が昭和 4 2 年(1967)に着工した湘南鷹取団地造成工事が竣工する。開発面積合計は 1 3 0 万 9, 6 4 2 平方メートルという。(『市報』)</p> <p>5.30 日産自動車(株)追浜専用埠頭が完成、船積みが始まる。(『神新』)</p> <p>6. ー 追浜球場で昭和 5 8 年度関東高等学校男女ソフトボール大会を開催する。(『市体育協会史』)</p> <p>7. 2 『横須賀民主主義運動史年表』(横須賀民主主義運動史年表編纂会編)が発刊される。(右書奥付)</p>

年 号	出 来 事
	<p>7.15 湘南鷹取2丁目第3児童公園(3,574平方m^2)が開設される。(『市公園』)</p> <p>7.15 湘南鷹取3丁目第2児童公園(8,598平方m^2)が開設される。(『市公園』)</p> <p>7.28 追浜駅前市街地再開発第1街区の建設工事が完成する。(『神新』)</p> <p>8.22 追浜運動公園前で古墳時代の牛頭骨を使った祭祀遺跡が発掘される(なたぎり遺跡)。(『新市史』別考)</p> <p>10.19 追浜公民館(夏島町)開館10周年の記念式を行う。(『公民10』)</p> <p>12.16 追浜駅前ビル(株)が設立される(尾崎義雄、追浜本町)。(『横経済史』)</p> <p>12.27 田川誠一衆議院議員(日向)、自治大臣、国家公安委員長に就任する。(『神新』)</p> <p>12.31 追浜地区の製造業に属する事業所(4人以上)は、事業所数73、従業員数1万3,969人、製造品出荷額等8,716億3,100万円(『市統計書』)。</p>
<p>昭和59 (1984)</p>	<p>1.20 浦郷町4丁目地先で住友重機械工業(株)による1,860平方m^2の埋立てが竣工する。(『住友100』)</p> <p>4. 1 追浜本町児童公園(2,411平方m^2)が開設される。(『市公園』)</p> <p>4. 1 湘南鷹取6丁目児童公園(3,102平方m^2)が開設される。(『市公園』)</p> <p>5. 1 市営追浜浄化センター(浦郷町5丁目)及び深浦ポンプ場が運転開始する。(『神新』『下水道概要』)</p> <p>6. - 住友重機械工業(株)、川間工場の橋梁・機械部門を追浜造船所に集約する。(『住友100』)</p> <p>6. - 追浜の歴史を探るの会(会長笹子隆司)、機関誌『追浜探訪』No1を発行する。(表紙日付)</p> <p>7. 4 湘南鷹取都市緑地公園(湘南鷹取6丁目、2,207平方m^2)が開設される。(『市公園』)</p> <p>7.10 追浜下水処理場の通水式が行われる(浦郷町5丁目)。(『下水道概要』)</p> <p>11.10 追浜駅前歩道橋が開通する(駅～サンビーチ間、完成は同年6月)。(『神新』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>11.29 日産自動車(株)追浜工場の流通基地と工機工場の完成式を挙げる。(『横経済史』)</p>
<p>昭和60 (1985)</p>	<p>1. 4 横須賀市追浜文化センター(夏島町)が開館する。開館式は市立北部図書館とともに3月27日挙る。(『市報』)</p> <p>3. 1 住居表示により、浦郷町1丁目の一部を船越町8丁目に変更する。(『市報』)</p> <p>3.31 『横須賀市文化財総合調査報告書第5集一北部編』(横須賀市教育委員会)が刊行される。(右書奥付)</p> <p>4. 1 追浜管区各小学校の在籍児童数は、浦郷小885人、追浜小363人、夏島小631人、鷹取小1,171人という。(『教育資料』)</p> <p>4. 2 横須賀市立北部図書館(夏島町)が開館する。(『神新』)</p> <p>5. - 鷹取小学校、創立10周年記念誌を発行する。(『教育資料』)</p> <p>6. 8 海洋科学技術センターが6,566平方メートルの埋立工事を完成させ、竣工式を挙げる。(『海洋10』)</p> <p>10.26 追浜駅前第1街区市街地再開発ビル、サンビーチ追浜店が開店(キーテナントは(株)西友、(株)横須賀産業、店舗面積7,633平方メートル)。(『横経済史』)</p> <p>11. 1 (株)西友追浜店、営業を開始する(サンビーチ追浜)。(『神新』『工業30』)</p> <p>11. - 駅前「サンビーチ追浜」で「追浜いま・むかし写真展」(追浜の歴史を探るの会)が開かれる。(『神新』)</p> <p>この年、①追浜行政センター管内の国勢調査数、所帯数1万1,603、人口3万4,786人。(『国勢調査』)②この頃、郷の湯(追浜町2丁目)が廃業するという。(聞取調査)</p>
<p>昭和61 (1986)</p>	<p>3. - 『追浜の歴史年表』(土方健次郎編)が刊行される。(右書奥付)</p> <p>4. 1 夏島都市緑地公園(夏島町、9,330平方メートル)が開設される。(『市公園』)</p> <p>4. 1 追浜東町1丁目第3幼児公園(263平方メートル)が開設される。(『市公園』)</p> <p>4. 1 鷹取中の在籍生徒数667名(16学級)で、この年最多数となる。追浜中は1,069名。(『教育資料』)</p> <p>8. - 追浜地域文化振興懇話会が発足する。(『文化財団5』)</p>

年 号	出 来 事
昭和62 (1987)	2.16 (株)軽部リネンサプライが設立される(軽部喜明、夏島町)。(『横経済史』) 8. 1 「'87日産カップ第1回神奈川県トライアスロン選手権大会」が日産自動車(株)追浜工場内を主会場に開催される。(『神新』) 8.20 追浜文化懇と追浜の歴史を探る会が『追浜の史跡探訪』(沢田雄也著)を発行する。(右書奥付) 9. 3 海洋科学技術センター(夏島町)開発の深海無人探査機「ドルフィン3K」が初の潜航テストに成功する。(『海洋10』)
昭和63 (1988)	1.31 海洋科学技術センターで3,000メートル級深海無人探査機「ドルフィン3K」の完工式を挙げる。(『神新』) 3.31 追浜公共職業安定所を廃止する(新設の横浜南公共職業安定所に統合)。(『神新』) 6. 1 夏島の埋立地をめぐる横須賀市・横浜市の市境が、自治省告示98号をもって確定する。(『官報』) 8.28 相川芳郎(追浜東町)が『御判行私考』を出版する。(左書奥付) 9. 1 『横須賀こども風土記』上巻(上杉孝良著)が、横須賀市民文化財団から発刊される(追浜地区から中央・上町地区まで)。(左書奥付) 10. 1 追浜ポンプ場(追浜本町)が完成し、稼働する。(『神新』) 11. - 「クリオ湘南追浜サニークレスト」(追浜町1丁目・220戸)が竣工する。(聞取調査)
平成元 (1989)	3.31 「明治憲法起草地記念碑」(夏島町)が横須賀市の市民文化資産に指定される。(『市報』) 7.17 横須賀信用金庫と鎌倉信用金庫が合併して、湘南信用金庫と改称、湘南信用金庫追浜支店となる(追浜本町1丁目)。(『神新』) 8. 4 追浜公園軟式野球場で市民納涼のつどいが行われる。(『神新』) 8.10 海洋科学技術センターの「深海6500」が水深6,527メートルの有人潜水世界新記録を樹立する。(『神新』) 8.12 夏島町に市立北部体育会館が完成し、落成式を挙げる。建物面積延5,965.94平方メートル。(『神新』) 9.27 夏島小学校の体育館で不審火があり、床など約20平方メートルを焼く。(『神新』)

年 号	出 来 事
	<p>11.25 「エルシャンテ追浜」ビル（追浜町3丁目）が竣工・開店する。（『神新』）</p> <p>11. - 『追浜工業会30年のあゆみ』（追浜工業会編）が刊行される。（右書奥付）</p> <p>12. 1 『横須賀こども風土記』上巻（上杉孝良著）が横須賀市民文化財団から補訂再版される。（左書奥付）</p>
<p>平成2 (1990)</p>	<p>9.11 日産自動車追浜工場グラウンドで、市主催の第3回交通安全ゲートボール大会が開催され、700人が参加する。（『神新』）</p> <p>10. 1 追浜行政センター管内の人口3万4,700人という。（『市統計書』）</p> <p>12.20 鷹取山石仏の製作者藤島茂、死去する。（『神新』）</p>
<p>平成3 (1991)</p>	<p>3.31 梅田隧道碑(浦郷町1丁目)が横須賀市市民文化資産に指定される。（『文化財』）</p> <p>5.11 市立追浜中学校、創立30周年記念式典を挙げる。（『記念誌』）</p> <p>9.17 三浦信用金庫と藤沢信用金庫が合併し、三浦藤沢信用金庫と改称して業務開始する。（『神新』）</p>
<p>平成4 (1992)</p>	<p>1. 1 追浜地域文化振興懇話会が相模国三浦郡浦郷村『字地書上』を復刻刊行する。（左書奥付）</p> <p>4.26 追浜駅第1自転車駐車が落成する。（『読売』）</p> <p>10.12 金沢野島・夏島地区の行政境界線について、横須賀・横浜の両市長が新協定に調印する。（『神新』）</p>
<p>平成5 (1993)</p>	<p>3.27 湘南病院の院内学級「ねぎぼうず学級」が、17年の活動を終え閉級する。（『神新』）</p> <p>7. 2 海洋科学技術センターの深海総合研究棟が完成する。（『神新』）</p> <p>7.10 沢田秀男（湘南鷹取）、第31代横須賀市長に就任する。（『神新』）</p> <p>11. 6 県立追浜高等学校、創立30周年記念式を挙げる。（『追高記念誌』）</p> <p>11.27 『湘南追浜物語』第2号が追浜郷土史研究会から発行される。（右書奥付）</p>
<p>平成6 (1994)</p>	<p>4.19 追浜行政センターが夏島町9番地（現在地）に新築移転し、開館記念式典を挙げる。（『読売』）</p> <p>11.6 追浜駅前派出所を追浜駅前交番と改称する。（『田浦警察署史』）</p>

年 号	出 来 事
<p>平成7 (1995)</p>	<p>4. 1 旧追浜行政センター（神応橋際）を追浜行政センター分館として開館する。（『市政要覧』）</p> <p>4. 1 追浜管内各小学校の在籍児童数は浦郷小711人、追浜小189人、夏島小454人、鷹取小453人という。（『教育資料』）</p> <p>5.31 海洋科学技術センターが、無人探査機「かいこう」の完成式を挙げる。（『東京』）</p>
<p>平成8 (1996)</p>	<p>2. - 旧傍爾堂周辺の石塔群を祀る屋宇が建設される。（追浜本町1丁目6番地・市境路傍）。</p> <p>2.29 市が募集した道路の愛称に「夏島貝塚通り」が入る。追浜駅前～海洋科学技術センター入口迄、3.5キロ。（『神新』）</p> <p>3.15 追浜駅に完成した市内初の車椅子対応型エスカレータが運行を開始する。（『市広報』）</p> <p>7.20 追浜浄化センター内（浦郷町5丁目）の「追浜・トンボの王国」を一般解放する。（『市概要』）</p>
<p>平成9 (1997)</p>	<p>3. 1 追浜球場の愛称が「横須賀スタジアム」に決定する。（市広報）</p> <p>4. 1 市立鷹取老人デイサービスセンター（湘南鷹取4-7・鷹取小学校敷地内）が事業を開始する。（『市広報』）</p> <p>4.12 海洋科学技術センター、深海調査研究船「かいいい」を建造、一般公開する。（『読売』）</p> <p>5.20 『海軍航空技術廠と横須賀航空隊』を追浜地域文化振興懇話会が発刊する。（『右書奥付』）</p> <p>6. 1 住友重機械工業(株)追浜造船所を横須賀造船所と改称する。（『住友100』）</p> <p>7.10 沢田秀男（湘南鷹取）、第32代横須賀市長に就任（再選）する。（『神新』）</p> <p>7. - 法福寺（追浜本町）、宗祖開宗七百五十年記念事業として、山門の新築工事が竣工する。（『法福寺誌』）</p> <p>11. 2 「甲種飛行予科練習生鎮魂之碑」が貝山緑地に建立される。揮毫横須賀市長沢田秀男。（碑文銘）</p> <p>12. - 「ダイヤパレスウィザス追浜」（追浜東町1丁目、199戸）が竣工する。（聞取調査）</p>
<p>平成10 (1998)</p>	<p>4. 1 追浜地区ボランティアセンターが設立される。（『我が街追浜』）</p>

年 号	出 来 事
	<p>4. ー 戸田フーズ(株)追浜工場が夏島町に開設される。(戸田フーズ HP)</p> <p>6.30 「夏島貝塚出土品」(一括)、国の重要文化財(考古資料)に指定される(明治大学他保管)。</p>
<p>平成11 (1999)</p>	<p>3. ー 法福寺(追浜本町)、宗祖開宗七百五十年記念事業として客殿・庫裡を新築竣工する。同5月22日に記念事業完成の落慶法要式が挙行される。(『法福寺誌』)</p> <p>7.31 京浜急行電鉄(株)のダイヤ改正で、追浜駅がラッシュ時を除き普通車だけの停車駅なる。(『朝日新聞』)</p>
<p>平成12 (2000)</p>	<p>1. ー 住友重機械工業(株)横須賀造船所を横須賀製造所と改称する。(『住友100』)</p> <p>2.20 夏島貝塚発掘調査50周年記念の遺跡見学会とパネル・ディスカッションが行われる(追浜行政センター)。(配布資料)</p> <p>3.10 「榎戸貝塚出土骨角器」(53点)が市重要文化財(考古資料)として指定される。(市公報)</p> <p>7.26 関東自動車(株)横須賀工場(深浦地区)の閉所式が行われ、39年間に及ぶ歴史に幕が下ろされる。(『神新』)</p> <p>11. ー 「第1回日産カップ車椅子マラソン2000」が開催される。以後、例年実施される。(『神新』)</p> <p>この年、追浜行政センター管内の所帯数1万2,275、人口数3万996人(男1万5,702、女1万5,294)という。(『国勢調査』)</p>
<p>平成13 (2001)</p>	<p>3.29 「横須賀リサイクルプラザ」(愛称アイクル、浦郷町5丁目)の落成式を挙行。4月1日より運用開始する。(『神新』)</p> <p>5.12 海洋科学技術センターの掘削孔利用システム「べんけい」を初公開する。(『神新』)</p> <p>7.10 沢田秀男(湘南鷹取)、第33代横須賀市長に就任(3選)する。(『神新』)</p> <p>7.11 神奈川トヨタ整備(株)横須賀工場が完成する(浦郷町5丁目)。(『神新』)</p> <p>9. 4 住友重機械工業(株)の技術センター棟が横須賀製造所内(夏島町)に開設される。(『神新』)</p> <p>9. ー 夏島パークハウス(浦郷町4丁目、70戸)が竣工する。(聞取調査)</p> <p>11.20 追浜地域文化振興懇話会が『追浜ふるさと写真集』(編集委員長上杉孝良)を刊行する。</p>

年 号	出 来 事
平成14 (2002)	<p>1.15 第三海堡の撤去作業で、重さ約800トンに上る探照灯（サーチライト）の台座が引き揚げられる。関東大震災で水没して以来、その姿を現すのは79年ぶり。（『神新』）</p> <p>4. 1 第一勧業銀行追浜支店は、みずほ銀行追浜支店と改称する。（みずほ銀行 HP）</p> <p>10. 1 台風21号が三浦半島を直撃、各地に多数の被害をもたらす。（『神新』）</p> <p>10.7 法福寺（追浜本町）で『法福寺誌』（上杉孝良著）を刊行する。（左書奥付）</p> <p>11. 1 市営サービス工房役所屋の追浜店がサンビーチ追浜内（4F）に開設される。（『市広報』）</p> <p>12. - 京急追浜自動車学校（夏島町）が閉校する。（京急 HP）</p>
平成15 (2003)	<p>4. 1 住友重機械グループの造船事業を担当する新会社として、住友重機械マリンエンジニアリング(株)が設立され、横須賀製造所(造船所)が所属する。（『住友100』）</p> <p>4. 1 横浜商工高等学校、校名を横浜創学館高等学校と改称する。</p> <p>9. - 「サンデュエル湘南浜見台」（浜見台1丁目、111戸）が竣工する。（聞取調査）</p> <p>12. - 第1回「おっぱま（ワイン）寄席」が開催される。（『追浜あんず通信』）</p>
平成16 (2004)	<p>1.15 第三海堡の撤去作業で兵舎とみられる巨大な構造物（約1200屯）を引き揚げる。（『読売』）</p> <p>2.18 第三海堡の引揚構造物を、追浜展示場（浦郷町5丁目・民間施設構内）で一般公開する。（『神新』）</p> <p>4. 1 「海洋科学技術センター」が解散し、同時に独立行政法人「海洋研究開発機構」が発足する。（『官報』）</p> <p>5.23 シンポジウム「追浜に浜を」（主催よこすか海の市民会議）が追浜行政センター（夏島町）で開催される。（『神新』）</p> <p>7. 4 第33回日米大学野球選手権大会が追浜球場で開催される。（『神新』）</p> <p>10. 1 地元の関東学院大学生と追浜商盛会が共同で運営する「追浜こみゆに亭」（追浜町2丁目）が開設される。（『神新』）</p> <p>10.20 台風23号の影響で、夏島の崖崩れなど被害が相次ぐ。（『神新』）</p>

年 号	出 来 事
	<p>10.23 住居表示により「鷹取町」が「鷹取」に変更される。(『市報』)</p> <p>12. - 旧海軍航空技術廠本庁舎(北辰工業(株)横須賀工場)が解体撤去され、跡地に「海軍航空技術廠本庁舎跡地」の碑が建立される。(碑文銘)</p>
<p>平成17 (2005)</p>	<p>3. 1 海洋研究開発機構は深海巡航探査機「うらしま」が317キロメートルの連続航行に成功し、世界記録を打ち立てたと発表する。(『神新』)</p> <p>3.13 湘南病院に精神神経科と老人療養の新病棟「鷹取病棟」が完成する。(『神新』)</p> <p>3. - 「シティ追浜ルーウイング」(夏島町、398戸)が竣工する。(聞取調査)</p> <p>4. 1 追浜管内各小学校の在籍児童数は浦郷小493人、追浜小137人、夏島小336人、鷹取小292人という。(『教育資料』)</p> <p>10. 1 国勢調査の結果、追浜地区の世帯数1万2,500、人口3万436人(男15,438、女14,998)という。(『国勢調査結果報告書』)</p> <p>12.25 「横須賀海軍航空隊地下壕展」が市民活動サポートセンターで開催される。(『神新』)</p>
<p>平成18 (2006)</p>	<p>4. 7 横須賀市は追浜地域文化振興懇話会に委託して発刊した『追浜の四方山話』に、不適切な記載があったとして回収を決める。(『神新』)</p> <p>9.15 追浜商盛会の「追浜こみゆに亭&ワイナリー」が市制百周年を記念してワインを完成させ、販売を開始する。(『神新』)</p> <p>10. - 追浜地域包括支援センターが湘南病院内(鷹取1丁目)に開設される。(聞取調査)</p> <p>11.18 第三海堡の撤去作業で海中から引き揚げられた巨大構造物を追浜展示場(浦郷町5丁目)で一般公開する。(『神新』)</p> <p>11.23 矢澤種吉著『人生は苦楽覚悟の旅衣』が発刊される。自分史で、大正・昭和の追浜界隈の様子が知れる。(左書奥付)</p>
<p>平成19 (2007)</p>	<p>4. 1 市営深浦ポートパーク(浦郷町2丁目)が開業する。(『神新』)</p> <p>4. 5 本浦会館付属の火見やぐら(追浜本町)が解体・撤去される。(聞取調査)</p> <p>12.19 日産自動車(株)追浜工場が昭和36年創業以来の生産累計台数が1,500万台を達成したと発表。(『神新』)</p>

年 号	出 来 事
平成20 (2008)	<p>2. - 「山の脇トンネル」(29日、追浜東町2丁目)が竣工する。(銘板)</p> <p>3.31 県立横須賀高等職業技術校(旧横須賀公共職業補導所、浦郷町4丁目)が閉校する。(『神新』)</p> <p>4. 1 追浜行政センター併設の横須賀市教育委員会追浜公民館が閉館し、横須賀市市民部コミュニティセンターが開館する。(『神新』)</p> <p>7.13 雷神社の天王祭で宮神輿の渡御が47年振りに復活する。(『神新』)</p> <p>11. - 追浜地区社会福祉協議会が記念誌『我が街追浜』を発刊する。(右書奥付)</p>
平成21 (2009)	<p>1.31 追浜駅前の「サンビーチ追浜」のテナント西友追浜店が撤退、閉店する。(『神新』)</p> <p>2. 6 NPO 法人アクションおっぱま(理事長昌子住江)が認証設立される。(アクションおっぱま HP)</p> <p>2. - おっぱまはっけん倶楽部(会長片岡博)が発足する。(おっぱまはっけん倶楽部 HP)</p> <p>4.27 市動物愛護センター(浦郷町5丁目)の完成式典が行われる。(『神新』)</p> <p>5.12 日産自動車(株)は電気自動車(EV)を、追浜工場(夏島町)を拠点として生産すると発表。(『神新』)</p> <p>8. 7 田川誠一(元自治相・日向)が死去する。享年91歳。墓所は榎戸・正観寺。(『神新』)</p> <p>10.29 小規模校に該当する追浜小学校と鷹取小学校との統合問題は、当面、現行体制を維持するものと決定。(『神新』)</p>
平成22 (2010)	<p>3.20 第1回「Yフェスタ追浜」が京急追浜駅前と貝山緑地周辺を主な会場に開催される。(『神新』)</p> <p>3.27 「夏島貝塚発掘60周年記念シンポジウム」(追浜行政センター集会室)が開催される。(配布資料)</p> <p>4. 1 良心寺の「豊臣秀吉禁制(木札)」が横須賀市重要文化財に指定される。(『市報』)</p> <p>8.19 第三海堡の構造物4基の内3基を、一時保管していた浦郷町より市の夏島都市緑地内(夏島町)への移設・保存作業が終了する。(『神新』)</p>

年 号	出 来 事
	<p>10. 1 国勢調査の結果、追浜地区の所帯数1万2,608、人口2万9,380人。町別人口 鷹取2,468、湘南鷹取8,040、追浜本町4,602、追浜町2,992、追浜南町1,320、追浜東町4,219、浜見台1,200、夏島町1,367、浦郷町3,172（浦郷町1丁目968、2丁目804、3丁目835、4丁目564、5丁目1）という。（『国勢調査』）</p> <p>10.24 鷹取山（湘南鷹取）の景観保全活動の一環として、クライマーや地元住民による雑草木などの除去作業が行われる。（『神新』）</p> <p>11.23 夏島都市緑地（夏島町）に整備された第三海堡の遺構展示場の披露式典が行われる。（『神新』）</p>
<p>平成23 (2011)</p>	<p>3.11 東日本大震災により、避難や道路、鉄道、電気など多大な影響あり。（『神新』）</p> <p>6.12 第三海堡遺構移設記念シンポジウム（主催NPO法人アクションおっぱま）が開催される（「アイクル」講堂）。</p> <p>9. ー 追浜地域運営協議会（会長澄川貞介）が、モデル地区として発足する。（追浜地運協 HP）</p>
<p>平成24 (2012)</p>	<p>2.26 第1回追浜マラソン（主催追浜連合町内会）が開催される。従来 の追浜健康マラソンを改め、本格的なマラソン競走とし例年実施 される。（『神新』）</p> <p>2. ー 「ルネ追浜」（追浜東町2丁目）が竣工。増築で現在7棟420戸。 （聞取調査）</p> <p>3.12 追浜観光協会はコスチュームプレーで人気の「キキワン」に追浜 の観光大使を委嘱する。（『神新』）</p> <p>4. 1 夏島都市緑地内（夏島町）にドッグラン広場（1,130平方m）が 開設される。（『神新』）</p> <p>4.28 海洋研究開発機構（旧海洋科学技術センター）、宮城県沖の海底を 掘削していた地球探査船「ちきゅう」のドリルが、深さ7,740 メートルまで達し、世界記録を更新したと発表。（『神新』）</p> <p>7.20 『追浜の歴史探訪』（青木猛著）が発行される。（左書奥付）</p> <p>9.25 京急線追浜・京急田浦駅間の線路脇斜面で土砂崩れが発生、走行 中の特急電車が脱線し53人が重軽傷を負う。（『神新』）</p> <p>9. ー 「ザ・パークハウス追浜」（追浜東町2丁目・270戸）が竣工する。 （聞取調査）</p> <p>11.10 県立追浜高等学校、創立50周年記念式典を横須賀芸術劇場で挙 行する。（『追浜高校記念誌』）</p>

年 号	出 来 事
平成25 (2013)	<p>1.21 第1回追浜七福神めぐり(主催追浜観光協会)が開催され、多数の応募者が参加する。(『神新』)</p> <p>4. 1 「サンビーチ追浜」からキーテナントの横須賀産業(ヨコサン)が撤退、代わりに京急ストア追浜支店が開店する。(『神新』)</p> <p>4. 1 スパーク浦郷店(浦郷町1丁目)が京急ストアスパーク浦郷店として新たに開店する。(『神新』)</p> <p>5. - 「アクアテラス追浜」(浦郷町2丁目、85戸)が落成する。(アクアテラス追浜HP)</p> <p>11.22 駅前「サンビーチ追浜」で、「第1回追浜界限おもしろ写真展」が開催される。主催おっぱまはっけん倶楽部。(『神新』)</p>
平成26 (2014)	<p>1. 6 三浦藤沢信用金庫がかながわ信用金庫と改名、かながわ信用金庫追浜支店となる(追浜本町1丁目)。(『神新』)</p> <p>11. - 「ザ・パークハウス追浜」(追浜東町2丁目)の全棟完成。開発面積8万6,156平方メートル、戸数709戸。(聞取調査)</p>
平成27 (2015)	<p>4. 1 海洋研究開発機構が独立行政法人から国立研究開発法人となり、名称を変更する。</p> <p>5.10 官修墓地(浦郷町4丁目)に眠る榊原謙齋(新潟県土族・新選旅団所属・明治10年10月29日没)の曾孫4人が、138年ぶりに墓参のため追浜を訪れる。(『神新』)</p> <p>7.12 追浜駅前の銀座通りを中心に「追浜まつり」が、盛大に開催される。(『神新』)</p> <p>10.1 追浜行政センター管内の人口3万1,705人という。(『市統計書』)</p>
平成28 (2016)	<p>1. 1 追浜地区に人工干潟を整備する計画が市港湾部で検討され、場所は市リサイクルプラザ前の海域という。(『神新』)</p> <p>8.11 「コミュニティひろば湘鷹みんなの部屋」(湘南鷹取4丁目)が開設される。(あんずの里通信)</p> <p>10. 1 追浜行政センター管内の世帯数1万4,897、人口数3万1,946人という。(『市統計書』)(町別人口数)鷹取2,152、追浜本町4,450、夏島町1,376、浦郷町3,630、追浜東町7,128、浜見台2,324、追浜町2,954、追浜南町1,295、湘南鷹取7,767。</p> <p>11.26 「NPO法人アクションおっぱま」が第29回神奈川地域社会事業賞(主催神奈川新聞厚生文化事業団)を受賞する。(『神新』)</p>

出典対照・略称一覧

(横須賀市史関係)

『市史50』	『横須賀市史』(市制施行50周年記念)	横須賀市	昭和32年
『市史80』	『横須賀市史』(市制施行80周年記念)	横須賀市	昭和63年
『市史80』別	『横須賀市史』別巻(市制施行80周年記念)	横須賀市	昭和63年
『新市史』資古中Ⅰ	『新横須賀市史』資料編古代中世Ⅰ	横須賀市	平成16年
『新市史』資古中Ⅱ	『新横須賀市史』資料編古代中世Ⅱ	横須賀市	平成19年
『新市史』資古中補	『新横須賀市史』資料編古代中世補遺	横須賀市	平成23年
『新市史』資近世Ⅰ	『新横須賀市史』資料編近世Ⅰ	横須賀市	平成19年
『新市史』資近世Ⅱ	『新横須賀市史』資料編近世Ⅱ	横須賀市	平成17年
『新市史』資近現Ⅰ	『新横須賀市史』資料編近現代Ⅰ	横須賀市	平成18年
『新市史』資近現Ⅱ	『新横須賀市史』資料編近現代Ⅱ	横須賀市	平成21年
『新市史』資近現Ⅲ	『新横須賀市史』資料編近現代Ⅲ	横須賀市	平成23年
『新市史』通近世	『新横須賀市史』通史編近世	横須賀市	平成23年
『新市史』別文	『新横須賀市史』別編文化遺産	横須賀市	平成21年
『新市史』別考	『新横須賀市史』別編考古	横須賀市	平成22年
『新市史』別軍	『新横須賀市史』別編軍事	横須賀市	平成24年
—	『横須賀百年史』横須賀百年史編さん委員会		昭和40年

(中世関係)

『金沢氏資料』	『金沢北条氏編年資料集』	八木書店	平成25年
『風土記稿』	『新編相模国風土記稿』	大日本地誌大系22	昭和33年
『由緒書』	『能永寺由緒書』	能永寺所蔵	文化11年
『総合調査』5	『横須賀市文化財総合調査報告書』第5集	横須賀市	昭和60年
—	『武家年代記裏書』	続史料大成18 臨川書店	昭和42年
—	『長立筆能永寺境書置』	能永寺所蔵	応永元年
—	『廻国雑記』	群書類従第18輯 紀行部	
—	『関東禅林詩文等抄録』	東京大学史料編纂所蔵	明応年間
—	『法福寺誌』	法福寺	平成14年
—	『鎌倉大日記』	頼朝会	昭和12年
—	『日本地震史料』	地震予防調査会 思文閣	昭和48年
—	『合併伺』	横須賀市所蔵	明治10年
—	『金沢文庫古文書』	県立金沢文庫	昭和27年
—	『北条五代記』	改訂史籍集覧5 臨川書店	昭和59年
—	『快元僧都記』	群書類従第25輯 雑部	
—	『小田原衆所領役帳』	続群書類従25輯上 武家部	

- 『北条記』 続群書類従第21輯上 合戦部
- 『相州文書』 相州古文書第5巻 神奈川県教育委員会 昭和45年
- 『関八州古戦録』 改訂史籍集覧5 臨川書店 昭和59年
- 『正観寺誌』 宮沢善正著 正観寺 昭和52年

(近世関係)

- 『皇国残稿』 『神奈川県皇国地誌残稿』上巻 神奈川県図書館協会 昭和38年
- 『建長末』 『建長寺史』末寺編 建長寺史編纂委員会 昭和52年
- 『寄附等調』 『寄附什物其外取調帳』(各寺院) 明治6年
- 『鎌倉年表』 『図説 鎌倉年表』 鎌倉市 平成元年
- 『鎌倉紀行』 『鎌倉市史』近世近代紀行地誌編 鎌倉市 昭和60年
- 『自得寺由緒』 『自得寺由緒・法会規式書上帳』 自得寺所蔵 文化11年
- 『製塩覚書』 『三浦郡の製塩に関する覚書』(高橋恭一自筆断簡) 年不詳
- 『松平藩記録』 『川越松平藩記録』 前橋市立図書館所蔵
- 『通統』5 『通航一覽統輯』第5巻 箭内健次郎 清文堂出版 昭和48年
- 『彦根文書』 『彦根藩井伊家文書』 彦根城博物館所蔵
- 『ペリー遠征』 『ペリー提督日本遠征記』 法政大学出版局 昭和28年
- 『寛政譜』2 『新訂 寛政重修諸家譜』第2 続群書類従完成会 昭和39年
- 『鈴木家文書』 『武蔵国久良岐郡野島浦鈴木家文書』 神奈川県立公文書館所蔵
- 『船廠史』I 『横須賀海軍船廠史』第一巻 横須賀海軍工廠編 大正4年
- 『県史』資料編9・10 『神奈川県史』資料編9・10巻 神奈川県 昭和53・54年
- 『徳川実記』 新訂増補国史大系全15巻 吉川弘文館 昭和51年
- 『瀬戸神社』 佐野大和著 昭和43年
- 『田浦町誌』 三浦郡教育会第一部 昭和3年
- 『正観寺誌』 宮沢善正著 正観寺 昭和52年
- 『葉山町史料』 葉山町教育委員会 昭和33年
- 『法福寺誌』 上杉孝良著 法福寺 平成14年
- 『相模国月牌帳』 高野山高室院文書143, 194, 195巻所収
- 『相模檀那登山帳』1～8 高野山高室院所蔵 宝永～天明
- 『世安家文書』 横須賀市文化財総合4 横須賀市教委 昭和59年
- 『鎌倉巡礼記』 続群書類従33輯下雑部
- 『(仮)浦郷村社寺雑録』 横須賀市所蔵文書
- 『大日本地震史料』(全3巻) 震災予防協会 思文閣 昭和48年
- 『逗子市史』通史編 逗子市 平成9年
- 『逗子市史』資料編I 逗子市 昭和60年
- 酒井忠清宛『領知判物』 『逗子市史』資料編I 昭和60年
- 酒井忠拳宛『領知判物』 『逗子市史』資料編I 昭和60年

—	『相州三浦郡秋谷村若命家文書』上	横須賀市中央図書館	昭和 52 年
—	『自得寺文書』	自得寺所蔵	
—	『羽田史誌』	羽田神社 (橋爪隆尚)	昭和 50 年
—	『尾州御用日記』	横須賀市文化財調査報告書第 6 集	『永嶋重美家漁業関係文書』所収
—	『相中留恩記略』	有隣堂	昭和 42 年
—	『新編三浦往来』	『神奈川県郷土資料集成』第 7 輯	昭和 47 年
—	『福本三郎家文書』	横須賀市中央図書館	昭和 30 年
—	堤磯右衛門『懐中覚』	横浜開港資料館	昭和 63 年
—	『三浦紀行』	『鎌倉市史』近世近代紀行地誌編	昭和 60 年
—	『相州海岸紀行』	『神奈川県郷土資料集成』第 6 輯	昭和 44 年
—	『江の島紀行』	雑誌『鎌倉』12 号	鎌倉文化研究会
—	『箱根日記』	『神奈川県郷土文学資料』	県教育委員会
—	『逗子市誌』第 5・6 集	逗子市役所	昭和 43～48 年
—	『藤沢市史』第 2 卷	藤沢市役所	昭和 48 年
—	『鎌倉』12 号	鎌倉文化研究会	昭和 39 年

(近代・現代関係)

『浦郷村戸籍』	『第拾五区壺番組相模国三浦郡浦郷村戸籍 全』	明治 6 年
『県教育史』	『神奈川県教育史』資料編第 4 卷	神奈川県教育委員会
『市体育史』	『横須賀市体育のあゆみ』	横須賀市教育委員会
『浦小沿革』	『浦郷小学校沿革誌』(創立八拾周年記念)	浦郷小学校
『太政類典』	『太政類典』第 2 編 216 卷	国立公文書館所蔵
『市教育史』	『横須賀市教育史』	横須賀市教育研究所編
『土木史』	『土木史』	赤星直忠著
『横貿』	『横浜貿易新聞』(明治 23 年 2 月～37 年 6 月)、	
	『横浜貿易新報』(明治 39 年 12 月～昭和 15 年 12 月)	
『貿新』	『貿易新報』(明治 37 年 7 月～39 年 12 月)	
『航空史』	『日本海軍航空史』	日本海軍航空史編纂委員会編
		時事通信社
『海軍営繕研』	『明治期における海軍省営繕事業の歴史的研究』	中島久男著
『逗子年表』	『逗子の三代史 明治大正昭和の年表』	手帳の会
『市博研』5	『横須賀市博物館研究報告(人文科学)』第 5 号	市博物館
『官報』		内閣印刷局ほか編
『教育年表』	『横須賀市を中心とした教育史年表』(明治大正昭和)	昭和 31 年
『県体育史』	『神奈川県体育史』	神奈川県教育委員会
『民主運動史』	『横須賀民主主義運動史年表』	民主主義運動史編纂会

『トンネル』	『横須賀のトンネル』 土方健次郎著	平成 2 年
『横経史新』	『横須賀経済経営史年表・新版』 横須賀商工会議所	平成 2 年
『商工11』	『横須賀商工案内』昭和 11 年度版 横須賀商工会議所	昭和 11 年
『市震災誌』	『横須賀市震災誌附復興誌』 横須賀市震災誌刊行会	昭和 7 年
『京急80』	『京浜急行八十年史』 京浜急行電鉄株式会社	昭和 55 年
『県公報』	『神奈川県公報』 神奈川県編	
『商工36』	昭和 36 年度『商工名鑑』 横須賀商工会議所	昭和 36 年
『此処』	『此処に人あり』 夕刊横須賀新聞社	昭和 40 年
『工廠沿革』 続	『横須賀海軍工廠沿革誌 続編』(自昭和 3 年至 7 年)	昭和 54 年
『共済病院80』	『横須賀共済病院80年誌』 横須賀共済病院編	昭和 62 年
『県災害誌』	『神奈川県気象災害誌』 神奈川県編	昭和 46 年
『市事務報告』	『横須賀市事務報告』各年版 横須賀市編	
『県社会』	『神奈川県社会事業史』 吉村良司著	昭和 61 年
『市公報』	『横須賀市公報』横須賀市編(大正 7 年 4 月～昭和 24 年 9 月)	
『地区覚書』	『(仮)田浦・浦郷地区覚書』 西山太郎編	年未詳
『工業30』	『追浜工業会30年の歩み』(30周年記念誌) 追浜工業会	平成元年
『教育年表』	『横須賀を中心とした教育史年表』横須賀市教育研究所	昭和 38 年
『教育資料』	『横須賀教育史資料』No.15、16 横須賀市教育研究所	昭和 62 年
『市勢要覧』	『市勢要覧』各年版 横須賀市編	
『市公園』	『公園要覧』昭和 56 年版 横須賀市環境保全部編	昭和 56 年
『市政時報』	『横須賀市政時報』横須賀市編(昭和 24 年 10 月～33 年 12 月)	
『商工名鑑』 29	『横須賀・三浦商工名鑑』(昭和 29 年版) 横須賀商工会議所	
『市報』	『横須賀市報』横須賀市編(昭和 24 年 9 月 25 日～)	
『提供施設』	『提供施設の推移』 神奈川県渉外部編	昭和 58 年
『湘南病50』	『創立五十周年記念文集』 総合病院湘南病院編	平成 8 年
『戦後教育』	『戦後の横須賀教育』NO.6、7 横須賀市教育研究所	昭和 39 年
『市概要』	『横須賀市事務概要』各年度版 横須賀市編	
『議会史』 記I	『横須賀市議会史』記述編I (株)ぎょうせい	平成 17 年
『日産64』	『日産自動車史 1964～1973』 日産自動車(株)編	昭和 50 年
『追小50』	『おっばま 創立 50 周年記念誌』 追浜小学校	平成 3 年
『下水概要』	『横須賀市下水道事業概要』各年度版 横須賀市下水道部編	
『住友100』	『浦賀・追浜百年の航跡』 住友重機械工業(株)横須賀造船所編	平成 9 年
『海洋10』	『海洋科学技術センター十年史』海洋科学技術センター	昭和 56 年
『公民10』	『おっばま公民館開館 10 周年を記念して』 追浜公民館	昭和 58 年
『夏島20』	『創立 20 周年記念誌 なつしま』 夏島小学校編	昭和 54 年
『古老』 北	『古老が語るふるさとの歴史』 北部編 横須賀市編	昭和 56 年

『総合調査』 5	『横須賀市文化財総合調査報告書』 第5集北部地区	横須賀市教育委員会	昭和60年
『市民文化5』	『市民文化財団5年のあゆみ』	横須賀市民文化財団	平成元年
『文化財』	『よこすかの文化財』	横須賀市教育委員会編	平成19年
『東京』	『東京新聞』		
『国勢調査』	『横須賀市国勢調査結果報告書』 各実施年版	横須賀市	
『岡村70』	『岡村製作所70年史』	(株)岡村製作所	平成28年
『追高40』	『創立40周年記念誌 追濱』	神奈川県立追浜高等学校	平成14年
『神新』	『神奈川新聞』	神奈川新聞社	昭和17年～
—	『続々歌舞伎年代記』	市村座	大正11年
—	『追浜とその付近』	伊香輪一虎著	昭和15年
—	『横須賀の町名』	横須賀市都市整備部都市整備課	平成元年
—	『逗子市誌』 1～9	逗子市誌編集委員会	昭和30年～56年
—	『三浦古文化』 5	三浦古文化研究会	昭和44年
—	『三浦半島城郭史』 上下	赤星直忠著 市教育委員会	昭和30年
—	『浦郷村郷土誌』	浦郷村編	明治44年
—	『浦郷村の今昔』	笹川隆司著	昭和57年
—	『神社明細帳(三浦郡)』	神奈川県図書館協会	平成10年
—	『田山花袋研究』	岩永胖著	昭和31年
—	『明治小田原町誌 中』	小田原市立図書館	昭和50年
—	『桜の御所』	村井玄斎著 春陽堂	明治27年
—	『直言』 『明治社会主義史料集』 第1集所収		昭和35年
—	『三浦繁盛記』	岡田緑風著 公正新聞社	明治41年
—	『牡蠣礼讃』	畠山重篤著 文春新書	平成18年
—	『回想』	田川誠治(遺稿)	昭和41年
—	『有島武郎全集』 第13巻書簡	筑摩書房	昭和59年
—	『横須賀市史稿』(市制施行30周年記念)	横須賀市	昭和12年
—	『三浦郡誌』	三浦郡教育会編	大正7年
—	『寺田寅彦全集』 第14巻日記	岩波書店	昭和36年
—	『横須賀医師会略史』(創立六十周年記念)		昭和41年
—	『追浜二丁目平和会のあゆみ』	平和会編	平成28年
—	『留守中日記』(昭和16年6月～19年2月)	斎藤功子著	
—	『横浜市歴史博物館紀要』 第1号	横浜市歴史博物館	平成8年
—	『古川緑波昭和日記』(戦中編)	晶文社	昭和62年
—	『占領下の横須賀』	毛塚五郎著	平成5年
—	『夏島貝塚』	杉原荘介著 中央公論美術出版	昭和39年
—	『田浦警察署史』	田浦警察署	平成11年

- 『横須賀市と基地』(昭和 61 年度版) 横須賀市編 昭和 61 年
- 『郷土の歴史』 丸山正男著 昭和 37 年
- 『公社のあゆみ』 横須賀市都市施設公社
- 『図説 かなざわの歴史』 金沢区制五十周年記念事業実行委員会
平成 13 年
- 『神奈川県技術高等学校の設立と廃止』 柏木操男著 『神奈川県戦
後教育史』 所収 平成 10 年
- 『横須賀市統計書』 各年度版 横須賀市編
- 『横須賀市体育協会史』 横須賀市体育協会編 昭和 60 年
- 『追浜探訪』 第 1 号 追浜の歴史を探る会 昭和 59 年
- 『湘南追浜物語』 追浜郷土史研究会 平成 5 年
- 『海軍航空技術廠と横須賀航空隊』 追浜地域文化振興懇話会
平成 9 年
- 『追浜ふるさと写真集』 追浜地域文化振興懇話会 平成 13 年
- 『追浜あんず通信』 1号～ NPO 法人アクションおっぱま
- 『人生は苦楽覚悟の旅衣』 矢澤種吉著 平成 18 年
- 『追浜本町第一部会 名鑑』 編纂市民タイムズ社
- 『海軍空技廠』 碓義朗著 光人社 昭和 60 年

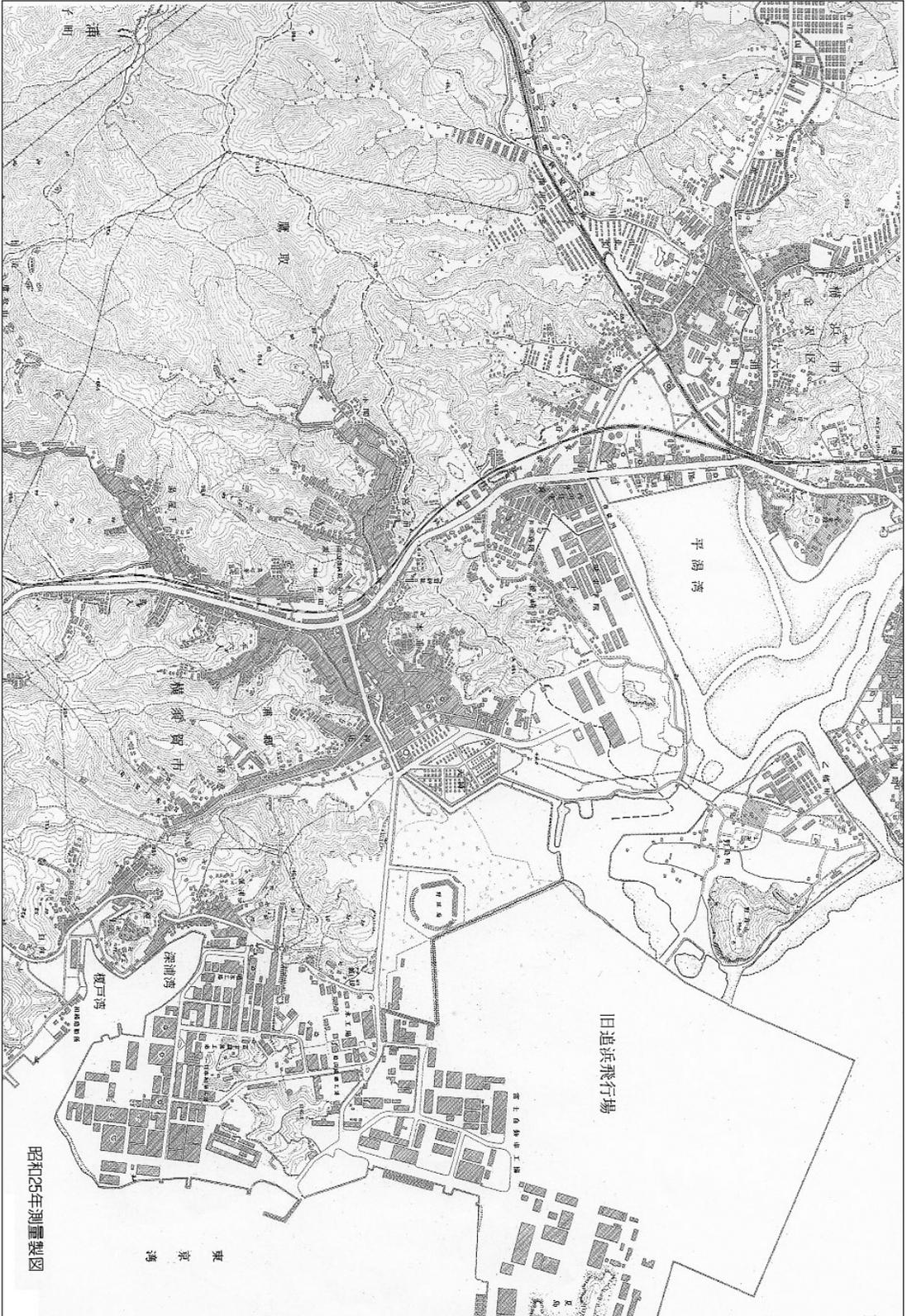
(参考文献)

- 『三浦半島考古学事典』 横須賀考古学会編 平成 21 年
- 「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」 明治大学文学部研究報告(考古学)
明治大学 昭和 33 年
- 「神奈川県横須賀市夏島貝塚」 芹沢長介著 日本考古学年報(8、昭和 30 年度):日本考
古学協会 昭和 34 年
- 『夏島貝塚』 杉原荘介著 中央公論美術出版 昭和 39 年
- 「国史跡 夏島貝塚」 岡本勇著 神奈川県文化財図鑑(史跡編) 昭和 53 年
- 「横須賀市榎戸貝塚について」 赤星・小笠原著 考古学 8(11) 昭和 12 年
- 「榎戸 B 貝塚出土の遺物」 角井勉著 横須賀考古学会年報 昭和 50 年
- 『先史時代の三浦半島(天神遺跡)』 赤星直忠著 三浦半島研究会 昭和 25 年
- 『横須賀市なたぎり遺跡』 横須賀市史別冊 横須賀市博物館 昭和 29 年
- 『横須賀市なたぎり遺跡 B 地点』 発掘報告書 なたぎり遺跡調査団 昭和 54 年
- 『鉦切遺跡』 C・D 地点の調査 横須賀市文化財調査報告書第 12 集 昭和 61 年
- 『鉦切遺跡 E 地点』 横須賀市文化財調査報告書第 26 集 平成 4 年
- 『横須賀市史』 横須賀市の発展 101～171、赤星直忠 横須賀市 昭和 32 年
- 「「丹生」について」(天神横穴) 赤星直忠、横須賀考古学会年報 21 昭和 53 年
- 『追浜地区 考古資料図録』(1) 大塚真弘他、横須賀人文博物館 昭和 60 年

『横須賀市天神やぐら群の調査』 急傾斜地防災工事に伴う緊急調査	昭和 61 年
『横須賀市天神やぐら群の 2 次調査』 急傾斜地防災工事に伴う緊急調査	昭和 61 年
『和田山やぐら群の第 3 次調査』 急傾斜地防災工事に伴う緊急調査	平成 7 年
『和田山やぐら群の第 4 次調査』 急傾斜地防災工事に伴う緊急調査	平成 8 年
『和田山やぐら群の第 5 次調査』 急傾斜地防災工事に伴う緊急調査	平成 9 年
『和田山やぐら群 (法福寺山門地点)』 横須賀市文化財調査報告書第 32 集	平成 10 年
『榎戸やぐら群発掘調査報告』 横須賀市文化財調査報告書第 35 集	平成 12 年
『陣屋谷戸やぐら群遺跡』 かながわ考古学財団調査報告 84	平成 12 年
『和田山やぐら群遺跡』 かながわ考古学財団調査報告 85	平成 12 年
『和田山やぐら群遺跡Ⅱ』 かながわ考古学財団調査報告 119	平成 13 年
『和田山やぐら群遺跡Ⅲ』 かながわ考古学財団調査報告 148	平成 15 年
『平六ヶ入やぐら群』 かながわ考古学財団調査報告 159	平成 15 年
『正禅寺やぐら群』 かながわ考古学財団調査報告 173	平成 16 年
『正観寺やぐら群』 かながわ考古学財団調査報告 177	平成 16 年
『日向やぐら群』 かながわ考古学財団調査報告 203	平成 18 年



明治三十六年測量（今井政吉氏作図）



昭和28年測量製図

〈表紙写真・夏島式土器〉

「夏島式土器」は縄文早期の遺跡である夏島貝塚の最下層から出土した土器で、縄文や撚糸文の文様をもつ底の尖った土器の呼称です。

その年代は伴出した貝殻や木炭から凡そ九五〇〇年前とされ、縄文時代の年代観の見直しのきっかけとなったものです。

(明治大学博物館蔵)

〈編者紹介〉

一九三一年生(以下元歴)

横須賀市市長室参事(文化行政担当)

横須賀市立中央図書館館長

横須賀市史専門委員

横須賀市文化財専門審議会委員長

◆新・追浜歴史年表◆

令和元年(二〇一九年)八月発行

編者 上杉 孝良

発行 追浜地域運営協議会

事務局追浜行政センター

横須賀市夏島町九番地

電話 〇四六一八六五一一一一

印刷 丸庄有限会社

横須賀市追浜東町二―三七

電話 〇四六一八六五―四二四八